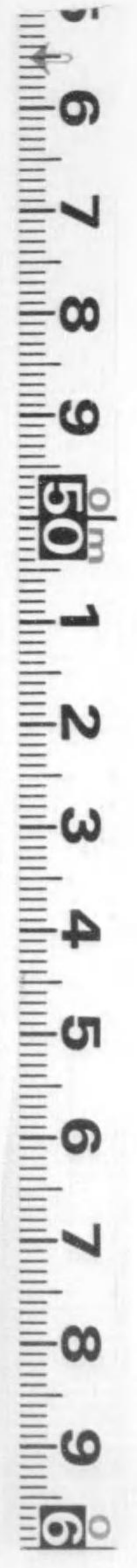
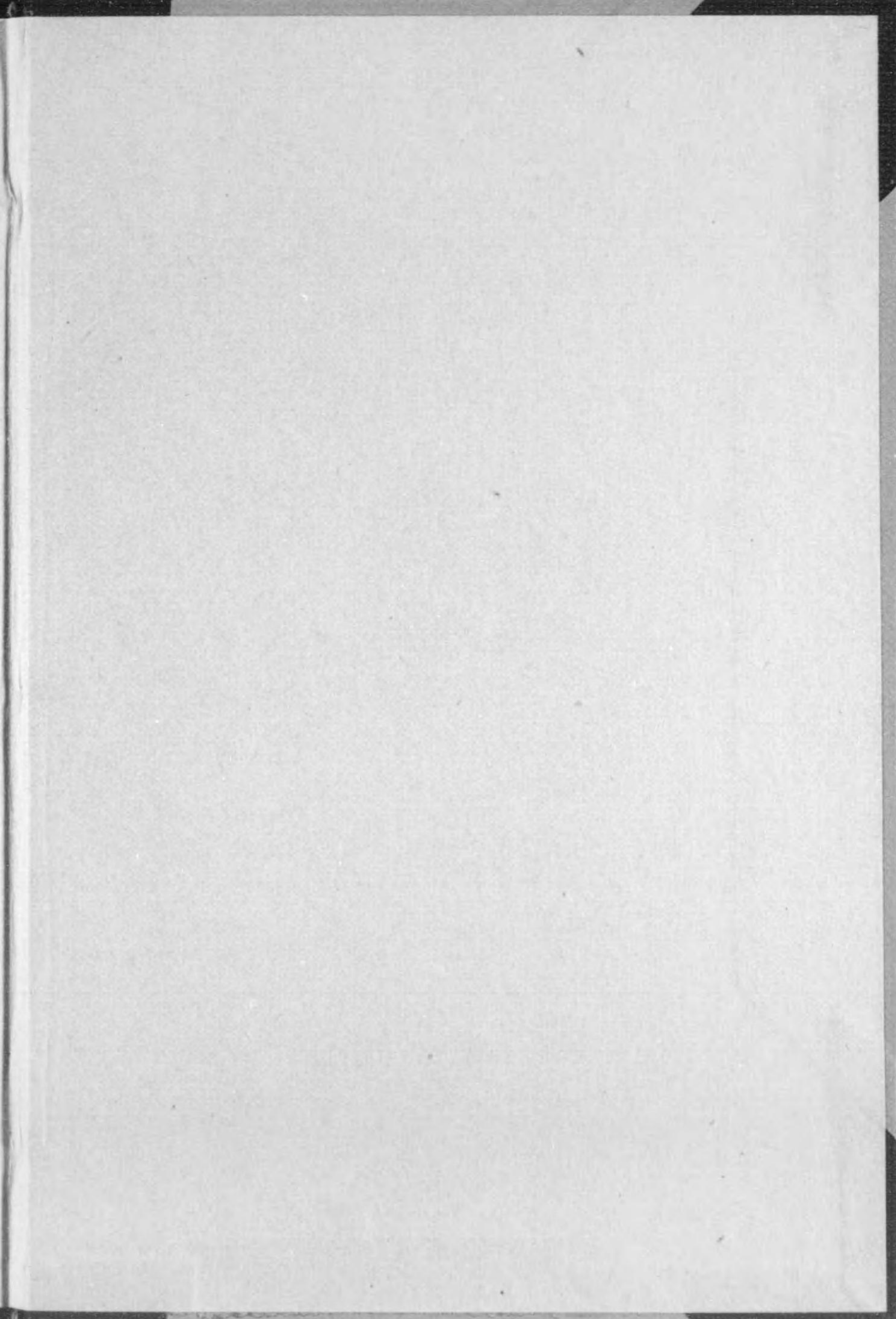
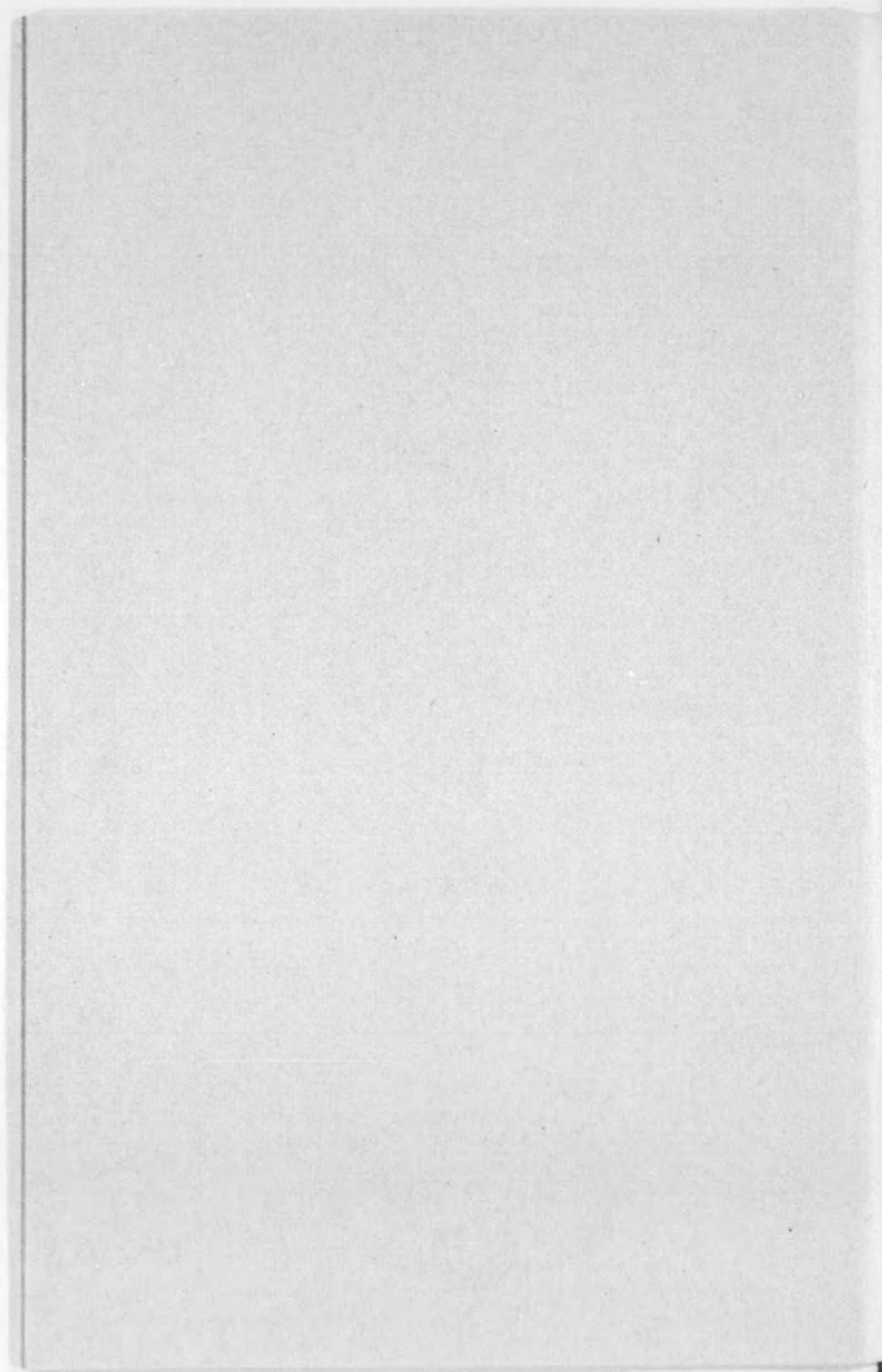


325
473



始





21181

325-473



約翰傳五十講

大正
0. 1. 6
内交

序

此書は、日本基督教興文協會より發行するものなり。而して本協會の事業は下文に定むる如し。

『日本基督教興文協會の事業は、日本の基督教信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及び弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず』。

倉長巍氏はヨハネ傳の講解を物して、有益なる奉仕を成し遂げられた。此の福音書は新約聖書文學の偉大なる部分の一つであつて、羅馬書と共に、基督教的啓示の永久的表現と見做される。教會の權威を重する者は使徒ペテロを高揚するが、一方には使徒パウロを宗教改革の指導と見做す者がある。

パウロは個人の生活に於ける救拯の徑路を反省の題目とした最初の人である。使徒ヨハネは基督教が根本的に道德的宗教であることを明白に把持した最初の人である。『神を愛する者は亦その兄弟を愛すべし。此の誠は我儕彼より授けられたり。』

ヨハネとパウロとは次ぎの點に於て相類似して居る。基督教に關する彼等の註解は、ユダヤ教の如き古いものから來たのではなく、眞の基督、即ち神の道德性が啓示されて居る眞の歴史的個人から來たのである。『律法はモーセに由りて與へられ、恩寵と眞理とは耶穌基督に由りて來る』。モーセは組織と禮拜との舊約系を紹介した。然し恩寵と眞理とは、其

の人格と神の啓示とが區別し得られざる耶穌基督に由りて世界に入り來つた。

ヨハネの福音書に、人たる基督の完全と神たるロゴスとが共に記述されてあることは著しいところである。之に由つて一方には基督を唯だ人と見做す平凡な思考と、他方には基督に人性の餘地を與へざる幻想的、精靈的思考との兩極端を避けて居るのである。

基督教の二大團體は、一方にペテロを高揚し、他方にパウロを高揚する。我等は東洋に來つて、始めて使徒ヨハネの深邃な靈的洞察力を十分に理會することが出來ぬであらうか。斯る希望を以て、余はヨハネ傳研究に力を致された此の書の出版を歓迎する。

大正五年十二月

エス・エチ・ウエンライト

はしがき

□四福音書は、それ／＼其特色を帯びて居ますが、殊に使徒ヨハネの傳へた福音書は、最も能くイエスの内的生活を描寫して我等に永遠の生命の秘義を啓示して居ると思ひます。私は平素此の福音書を愛讀して居ます。そして三年繼續全國協同傳道の將に終りを告げんとする際、私は感謝と希望と歡喜とを以て此の極めて拙ない講解を公にします。もし此の講解が幾分にも讀者に貢獻するものあらば幸甚と思ひます。

□本書は註釋書の如く節毎に一々註釋を下さず、各章の中、著しき節につきて講解を試みました。そして此の講解は主としてヘスチングの『聖書の大題目』及びマアカス・ドッヅの『使徒ヨハネの福音』に據り、又デネエーの『イエスと福音』、ジヨージ・マセソンの『新約の代表的人物』、クラークの『イエスのアイデアル』等の外、二、三の註釋書を参考に致しました。

□本書五十講の中、三十五講までは、昨年の晩春頃から本年の七月まで、週刊『護教』の

研究欄に連載したものであります。

大正五年八月

著者識

ヨハネ福音書の分解

- 一、序言 (二〇一—二八)
- 二、イエスの最初の發表 (二〇一九—四十四)
 - (イ) パプテスマのヨハネの證言 (二〇一九—四十四)
 - (ロ) 個人に對する發表 (二〇四一—二〇十二)
 - (ハ) 世間に對する發表 (二〇二十一—四〇五四)
- 三、完き啓示。ユダヤ人間に於ける不信の生長 (五〇一—二二〇五十五)
 - (イ) 生命 (五〇一—六〇七十一)
 - (ロ) 眞理。光。愛。 (七〇一—一〇四二)
 - (ハ) 生命。眞理。光。愛に就ての全き啓示。ユダヤ人等の敵意ある不信 (十二〇〇—一五十一)
- 四、完き啓示。弟子の間に於ける信仰の發達 (十三〇一—一七〇二六)
- (イ) 謙れる愛 (十三〇一—一三四)

- (ロ) 信仰者への最後の告別の辭 (十三〇卅五—十六〇三十三)
 - (ハ) 仲保の祈り (十七〇—二一六)
 - 五、不信の頂點。服従。十字架 (十八〇—一九〇四二)
 - 六、信仰の頂點。復活。證明 (二十〇)
 - 七、増補。(二十一〇) (アーチデーコン・ワトキンスに據る)
- 以上

ヨハネ傳五十講

目次

| 次 | 目 | 頁 |
|-----|-------------|----|
| 第一講 | 緒言 | 一 |
| 第二講 | イエスの受肉説 | 六 |
| 第三講 | 神の羔を觀よ | 一一 |
| 第四講 | 我儕メツシヤに遇へり | 一六 |
| 第五講 | 最初の休徴 | 二三 |
| 第六講 | 新生 | 二七 |
| 第七講 | 續講 | 三二 |
| 第八講 | 最大の賜物と最高啓示 | 三七 |
| 第九講 | 續講 | 四二 |
| 第十講 | サマリヤに於けるイエス | 四七 |

| | | |
|-------|--------------|-----|
| 第卅七講 | イエス最後の歌 | 一八二 |
| 第卅八講 | 境遇と品性 | 一八七 |
| 第卅九講 | 主の聖別 | 一九二 |
| 第四十講 | 我が王國 | 一九七 |
| 第四十一講 | 續講 | 二〇二 |
| 第四十二講 | 三大王國の統一者 | 二〇七 |
| 第四十三講 | 復活の事實 | 二一二 |
| 第四十四講 | 續講 | 二一七 |
| 第四十五講 | イエスの使命と我等の使命 | 二二二 |
| 第四十六講 | 懷疑者トマス | 二二七 |
| 第四十七講 | 見ずして信する者は福なり | 二三二 |
| 第四十八講 | 此福音書の目的 | 二三七 |
| 第四十九講 | 愛と奉仕 | 二四三 |
| 第五十講 | 爾は我に従へ | 二四九 |

ヨハネ傳五十講

倉長 魏著

第一講 緒言

ヨハネ傳の書かれた年代 新約聖書の初めの四巻を四福音書といふ。四福音書の中、最初に編纂されたと傳へられて居る所の馬可傳は、凡そ紀元五十年頃迄の使徒ペテロの説教や、主の目撃者達の證言や、同六十年頃迄のパウロの書簡並に馬太の聖訓集などを綜合して出来たものである。次に馬太傳は馬可傳と聖訓集とに諸の傳説を加へて紀元八十年頃世に公にせられたものである。次に路加傳は馬可の福音と馬太の聖訓集とに更に福音を加へて紀元九十年頃に發行せられたものである。

かくて馬可はローマ人に福音をつたへんが爲に、馬太はユダヤ人に舊約の「メシヤ」たる救主の顯現を立證せんが爲に、路加は一般民衆の爲に、各自目指す所ある次第なるが、ヨ

ハネは紀元一世紀より將に第二世紀に移らんとする頃、イエスは神の子にして『メシヤ』たること、『爾曹をしてイエスの神の子キリストなる事を信せしめ之を信じ其名に因て生命をえさせんが爲なり』(約二十〇卅一)とある如く、即ちイエスが人類の救主たる事ごもを實驗的に、哲理的に、將た教訓的に描寫したものである。そしてヨハネ福音書が以上の三福音書に優りて高遠、幽邃、雄大、神秘の思想を含蓄する所以は、偶ま著者の靈的實驗の豊富なること、信念の深甚なること、を證明して居るのである。

ヨハネの位置 由來四福音書は、それ々著者の境遇や、性格や、経験や、傾向などの相違から、各自特色を發揮してあるもの、畢竟するに孰れもイエスの尊き福音をつたふる靈的記録である。實に高貴な生命の文學である。就中ヨハネは『イエスの最も愛せし所の弟子』にして深くイエスの心に往來して最もよくイエスの人格を領會して居たのである。曾てギリシャの聖人、ソクラテースの哲學を繼承したものは、其高弟プラトーンであつたやうに、又支那の賢人、孔子の精神を諒解したものは、其高弟顔回であつたやうに、又印度の佛陀、釋迦牟尼の眞髓を悟了したものは、其高弟加葉であつたやうに、主イエス・

キリストの福音を最もよく靈讀して其の精神に浹洽したものが、乃ちヨハネなのである。ヨハネはイエスの生涯中、最も多く大切な樞機に與かつたのみならず、イエスの昇天後、少くとも數年の間、イエスの遺言(約十九〇二六、二七參照)に因り、其の母マリヤと共に居所を同じうして、一層イエスの心を間接に學ぶ便宜を得たやうに察知せらるゝのである。そこでヨハネは他の使徒達よりも、より深く、より濃かにイエスの愛の福音を直覺し、靜思し、かつ之を巧妙に翻譯したのである。

斯様な事情であるから、ヨハネ福音書中、時として此はイエスの言葉なるか、或はヨハネの言葉なるか、或はイエスの言葉につきての註解なるか、一見區別し難き迄に密接な、しかも神秘的な思想が表彰されてゐるのである。さあれ、此の福音書はたしかに吾人の靈的饑餓に向つて竭きざる満足を與ふる『マナ』たるは謂ふまでもないことである。

ヨハネ福音書の特徴 馬可傳の書き方はイエスをバプテスマのヨハネの繼續と觀、馬太傳の書き方はイエスをアブラハムの裔、ダビデ王の裔となし、かつイステエル民族の歸趣點と觀、路加傳の書き方は其の系統をアブラハムに止めないで、更に太古に遡りてアダム

から筆を起し、イエスは常にイスラエル民族に關係を有するのみならず、人類全體に關係するものと觀てゐる。しかるにヨハネは此等以上である。即ち永遠に在し給ふ神に關係を有するものと觀、所謂『ロゴスアイデア』(此の意義は次講に説明すべし)を用ゐて居る。此の『ロゴス』(道と譯す)なる觀念が、深邃な眞理を含蓄する本福音書の背景となつてゐるのである。即ちイエスは永遠なる神の懷より出現した受肉であるこの義を宣揚するのが本福音書の精神である。

蓋しヨハネが、かゝる方法を採つて其の眞理を表彰した所以は當時の要求せる思想の色彩を以て染め上げたイエスの姿を描かんためであつたに相違ないと思惟せらるゝのである。由來イエスの姿を描き出す色彩は時代と境遇とによりて多少其趣を異にするものもあるも、而も何の時代も、何處の人類も、普くイエスを要求してゐる。そしてイエスは常に人類の要求に應驗し給ふ救主である。かくてイエス自ら宣うた『我は生命のパンなり』人もし渴かば、我に來りてのめ『我は世の光なり』我は門なり『我は善き牧者也』我は蘇生なり、生命なり『我は途也、眞理也、生命也』等本福音書に記されてゐる所の聖言は、管

に史的たるのみならず、實に永遠に亘りて人類の心靈に満足と歡喜とを與へ給ふ約束なのであつて、之が他の三福音書に載せてない、此書の特質である。

偉大な使徒パウロの説きし中心思想はイエスの十字架であつた。即ちイエスを人類の贖主と仰いだのである。イエスに最も親しかつた使徒ヨハネは、直接イエスに交はりて深甚な靈の感化をうけ、イエスを通して父なる神の聖顔を發見したのである。かゝる理由によりてヨハネは特殊の思想や、感情や、信念を發揮したのである。ヨハネはドコ迄も神秘的で、直覺的で、靈的で、主觀的で、深く内的生活に透入し、徹底して居る。そして彼の最も尊びし知識は、所謂科學的追求の知識ではなくして、父なる神を追及し、景仰し、跪拜し奉る知識であつたのである。そして彼の根本的思想は『光』と『生命』と『愛』とふ言葉の中に遺憾なく道破されてゐる。即ち彼の鼓吹せる宗教は生命の宗教であり、光の宗教であり、將た愛の宗教である。人類は何時も光を慕ひ、生に憧れ、愛に渴して居る。ヨハネは此福音書に於て吾人の希求するところの要求に應ずる尊き賜物を藏して居るのである。

第二講 イエスの受肉説 (約一〇一—一八)

『ロゴスの意味』 『ロゴス』はギリシヤ語なるが、『語る』『示す』の意味を有してゐる。ここに之が『道』と翻譯された所以は、神が『道』なるイエスを通してその聖姿を示し、かつ肉體をとれるイエスに由りてその聖旨を語ることを教へるためである。即ちイエスは永遠に存在する神格なるも、人類の間に顯現せんがために人格に化し、そして人類に父なる神の意志と徳性と活動とを啓示する所から『道』と唱へたるによるのである。其の『ロゴス』即ち『道』が肉體となつたことを指して受肉と稱する次第なるが、しかし乍ら所謂受肉とは敢て奇怪な人物の生誕したといふ意味ではなく、永遠に存在し、常住し給ふ神が、其の至要な性質を失はないで人類の間に宿り、自ら卑下して新なる經驗を嘗めたことをいふのである。

『ロゴスの背景』 由來ユダヤ人等は神自身アブラハムや、イサクや、ヤコブや、モーセなどに直接啓示する所があつたと思つて朦朧げ乍ら『道』の姿を認めて居た。又ギリシヤ

語で教育をうけたユダヤ人等は當時アレキサンドリヤの哲學者フィロソフ(紀元前十五年に生れ、紀元後五年に死す)の著書などによりて此言葉を知つてゐた。即ちフィロソフの所謂『神は世界に直接に働き給はず、彼の道即理性を通して働く』てふ思想に通曉して居たのである。更に教養深きギリシヤ人等は『世界に充滿する神の道即理性は、合理的に、秩序的に、萬有一切を整列す』との觀念を有して居たのである。以上三種のロゴス觀はイエスの顯現に對する準備であつて、やがてイエスに於て眞に實現されたのである。

左り乍ら本書著者のロゴス觀と他のユダヤ人及びギリシヤ人等のそれとの間に、一は人格的に觀るのと、他は非人格的に觀るのと、の差異がある。爰に受肉せるイエス即道は單に抽象的思想の産物に非ずして、實際神と密接なる交通を有する人格者である。そして此道によりて萬有は造られた。故に世界に生命あり、人類に知識あり、個人に心靈の存するの、『ロゴス』が自己に充溢する光明と生命と愛とを投ずるがためである。そして神の顯現はロゴスが肉體となりて人類の間に宿れるに至りて全くその頂點に達せりと謂ふべきである。吾人は更にすゝんで何故の受肉なるかの三理由を擧げたいと思ふ。

神自身を實現するため

受肉は天地創造の道程に於ける必然の結果であつて、神は人類の間に宿り、そして各個人の經驗を分ちて嘗め給ふためである。實に此眞理は、より高き思想は神の中に存し、神と共に存し、又神のために存するものなることを表はすと同時に神は人間と共に生き、人間を経て働き、そして人間に寄りて住み給ふことを啓示して居る。神は永遠に亘りて宇宙の意志であるが、世界の人類は悉く神を中心として生活しうるのである。斯様な次第なるが故に父なる神は天に在りて一般的に萬有を統一し、子なるイエスは地にありて部分的に人生を知悉するの要があるのである。即ち神は受肉して人間の生活に入り之によりて自己を實現し、又之を通して自己の國に歸り來つたのである。(十一節參照)

人類一般に十分な啓示を與ふるため

古から、いづれの民族も、詩篇の作者が其第十九篇に『諸の天は神の榮光を表はし穹蒼は其の手の工を示す』と歌つて居るやうな觀念を有してゐて、其處に先づ神の『道』を認めて居る。而も自然界は『偉大な者』の存在を語る以上に、更に或者を啓示しない。かるが故に人類はおぼろげながら『知らざる神』を拜伏

して居た。實に自然界は神の大ど方と美とを語るものもあるも、神の要性なる愛を發揚するところがない。自然界は人生に必然伴ひ來る苦痛艱難てふ不可思議の面前に於て、永遠に變らぬ善なるもの、儼存する奧義を説くことは出來ぬ。しかし乍らイエスは受肉して人類に善なる者を人格化し、仰いで以て『我等の父』よと呼ぶことを教へ給うた。神の徳性中、最も至要の分子は力に非ず、知識に非ず、乃ち愛である。所謂『神は愛也』との啓示はイエスによりてなされた人類の大福音である。曾てヘンリー・ワード・ビーチャーは或種の教義につきて酷だしく疑惑を抱くに至り、一時神てふ名をきくさへも恐怖の念を生ずる場合があつたが、渠れ一日豁然として神の愛を悟るに至つた。こゝに於て彼の面前に天地は新しき姿を以て現前するに至り、自己も亦全く變化するに至つたと云ふことである。實に『我を見し者は父を見しなり。何ぞ父を我儕に示せと言ふや』とは眞理を含める言葉なるが、吾人はイエスの聖顔を離れて活ける神の愛を認むることは出來ないのである。

神自身が人類の罪惡を贖はんがため

吾人はイエスの人格の兩側面即ち人の方面と神の方面との存することを知る。そしてイエスを人生の光明として、指導者として仰ぎ、以

て人の側面を高調すべき理由を信するも、しかもイエスの使命は是にてつきぬことを知る。イエスの使命を只だ單に吾人の指導者たるに止むるには餘りに高く、且つ深か過ぎるものがある。彼には神と共に高く聳え、神と共に深く横はるものがある。即ちイエスは神と等しく人類の罪を赦す權威を掌握して居る『われら神を愛するに非ず神われらを愛し、我等の罪の爲に其子をつかはして挽回の祭物とせり、是れ乃ち愛なり』(約一書四ノ十一)所謂『多くの人に代りて生命を與へ、その贖と』なれるイエスによりて新しき生命と光とはたしかに此世界に現はれて來たのである。イエスによりて人間は新しくせられ、人生の希望は鮮に輝き出し、そして人類は神に面して歩むことを得るに至らしめられた。即ち人類の間にイエス自ら卑下して、我等を高き頂に引き上げ給ふ『道』肉體となつて、人類は測り知ることの出来ない恩寵と光榮とに浴することを得るに至つたのである。

第三講 神の羔を觀よ (約一〇二九)

世界の罪惡 太古より人と自然界との間に、人と人との間に、將た人と神との間に、容易に渡ることの出来ない深き淵が横はつて居る。然し人間の知識の發達すると共に第一の難關は漸く取除かるゝに至り、今や巨嶽、大河を自由に支配するのみならず、空界、海底さへも征服する所となつた。第二の難關は道念の向上すると共に次第に接近せしめられつゝある。然るに曾てシナル地方の人々が天にまで達する塔を築いて其目的を遂げんと試みて失敗に歸した第三の難關は今日依然として人類の間に存する次第なるが、實に此難關は古往今來人類の最も悩む所である。即ち人間は罪惡の爲に尙ほ容易に神に近づくことが出来ないのである。抑も『われ願ふ所の善は之を行はず反て願はざる所の惡は之を行へり』とのパウロの告白は、やがて人類一般の告白である。かるが故に人類は善に向ふよりも惡に歩み、従つて心意の暗黒となり、意志の盲従となり、野心の擴張となり、不虔の生涯となりて、之れより一切の憂愁と痛楚及び不幸と不秩序とは人類を圍むに至るのである。そ

ここで世界は牢獄の如き觀を呈し、生の調和と美とはこゝに破壊せられ、更に神との交通は杜絶せらるゝに至つた。此の如く杜絶を回復せんが爲に、世界の凡らゆる宗教は、其程度の高下を問はず、悉く罪業消滅即ち贖罪の途を有して居る。しかし乍らへブライ民族の有せし如き強烈なる罪惡意識は、他の多くの民族間に於て之を認むることは出來ないのである。古代のギリシヤ人等は罪惡の存在を認めて不愉快なるものとせざるも、ヘブライ人の如き罪惡意識を感じることはなかつた。勿論ローマ人の間にも斯る觀念は乏しかつたのである。當時ローマ人の痛切ならざる罪惡觀が其個人及び國民の生活上に及ぼせし惡しき影響は蓋し鮮少ではなかつたらうと思はれる。我々民族の間にも惡とか過失とかの意識はあつたが、しかし基督教の意識するが如き意味は此に含んで居らない。かるが故に吾人が我同胞に向つて贖罪の教理を説いても容易に彼等の肯ふところとならないのである。しかも吾人が醒めるときパウロの所謂『此死の體より我を救はんものは誰ぞや』との叫びなきを得ぬのである。『此の死の體』とは即ち罪を指して居る。其罪は人間が自己の生活に於て神を忘るゝところから來る。そして我々の生活から純潔な、高雅な、靈妙な思想や、感情が失

せ行くなら我々は動物の生活にまで低落して仕舞ふのである。神や、眞理に忠ならずして、餘りに利己に忠なる生活は即ち神を捨て反て淺薄なる自己を中心とする罪の生活と謂はなければならぬ。

イエスと羔 此の兩者の相關聯する點は第一『罪のない』てふ事である。イエスは『シナレス』である。此は實に驚嘆すべき事である。羔も亦た邪氣のない害のない物である。しかも羔は道德界に屬せざる、又鍛錬のない無邪氣である。神の羔なるイエスは實に道德界に於て無邪氣なるのみならず、更に心靈界に於て『神聖』を有して居る。第二の關聯點は柔和なる所に存する。兩者共不平なき忍耐と柔和との形である。而もイエスの柔和は讚美すべきものである。人生まゝ、利害より來る柔和や、冷淡より來る柔和や、必要より來る柔和や、無知より來る柔和や、柔弱より來る柔和もある。しかし乍らイエスの柔和はかゝる事情に驅られて現はれたるものでない。イエスの柔和は此等の一切に超越せる力あり、自覺あり而も謙れるものである。第三の關聯點は兩者の死の情態であるが、しかし乍ら此に大なる相違がある。由來舊約時代に於ける犠牲の羔は必然の運命に引かれて止むことを得

ず進み行くといふ有様にて従つて其犠牲の死の中に何等道徳的な、意義や目的を存して居らないのに全く相反して、イエスなる神の羔の犠牲に至りては、實に任意的な、義侠的な、自覺的な所から起つて居る。イエスは自分の肩に十字架を擔うて死につく以前から、既に其心の中には十字架を擔うて居たのである。由來死の形式は様々に現はれて居る。即ちソクラテスの如き善人の死もあり、ゴルドンの如き勇者の死もあり、將た幾多殉教者の死もある。しかも他の多くの善人や、勇者や、義人の死は神の爲に捧げられたるものなるが、イエスの死は神御自身が人の爲に犠牲となれるものにして神の心から即ち愛の泉から、湧き出た、しかも覺悟の死であつた。

罪と羔 『任ふ』といふ原語は、取除ける、高める、運び去る、移す、亡ぼす、殺す等の意義を含んで居るのである。即ちイエスの救の御手は我々の罪を取り除き、罪のために我々の傷める、悲しめる悶える心を高め、我々が罪の淵に遮ぎられて容易に神に近づくことの出来ない障礙物を運び去り、罪のために我々が死を造りつゝある不虔な、不善な、不徳な、不純な、不始末な、不親切な言行の細胞を悉く亡ぼすことを指すのである。實に我々

の重荷にたへ得ぬ罪をイエス御自身が一身に引受け給ふ次第は譬ふるに物なき思召にして贖罪の大事業である。是れやがて一方神の義と愛を表彰し、他方神の生命と人の生命との調和を示現し給ふのである。實に贖は我々の罪の重荷から、自由になる時に始まり、其罪の支配から永遠に脱却することによりて之が完成を獲るに至るのである。

十字架の力は理論ではなく事實である。苦痛と恐怖と憎悪と耻辱との象徴であつた物が名譽と勝利と信仰と希望とを齎す靈力と化した。大生命を意味する十字架の血は我々の死を洗ひ去る秘訣となつた。我々は輝ける十字架を仰がねばならぬ。

第四講 我儕メツシヤに遇へり (約一〇四十一—四二)

大なる發見 我々は前講に於てバプテスマのヨハネがイエスを世人に紹介せる『世の罪を任ふ神の羔を觀よ』てふ簡單にして而も意味深長なる點につきて聊か學んだ。當時ヨハネは再度まで件の言葉を以てイエスを紹介して居る。此に於て先づヨハネの弟子等がイエスに従うたのである。即ちヨハネの曰し言をきゝてイエスに従へる二人の者の其一人はペテロの兄弟アンデレなるが、かれまづ其兄弟シモン・ペテロにあひて我儕メツシヤに遇へりと叫んだのである。この際イエスは彼等に對していかなる言葉を垂れ給ひしかは分明ならざれ共、確に彼等に取りては啓示の日、恩恵の日、幸福の日であつた。茲に謂ふ所の『遇へり』どの原語は遭遇する、發見する、認むる等の意義を含んで居る。即ち『我儕メツシヤに遇へり』とは大なる發見をなしたと言ふのである。そしてメツシヤはヘブル語でギリシヤ語ではキリストと言ふのである。曾てコロ、ホルムの發見者、ゼームス・シムソンが友人から君の生涯に於て最も大なる發見は何なりやと問はれたのに答へて『我が最大發見は

先づ我は罪人なりとのこと、次に耶穌は我が救主なりとのこと是なり』と言うたさうであるが、實はシムソンが自己の發見にかゝるコロ、ホルムを指さずして、自己を卑下、抑遜し、かつイエスを救主と敬仰し奉るところにいかにも彼の偉らい點が顯はれて居る。

アンデレの紹介 そこで當時イストラエル民族一般の靑望は固より救主の遣はさるべきことであつた。そして未だ一般の民衆が救主を發見せざるに先だちて、アンデレは唯り大なる發見をなした次第なのである。しかし乍らアンデレの確信を獲た原因は、彼がイエスに接して直に其靈力に動かされて、救主の恩に溢れて居ることを認めた所にあつて、それから漸次信仰の途に進んだのであらう。ニウトンの引力發見よりもコロンバスの米大陸發見よりも、より偉大なる發見をなしたるアンデレは沈黙することが出来ないところから、早速自己の兄弟のペテロに其喜悅を分けたのである。そして次にイエスはペテロ等同村のピリポにも從へと命じ給ひければかれ從ひ、それから又ピリポはナタナエルにイエスを紹介して居る。アンデレがペテロを導き、ピリポがナタナエルを導きし所に個人傳道の發端が現はれて居る。就中最初の傳道者アンデレがシモン・ペテロにイエスを紹介せしことは、

是れイエスに對する非常なる忠義と奉仕とであると謂はねばならぬと信するのである。

アンデレの人物 アンデレは使徒ヨハネ、若くはパウロの如き天才的人物ではないやうである。かるが故にイエスの福音の舞臺に於て、さほど著しき役目をつとめて居らぬ。去り乍ら他の無名の弟子達よりはより多く認められて居る。而も彼は花形役者でないから、ペテロ、ヨハネの名聲には及ばぬのである。而もアンデレは隠れて善をつとむる人、己を卑下して人を高むる人、平凡で偉大をなすと云ふ方であつた。我々は時として人の偉大を羨み、又人の名聲を羨むこともあるが、しかし乍ら神は我々の羨望する心を欲せずして、反つて我々の才能と其職分との發達と圓熟とを求め給ふ次第なのである。一君子となつたアンデレはイエスと共に在りし一夜の間に神秘的に全生活の上に大なる變化を齎したのであつて、やがて彼は聖者の品性になくてならぬ資格を備ふるに至つた。即ち彼は『勇氣』と『同情』と『抑遜』との三要素を兼備するところとなつたのである。是の如く變化せしめ、聖化せしめ、向上せしめ給ふイエスの靈能妙力は實に讚美渴仰すべきものである。

アンデレが直にイエスをペテロに紹介した態度は今日我々より之を觀れば何でもないや

うであるけれ共、而も傳道界に踏出す第一歩であつて實に冒險的奮闘と謂はざるを得ぬ。即ち彼の踏み出した其第一歩は我軍が旅順港に踏み出した勇敢、大膽にも劣らざる、而も永遠に朽ちぬ歴史を遺したのである。

アンデレは先づ勇氣を以て第一歩を進めたのであるが、同時に彼には他人に對して其信念を分與せねばやまぬ熱誠な同情があつたのである。そして彼は斯る同情に燃えて位置や、名譽や、權勢や、門地などのある人に向はずして、直に將來使徒の率先者となりし自分の骨肉ペテロに向うた。實に同情は人を向上せしめ立身せしむる。たしかに人の將來に見込をつけて人を活かし、高むるのも是から來るものである。我々に要するものも亦此先見の明ある同情を以て人に對することである。

さり乍ら我々に謙遜がないなら、同情を以て人に對することは出來ぬ。即ちアンデレには自己を卑下して他人を擧げ、自分を隠して他人を顯はさんとの謙遜があつたからペテロに同情を以て進んだのである。そこで同情と謙遜とは自から關聯して居る。アンデレとペテロの關係は、バプテスマのヨハネとイエスの關係に似通ふ點があるやうに見える。アンデ

レはヨハネに學ぶどころありしならんが、彼が兄弟のペテロを擧げたる精神は誠に立派なものである。しかも多くの人はヨハネを記憶するも、アンデレを記憶するところがないうに見える。世界が傳道史第一ページの筆頭に顯はるべき此恩人を閑却しつゝあることは遺憾の次第である。我々は彼のイエスに對する奉仕の態度とペテロに對する同情とを忘れずはならぬ。

ナタナエルの心事

尙此一章中注意すべき人物はナタナエルなるが、其性格はイエス御自身の賛辭によりて明かに了解することが出来る。曰く『視よ眞のイスラエル人にして其心詭譎なき者ぞ』と。我々は之を『眞理はいかなる者ぞ』との疑問を發したるのみにて、更に一步を進めざりしピラトの態度に比して、ナタナエルが『來りて觀よ』の言下に隨喜渴仰せる態度の數等眞面目なることを想ひ、やがてイエスより斯る賛辭を受くることの當然なるを信ずる。我々は世人より數千言に亘る頌徳表を受くるよりも、むしろ恩寵深きイエスの一言に甘んずるものである。實に心に詭りなく、邪まなく、光風霽月の心事を有するクリスチャンは幸ひなるかなである。

民族的愛樹

件のナタナエルがイエスの靈眼に映れる場合を想像するに、此は眞に、一幅の活畫である。即ち彼の背景となつて居るものは無花果樹である。由來印度人は菩提樹を愛し、我民族は櫻樹を愛して居るがイスラエル人に取りて無花果樹は民族的愛樹である。舊約書中『無花果樹の葉をつゝりて裳を作れり』(創三〇七)『乾無花果の塊二百を取りて驢馬にのせ』(母前廿五〇一八)『無花果樹はその青き果を赤らめ』(雅二〇十三)等の言葉あり。又新約書中『誰か荆棘よりぶだうをどり、蒺藜より無花果を探ることをせん』(太七〇一六)『無花果の樹橄欖の果を結び或は葡萄の樹無花果の果を結ぶことを得んや』(雅三〇十二)『天の星は無花果の樹の大風に揺れて未だ熟せざる其果の落つるが如く地に墮つ』(黙五〇十三)等の教がある。そして『葡萄の樹に葡萄なく無花果の樹に無花果なし、故にわれ殲滅者を彼らに使はす』(エレミヤ八〇十三)『此無花果樹に果を求むれども得ず之を斫りされ何ぞ徒らに地を塞ぐや』(路十三〇七)『無花果の樹を見て其處に來りしに葉の他に何も見ざりしかば今よりのち永久も果を結ぶことを得ざれ』(太廿一〇一九)等の教は一方其果の榮えるは國民の富の豊かなるを表白すると同時に、之が衰ふるは其道德の衰ふることを暗

示して居るやうである。更にユダヤ人の諺に曰く『無花果の葉蔭に息ふ』と。又ユダヤの詩人の物語に曰く『曾て樹々の會議が開かれ、樹の王を選んで無花果の樹に其王となるやう頼んだ。然るに無花果の樹は謙りて之を辭退し、今王となりて高く他の樹々を見下すよりも、自分の好みは人々に甘き實と心地よき日蔭とを興ふることである』と言つたところである。かるが故にユダヤ人が件の樹を尊重せし程度が想像せられる。そして心地よき無花果樹の下に『かゝる人はエホバの法を喜びて日も夕も之を思ふ』とされば我れ爾の法をまもり心をつくして之にしたがはん』とわが愛する爾の誠命をもて己をたのしましめん』と言へる如く、忘我の人となり、無邪氣の人となり、只管ら神智靈覺を懐いて、イスラエルの救はれんことを祈る、是れぞ理想的イスラエル人にして、又無上の樂みである。ナタナエルは即ち其人であつたのである。

第五講 最初の休徴 (約二〇一—二一)

奇蹟は自然の法則に反するや 吾人は先づ一言奇蹟の可能につき述べて置きたい。由來聖書中に存する奇蹟は基督教の天啓教たるの證左とせられたのであつたが、近代自然科学實證哲學の發達するや、大なる反動起りて之を否定するに至りたるも、又穩健なる説をなす者顯はれて、即ち奇蹟が自然法に反せりとの理由を以て聖書中の記事を疑ふは酷だしき誤謬なりとなすに至つたのである。

固より自然界に存する法則なるものは犯すべからざる勢力にして、又大なる目的を有するものたることは何人も承認する。しかも其勢力たり、法則たるものを統御し、指揮するものは即ち神である。所詮自然界の法則なるものは神の宇宙を經營し、そして人類を推進せしむる恩の手段に外ならぬ。そこで神は人類の幸福と自由とのために之を適當に使用し給ふことは吾人クリスチャンの經驗する所である。かるが故にかゝる吾人の經驗と自然法とは論者の思ふが如く矛盾、衝突するものではないのである。

若し聖書中に奇蹟の記事を載せず、且つイエスの生涯に於て一度も之れなきものなりとせば、聖書は普通の精神的記録に過ずして人類の神秘性に感應する所なく、又イエスの生涯は非凡なる聖者のそれに類するに過ずして吾人宗教的渴仰心に満足を與ふるところなるべし。即ち神秘なく、奇蹟なきイエスは人類の希望に副ふ所なき一個の聖者となり得るのみである。實に福音書に其事蹟を留むるのは父なる神の聖旨を人類に啓示する何よりの福音であつて、吾人は之によりて以て大なる希望と慰安とを發見するに至る。況して件の奇蹟存するありて福音書に一段の趣味と美觀とを添ふるのである。

かくて、奇蹟は神の恩の實現にして其愛の活動である。しかも奇蹟は徒らに施されたるに非ず、イエスの渴仰隨喜者のみに向つて行はれて居る。即ち篤信者のみの受けた恩寵であつた。そしてイエスは『此世の人何ぞ休徵を求むるや、誠に我れ汝等に告ん、休徵は此世の人に必ず與へられじ』と宣ひし如くイエスは之を信なき曲れる者に施すことを好み給はなかつたのである。要するに奇蹟は福音の絶對的眞理にして必要條件となさざるのみならず、又之あるが爲に信仰せらるゝを求めず更に心靈的開眼の大切なることを暗示する。

かるが故に吾人は自然法を使用して恩寵の機會となし、攝理の便宜となし、以て人類を善に導き給ふ神、天の父は常に小やかなる吾人の祈願に尊き耳を假し給ふことを確信する者にして、奇蹟の行はるゝのは當然となすも、しかも吾人は唯だ之にのみ依頼することなく、福音の他の方面に於て、於多く大切なる要素の存することを知悉するの必要ありと信する。

此奇蹟は何を意味するか 此奇蹟が他の三福音書に載せてない所以は公職につき給ふ前に起りしがためであらうと云ふ註解者もある。こゝに使徒ヨハネが之を記載して居るのはイエスの使命、職分を紹介する適當なる方法であると惟はれる。そして之を精神的に翻譯して學ばんか、先づ昔の律法や豫言者よりもより深きより優れたものがイエスの福音中に存すると、即ちキリストはユダヤ教の水を福音の濃き酒に變じ給ひしことを暗示する。次に此奇蹟は物的で且つ創造的なるが故に、キリストは物、心兩界の主たることを表彰する。次に此奇蹟は婚姻を聖諾して居て、そしてキリストは罪なき樂みと喜びとを承認して居る。次に此奇蹟は天父の善と仁慈とを啓示して居る。之を記載する著者は當時『ノスチック派』

の誤れる教師達が物質を惡と認め、且つ過酷なる禁慾主義を主張して一切身體の樂み、肉食飲酒を嚴禁し且つ婚姻其物をも忌みたるに反對せしものがあつたに相違ないと思はれるのである。(因にノスチク派は、上古の宗教哲學派にして波斯、ギリシヤの神學、哲學等を應用して基督教の教理を説明せんと試みしもの)。斯様な教は此福音のかゝれたるエペソ地方(提前四〇一―六參考)に於て流行せしものであつて、傳説によればヨハネは大に之に反對したることである。

第六講 新生 (約三〇一―八)

イエスの靈眼に映れるニコデモ イエスはカナの婚姻の筵を祝し、亞でカペナウンを訪ひ、間もなくエルサレム城に上りて此處に權威を示し、常に民衆に向つて深き印象を與へしのみならず、ユダヤ人の『高等審判所』の會員の一人なるニコデモ並に其一味(約三〇二、同十二〇四二)の上にも感動を與へしもの、如く見ゆ。ニコデモの會見は恐らく使徒ヨハネの家に於てなされたるべく、彼が夜に入りて來りしは其臆病なるに因由する。そこで一言も發せざる前にニコデモの心中を看破せるイエスは彼の思ふ所と異なりて心靈の王國に入らんとする者はアブラハムの子孫と雖も其儘にては叶はず、必ずや新生を要する。即ち『我は爾等の内心に我法を置き、爾等の心裡に之を刻まん』との聖言の如く、新しき心、新しき性質を要するとの意義を暗示し給うた。ヘーゲルが云つた様に人は二回の誕生を要する。即ち肉體の誕生と心靈のそれとである。其心靈の誕生とは先づ神に對して謙ること、次に過去の生涯を顧みて悔改むること、更に將來は愛の精神を發揮して一切

の人類に接することなのである。

ニコデモの疑ける一原因 神の選民なるアブラハムの子孫にして尙ほ更生せざる可らざるかとは彼の疑惑であつた。而も異邦人がユダヤ人の特權(異邦人にして猶太教に入門し、イスラエル人とならんと欲する者は一定の儀式に據りてバプテスマを受けたり)をうるに新しく生れることの必要なる如く、ユダヤ人も神國の民、神の子たるに當りて、然すべきであつた。即ち名譽あり、地位あるニコデモも、舊き生涯を斷ちて新しき生命に接せん爲に斯る必要があつたのである。

肉と靈との意義 所謂肉なる言葉は此自然の生で物質的な、現世的なものである。そして人間が此肉を維持するに於て性欲や、運動や、希望や、才能や、其他の事物を必要とする。しかし乍ら我々が兩親から繼紹して居る所の肉は朽つる時がある。而も新しく生れて來る者は永遠的で聖くかつ靈である。實に神の王國は靈から成立して居るが故に、再生して靈に屬せざれば、之に入ることは出來ぬ。即ち神に對する正當な關係を有せねばならぬ。理性の働きのなき動物も、日月星辰も心なくして悉く神に服從して居る。しかも人間の此等

に優る所以は神に對する任意的態度があるからである。いかにも下等動物は壓迫されつゝ、自然法に従つて居る。又巧妙に其使命を果して居る。しかも神に服從する目的もなければ自覺もない。唯だ人間のみ目的と自覺とを以て神に奉仕して居るのである。我々眞に能く神に奉仕せんが爲に彌々靈的生誕の必要を認めざるを得ぬのである。

人性は本來向上者なり 陸上に棲む所の動物と水中に游泳する所の魚類とを問はず、彼等は等しく自然界の法則下にありて各自其位置に安んじて居る。人間も他の動物と等しく自然界に棲息することのみは神の助力なくして或は之をなし得ることあらん。しかし人間てふ原語が上に向くと云ふ意義を有して居る如く、我々人間は自から高く天翔らんとして上に向うて居るから下等動物とは天地の差異がある。そして人間は自己の力のみにては到底なし能はぬ一事がある。抑も其一事とは人が神を愛して神の爲に生きんとする精神である。此の精神は自分の力で創造することは出來ぬ。唯だ上よりの御力にまたねばならぬのである。しかも聖靈によりて生るゝとき、其精神は燃え上りて神の子たる特權を掌握すると同時に、彌々神を愛して神の爲に生きんとするに至るのである。

聖靈の働き 我々を再生せしむる所の其働きは自由自在にして恰も風の如きものである。ことが教へてある。そして我々の生活は自然的にもせよ、靈的にもせよ、生れたことの大なる證明である。たしかに靈的生活は靈的生誕の事實を語つて居る。かるが故に我々の生活は我々の活ける本質を示して居る。そして此第二の生誕は誰の靈魂に於ても神の像を印痕して居る。しかし乍らよしんば其像が充分に發展せざるも、幾部分かは其中に實現されつゝある。我々は我我心中にイエスの像の完うせらるゝまで、絶えず注意と努力とを以て我靈魂を育くまねばならぬのである。

靈なる原語は風と同一の文字なるが、試に其類似點を擧げんか、(1)肉眼に見えざる點である。『風は己がまゝに吹く、汝其聲を聞けども何處より來り、何處へ往くを知らず、凡て靈に由りて生るゝ者も此の如し』とある如く、只だ草木の動搖に由りて風の吹くことを知ると同じく、我内心の變化せることによりて靈の働を直覺し得べきである。(2)勢力の點である。『弟子たちみな心を合せて一處に在りしに俄に天より迅風の如き響ありて彼等が坐する所の室に充り、焔の如きもの現はれ岐て彼等各人の上に留まる』とあつて其力を示して

居る。(3)必要の點に就て。風は萬物の化育上、諸原素の中、最も大切なる分子である如く、靈の働は信仰の生活に至要なる使命を有して居る。故に此力微りせば靈事は解するに由なき場合少しとせぬ。(4)自由の點に就て。風は何等の拘束なく東西に吹くの自由を有する如く、靈も亦縦横無碍に活動する。(5)遍在の點に就て。日月の照す所、霜露の沾す所、苟も天下何處にも風の充滿する如く、靈も亦人心の存する所、否二、三人の集る處にさへも現前するのである。要するに『我儕は聖靈の有ることだに聞かざりき』と言へる愚を表はさず、我々は神の殿にして神の靈我々の中に在すことを意識せねばならぬと思ふのである。

第七講 續 講

ニコデモに就て 吾人は前講に於て新生とは「上より生るゝ意義」なることを學び、且つニコデモのいかなる人物であつたかの一端を瞥見した次第なるが、尙彼につきて遺補すべき必要を感じる。彼がイエスの出現につきて評判の高かつた際、夜に入つて來つた理由は、普通世人と同僚との批評を避けんため、イエスの評判を彌が上にも高くしてはならぬと考へたためと又彼の臆病なる所からであることせられて居るのであるが、ジョーヂ、マゼソンは之を善解して彼に切なる志道心が起り「朝までまてない」所から即夜直ちにイエスの門を叩いたのであると謂うて居る。吾人は假りにマゼソンの説を參考としてニコデモの態度を思ふなら彼の心事には奥床しきものが潜んで居たやうである。嘗て頼山陽は京都に於て門弟子のために論語の講義をなして居た際、父の訃音に接して驚愕措く所を知らず、彼は其論語を手にし乍ら直に郷里に向ひたるが、其後は再び論語の講義をしなかつたと云はれて居る。又かの伊井大老の忠僕、某氏は大老の櫻田門外に於ける大事變をき、即刻

彦根を出發して晝夜兼行で江戸城に着きたるも、最早や大事畢りたる後のことゝて、彼は剃髮染衣の姿となり、號を謙堂と稱し大老の菩提寺なる世田ヶ谷の某寺に庵をむすび「此の庵に住むこそ無二の淨土なれ」と口吟み、殘生を擧げて大老の靈に事へたるが如き、たしかに頼山陽の精神は孝の切なることを表はし、謙堂は忠の切なる態度を示して居て、孰れも劣らぬ道徳上嘆美すべき逸事であると思はるゝ次第なるが志道者の精神と態度とに於ても天晴れ忠孝以上に出で、麗しく而も勇ましきものがなくてはならぬ。即ち道に忠實ならんと欲するもの、若くは天父に孝事せんと欲するものは所謂忠、孝以上に熱心なる精神と敬虔なる態度とを要する次第なのである。

件のニコデモが「朝までまてない」ところから、道に志して即夜イエスの門を叩いたといふことは眞理に忠ならんとする今日の志道者も亦學ぶべき點である。曾て孔夫子は「朝に道を聴きて夕に死すとも可也矣」と言はれたが、苟も志道者たるもの、至高者をあこがれるもの、現世の夕に道をきゝて永遠の朝に生くる福をうることは大なる特權と謂はねばならぬと信するのである。

千里獨往のを見を要する 當時ニコデモは、エルサレムのユダヤ人等を代表するところから『我儕爾は神より來りし師なりと知る』と述べてこゝに『我儕』てふ複數を用ゐて居ると解せらるゝ。しかし乍ら吾人イエスがニコデモを取り扱ひ給うた精神から之を察するにイエスは人間は各自銘々救の門に入らねばならぬ。他人の信仰によりて自分は救はれない。自己の救は自己が獲なければならぬ。大切なる信仰問題や、永遠の問題などは自分で決せねばならぬ。かるが故に自分の屬して居る境遇や、習慣から獨立して自己の運命を決せねばならぬ。吾人は獨り處する時本來の面目が現前して來る、神の國に入らんと志す者は徒らに朋友の顔色や、時代の雲行や、境遇のいかんなどには頓着せずして千里獨往の態度を以て斷行しなければならぬ。道に進むに當りて同行者を要せぬ。又惑ふ所なくして獨歩すべしとの精神をニコデモに暗示し給うたのであらう。そこで一旦は『人はや老ぬればいかで復生るゝ事をえんや』との遁辭を設けたる彼は、イエスに接觸してから、漸次パリサイ人の特徴であつた所の狹隘な心根や、自負に失する精神や、將た獨斷的な態度などを放棄して、高き世界靈の世界に入らんと志し、やがて彼は『上より生れて』内心に大變化

を齎したのである。『その中の一人にて夜イエスに就りしニコデモと云る者かれらに曰けるは、其人に聽ず、其行を知らざる先に之を審判は我儕の律法ならん乎』(約七〇五〇)といひ、又『曩に夜間イエスに就りしニコデモといふ人没藥と蘆會を和せ、おほよそ百斤ばかり携來る、彼等イエスの屍を取てユダヤ人の葬の例に循ひ之を布と香にて裹めり』(約一九〇卅九)といふ所より推しても彼の變化は認められる。實に人間の教養は人を改善に導き、神の恩寵は人を新生に導く。位置や、祖先や、道徳や、宗派などに傲然として自負して居た所の彼れ今や靈化され聖化されたのである。

知よりも信を先にすべし 次にニコデモの云へる『知る』てふ文字に注意せよ。乃ち彼の傾向は知識に偏して居たやうに見ゆる。彼は未だイエスを救主と信することの出來ない場合に於て、單にイエスを『ラビ』として認めて居る。しかし乍ら靈界の消息を窺ふには知識のみにては不充分である。靈の事は幾ら理論的に考へても合點の行かぬこともある。靈の生涯に入らんと欲するものは知よりも、信を先にすべきである。固より知と信とは靈界の二大柱にして孰れも大切なるものなるが、而も宗教を認識した丈では不可ない、是は

信仰すべきである。或志道者は知識を先にし、或志道者は信を先にして居る。しかし乍ら先づ一通りの信仰を獲て居て段々研究の歩を進む方が得策とせられる。即ち信なくして研究又研究理論更に理論では到底其止まる所に達せぬやうである。實に信は萬善の本、幸福の母たることを覺り、知の前に信を置くことが必要である。蓋し知は物の皮相を視、信は物の本質に透徹するものである。志道者は現象世界以外に、感覺世界以上に心靈界の事實を認むる信仰の眼を要するのである。

之を要するに志道者は朝をまたず、即夜、即刻、直に起つて信仰に依り自己の新しき生涯を開拓せねばならぬ。吾人はニコデモよりも更に更に深き意義に於て夜間イエスの前に出づべきである。『イエスの足下にすわりて其道をきけり』。

第八講 最大の賜物と最高啓示 (約三〇一六)

愛の實現 此福音書中の眼目となすべき『それ神は其生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信する者に亡ぶることなくして永生をうけしめんが爲なり』と言へる言葉は曾て新島先生が新約聖書の不二山であると謂はれたさうであるが、いかにも此處は秀で、居て世界人類の視線を惹き集めてゐる。之を讀んで何人も暫時神の姿としてイエスを賜ひし天父の心を想はずに居られないのである。そこで我々は『獨子』を賜ふほどに我々を愛し給ふ天父は獨子を遣はし給ふまでにどんなに我々のために深く且つ大なる經綸を以て宇宙を攝理統御し給ひしかの一端を瞥見して見たいと惟ふ。

宇宙の大經綸者は永遠より語りつゝ、自己を啓示して居る『語らず云はずその聲聴えざるに、その響は全地に普ねく其言葉は地の端にまで及ぶ』とは眞理の言である。實に自然界の一切は悉く無限にして且つ永遠恒久の靈の發展と啓示とである。そが靈は自然の中に、又之を経て今尙ほ所謂創造しつゝあるのである。かのダンテの神曲は彼の深甚なる信仰を

表彰し、ミカエル・アンゼロの藝術品は彼の雄大なる理想を露出し、沙翁の劇は彼の多
面なる人生觀を描寫して居るやうに、大山、小川、一朵の雲、一滴の水も崇高、森嚴にし
て而も優美、精巧なる宇宙の靈を語りつゝあるのである。そして神は實に自然界に於て語
り給ふのみならず、同時に人類界にも語り給ふのである。かくて神は過去に於てヘブライ
民族に向つて語り給ひしと共に、他の民族の間にも、彼等を聖き生活と大なる生命とに引
上んとして語り給うたのである。たしかにソクラテスや、孔子や、釋迦などは神の啓示を
受けた偉人格であつた。しかし乍ら彼等は神の獨子イエスに對しては先驅者で、豫言者た
るの觀がある。然り我民族間に既存する這般の宗教的、倫理的信念や、思想などは畢竟『野
に叫ぶ人の聲』とも云ふべきであらう。

最大の賜物を給ふ前の準備 左り乍らヘブライ民族は往古より神に對して熱誠な憧憬と
渴仰と敬虔とを有して居た。詩篇の作者が歌ひし『あゝ神よ、鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く、
わが靈魂も爾を慕ひ喘ぐなり、わが靈魂は渴ける如くに神を慕ふ、活神をぞしたふ』との
宗教的情操はやがて彼等民族特有の長所であつたのである。かるが故に神は他の民族より

もより多く彼等の上に特殊の啓示を垂れ給うたのである。我々は何故に一民族が斯る豊か
なる天の啓示をうけ、他の民族は然らざるかの理由を知悉することは出来ぬから、其は固
より神の經綸中、神秘の一部分として暫く措き、兎も角ヘブライ民族間にはモーセ以降幾
多の祭司や、智者や、豫言者などが輩出して神の心を伺がつたのである。そして常住永遠
の神は彼等に語りて自己を啓示し給うたのである。そこで神の啓示を文字に刻み出して民
族を教育したのが聖書である。即ち聖書は默示、靈導されたる大信心家、大思想家、大律
法家等の聚結せし聖言靈語なのである。古往今來、凡らゆる民族の間に、又總ての事情の
中に、常に間斷なく鼓吹されたる真理も亦神の啓示の一部分に屬するものたるべきも、し
かし乍ら聖書は特別に神の『道』を包容、秘藏せる古今無二の寶典と謂はねばならぬと信
ずるのである。

最高啓示 如是 永遠の道は先づ自然に顯はれ、世界の文字に表はれ、殊にヘブライ民
族の豫言者に認められたのであるが、諸般の準備整ひ、かつ時機の稍熟せる際、自己を十
分に示現せんがために、一個の大人格に顯はれたのである。即ち我々が既に講解したやう

に『道肉體となれる』イエスは具體的に其生活と品性の中に父なる神の姿を啓示したのである。神は人類をして自己を了解せしめんが爲に『獨子』を降し、人間の意識に基きて人間の經驗せる言語を使用し給うたのである。かるが故にヘブライ書記者は『神昔は多くの區別をなし、多くの方言を以て豫言者により列祖に告げ給ひしが此の末日には其子に託りて我儕に告げたまへり、神は彼を立て萬物の嗣として且つ彼を以て諸の世界を造りたり』と云うて居る。又『此は我が愛子なり』との聲が天よりイエスの上に祝されたこともあつた。

イエスは實に天父の聖旨に適へる『獨子』であつた。古來世界には幾多の哲學者も現はれ、幾多の詩人も現はれ、幾多の宗教家も現はれ、將た幾多の英雄豪傑も現はれたのであるが、しかも天父の聖旨を充分に人類に通曉せしめ、了解せしめ、會得せしめ、且つ無限の神愛を悟らしめたのは唯りイエスのみなるが故に其イエスを我々に遣はし給へる天父の御恩寵は何たる尊いことであらうか。斯くまで我々を愛し給う天父無限の愛を悟らず、又其愛から生れ出でたるイエスを識らずして、仇に過せし我々の無知と愚蒙と罪惡を顧

みて我々は轉た忘恩的態度の甚だしきに驚かざるを得ない次第なのである。

獨子を摸倣せよ

我々人間の半面を見れば神の子供らしき、イエスの友らしき義人の末

らしき所あるも、他の半面を見れば非基督的、獸我的、罪の子たる面影があつて、聖者の前に立つことの耻かしさを覺ゆるのである。『巧言令色、凡て我にありては意味なき形骸のみである。媚態婉姿も我にありては心苦しき醜穢のみである。滅亡の子には怖ろしき怒こそ、適當であらう』とは人生の苦き、闇き半面につきて穿てるダンテの言である。

しかし乍らイエスは神の生み給へる獨子で、其人格は神の充ち足れる徳と力で漲り溢れて居る。ヴァンダイクの言し如く『神の人生』を送りしイエスは天父の聖旨を啓示し、表彰した。確に彼は形體に刻まれた神靈であつて、天父の像を實現せん爲に人生を取る必要が存して居たのである。

第九講 續 講

獨子を遣はし給ふ聖旨 然らば即ち宇宙の創造、之を換言すれば神が自己の意志を擴充する巧妙なる進化的攝理、即ち獨子の受肉はベツレヘムの馬槽中に終局を告げたのであらうか。我々はさうでないか。蓋しイエスは唯だ單に神はいかなるものであるか、其性質はどんなものであるかの理を人類一般に示現せんがためにのみ顯はれた一時の方便的受肉でないからである。イエス自ら曰く『我は門也』我は良き牧者なり』我は羊をして生命を得且つ豊かならしめんが爲なり』と。そして使徒ヨハネは『永生とは唯だ獨の眞神なる爾と其遣し、イエス・キリストをしる是なり』というて居る。こゝに門は開かれたのである。人類は之に出入して永生を享るの特權を與へられて居る。しかも其門戸や八面玲瓏、縦横自在の門戸にしてユダヤ人も、ギリシヤ人も、何れの民族も信仰の途を辿りて達し得られる。イエスは即ちその門である。神は彼を経て人間に入り、人間は彼を経て神に到達し得るのである。此に於てか神と人間との靈交は自由になつた。實に我々はイ

エスに依りて啓示せられ、鼓吹せらるるのである。由來贖罪の教理はパウロの提唱し、高調せし所。又その解釋に種々なる方法あるも、必竟人類がイエスの人格を實現して、各自の生涯がこれと合致するに至らんことであらう。即ち天父がその子に顯現せし如く、イエスが我々の間に顯現し、一切の人類が神徳を奉體し、諦得し、柔和、謙遜にして、しかも崇高、森嚴なる生活に入ることが神の目的にして、又我々の救である。是れ即ち所謂贖罪にして同時に『永生』と稱せらる所以である。更に之を約言すれば、神はイエスの中に自己を啓示し給ひしが如く、イエスは人類の中に自己を實現せんことなのである。我々の生活に於て、人道の存する所にはイエスが存在し、イエスの存在する所には神御自身が儼存し給ふのである。そして人類は無限に永遠者に面して向上し、發展しゆくのである。即ち人類は此岸より彼岸へ亘る永久性を有して居る。しかもイエスを信する者に非ざれば此の永生を繼紹することが出来ないとは我々の信仰である。

『神は其人格に於て自己の創造を自由に統一する所の完き詩人なり。斯て神は有萬の中

に内住し、微妙なる生命の發端より最後の人類に至るまで、創造の目的、生命の完成は實
 現せられたり。而して人類は造られたり。萬有悉く其目的を備ふ。左り乍ら完成せられた
 る人に於て、神に向て歩を進むるの傾向は、更に新しく始められたり。』(アラウニグ)
獨子を信する者の特權 『凡て、彼を信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめん
 が爲なり』と言へる『信』とは何であらう。信とは聖書中にある天地創造説や、アダム、
 イヴの生れたことや又一種の信仰箇條を信することや、又更に或る教義及び贖罪に關する
 要點を信することなどに非ず。我が靈が父なる神の姿として史上に顯現せるイエスを永遠
 に活ける人格として全く信頼する精神である。即ちイエスを見えざる天の父の受肉として、
 永遠の實在として我々の全人格を悦服、敬仰、歸依せしむることなのである。
永生 次にこの言葉は他の福音書及びローマ書(二〇七)等にも使用され居るも、殊に
 本著者の使用せる獨特の言葉である。概して新約聖書(太十八〇三、同十九〇十六、可十〇
 十七、路十八〇十八等參照)に於ては當來の世界に關する生活を指して居るやうであるけ
 れども、本書の著者は之に依りて此現世より始まつて未來永遠に及ぶ意味を暗示して居る。

『永遠』てふ原語の意義は單に際限なしのことに非ず。しかも來るべき超自然的な、靈的
 な宏大な世界に屬することを含んで居る。そこでイエスに依れる信仰を以て神に歸服する
 所のものは天父と偕に福なる靈交を享有し得る妙境に入ることが出来るのである。
**『パウロによれば、卑き生命は純化せられて貴き生命を變化し、地につき、肉につける罪
 の生命は死して、靈の生命のみ生存すべし。然れども生命は一にして之を分離すべからず。
 人の肉體も亦靈的原形質を有する者なれば、肉體も亦靈化すべし。是れパウロの誕生の教
 理の生ずる所にして、彼に依れば誕生は信仰の工作の冠也。ヨハネの永生の觀念は最も
 豊富の意義を有す。ウエストコット博士之を概括して曰く『永世とは、凡て其圓滿豊富な
 る力を以て今ある處の生命、個人の限界を超越して、部分と全體と結合することに依りて
 個人を保存し完全になすところの生命、満足せしむると同時に向上心を起さしむるところ
 の生命……部分に統一を與へ、複雑に完璧を供し、天と地とを結びつけ、一の思想に存
 在の總計を捧ぐるところの生命也』』(基督教大辭典『生死』)**

永生は何時實現するや 我々が種々なる過失や、罪惡を脱却し、私心、私慾、物慾、非

理性の慾望、偽悪醜の行爲及び驕慢心等を遠離し、即ち吾人の靈臺を破壊し、毀損する害悪を滅盡する時、更に之を換言すれば、眞理、正義、仁愛、清潔、高貴の生涯に入りて人類に奉仕するとき自己が一切神の聖旨に服従して永遠者の懐に歸るとき、即ち至高者の思想と一致し、イエスの足跡に依りて歩み初むる時から永生は與へらるゝのである。

『我々は内部の眼孔を以て神の智慧を視上ることを得る。其智慧は曾て存在せし所の一切の事物を照鑑し、かつ我々の心情を樂しましむるものとなる。そして我々は外部の耳朶を以て永遠に亘りて神を讚美するところの聖者や、天使等の麗はしき頌歌を聴きうる……聖き靈の神々しき芳香は凡る香氣に優りて我々の前にいさかぐはしい。そしてこの芳香は我々を神の永遠不朽の愛に向はしむる。また我々は總ての蜂蜜よりも甘き永遠の善を味ひ得る。これが我々を養ひ且つ我々の靈と體とに透徹する。我々は饑渴如く之を慕はねばならぬ。この滋味は津々として永遠に亘りて新鮮にせられつゝ我々の中に存する。永遠の生命は即ち是である』と。(メーテルリング)

第十講 サマリヤに於けるイエス (約四〇一—四二)

世界の救主 最初イエスはペテロや、アンデレヤ、ピリポや、ナタナエルなどを召し、次にカナの婚禮に臨みて榮を顯はし、其後エルサレムに上りて權威を示し、此際ニコデモに對する大教訓となり今やサマリヤの婦人に向つての靈話となつた。即ち一個人より都に進みたるイエスは更に都より民族に向ふ順序となつて居たのである。サマリヤ傳道の記事は著者がイエスを管にイスラエル人の救主として紹介するのみならず、世界人類の救主(約四〇四二)として紹介する方法たらしむべく記したのであらう。サマリヤは元來イスラエル王國の首府にして、王の住居地及び墓地であつた。かるが故に南方王國の首府と比較せられ、エゼキエルは之を姉妹と稱して居る(結十六〇五五、同二三〇卅三)位にて曾てはイスラエル王によりて堅固なる城壁なども造られたる次第なるが、紀元前七百年代ホゼアの時代におよびてアッスリヤ王遂にサマリヤを取りイスラエル人をアッスリヤに擄へゆきて之をメデア地方に置いた(王下十七〇六、二四、二六、二九)のである。其の代りにアッ

スリヤ殖民の數は甚だ増大して來た（喇四〇一、九、十）そして此等殖民をサマリヤ人と呼ぶに至つたのである。

彼等は各々自由に宗教を持ち來りて禮拜をなせる中、次第に猶太主義の儀式を適用して彼等の宗教を結合するに至り、何時しかイスラエル人を以て任するやうになつたのであるが、しかし乍らユダヤ人は依然サマリヤ人を異邦民視して輕蔑して居たから交際せざるのみならず、其地を通過することも敢て避けて居たといふ事情の存するものあるにも拘はらず、イエスが僅に數人の親しき門弟を從へて恰も交戰國同様の敵地に無人境を行くが如く踏み入り給うた其態度は、いかにも世界的で人類を一視同仁し、以て汝等は悉く我が群れなりとの天真の心情が流露して居る。

イエス、ヤコブの井邊にいこふ 吾人は前講に於て宗教に入る者に特權の必要なきことを學び、此の講解に於て又之に入る者に條件なきことを學ぶ、即ち門地あるニコデモも、身分低きサマリヤ人も、齊しく神の子供にして神の聖前には輝ける靈である。此に於て慈眼愛腸の教主の面前にはいかなる罪人と雖も、立つことが出来るのである。從來東洋の理想

であつた『君子人』の前には小人、俗物は近寄ることが出来なかつた。従つて俗人も君子の前には畏縮して仕舞ふのみならず反つて彼と我との間に隔りの大なることを想うて失望したものである。そしてイエスと我との隔は千里の差、萬里の別ありと雖も、イエスは其の差別を感せしめずして、乃ち我を忘れて近寄らしむる愛の親和力を有して居らるゝのである。そこでニコデモに對して『更生』を語りしイエスは今やサマリヤの罪深き婦人に向つて永遠の生命を齎す所の活ける水につきて教へ給ふ次第なのである。

パレステナ地方の井に二種類ある、一は溜り水からなるのと、一は自然に湧出するのである。此にいふ所の井は原語に於て湧出の意義を含んで居る。かるが故に此水は外より來るに非ず、内から湧き起りて銀色を帯びたる美しき水柱は上にくと高き方に向ふのである。さて『この井は我儕の先祖ヤコブの與へし所なり彼も其子も亦畜までも皆之をのみたり爾は彼よりも勝れしものならんや』で、井は彼等に取りていと貴重な生命の源泉であつたのである。然るにヤコブよりも大なるイエスは其井よりも更に深き、更に貴き靈の水を世界人類に與へ給ふが故に人の靈、之を飲むとき、油然として内心に溢るゝものとなり

て『溪水をしたひ喘ぐ鹿の如く』我々をして活神を求めしむるに至るのである。

生活以外の生活 曾て孔子は『士道に志し而して悪衣悪食を耻づるものは未だ與に議るに足らず』と仰せられた次第であるが、吾人志道者たるものも亦所謂物質的衣食住の上に超越して心靈界の議に與かり、之を商量する底のものごならねばならぬ。そこで彼の高足顔回は、『一簞の食一瓢の飲』を以て尙ほよく無上の快樂を懐いて居たのである。しかし乍ら人生は疲れ易くかつ渴し易い。曾て碩學ミルすら人生を厭ふに至つたと謂はれて居る。サマリヤの婦人が迷うては又迷ひ、過ちては又過ち、罪を罪とも思はずうつかりと浮草のやうな生活を送りたる上に、數ば渴しては又渴しつゝ、生活に困難を覺えて居た際、イエスに逢うて朽ざる糧、涸れざる水の教訓を受けたのである。曾て一日ソクラテス其弟子ゼノフォンに問うて曰く『食物は何處に行かば買ふをうべきぞ』と。弟子答ふるに市場を以てす。然らば『人は善ならんとするには何處に行かば之をうべきや』と問はれたるに、答ふる所を知らざりければ、ソクラテス『余に従ひ來れ、汝我に求めん』と云つたといふとであるが、今やイエスは此の婦人に向つて物質よりも精神、此世界の井よりも救の井を

求めて管に善きサマリヤ人たるのみならず、更に靈のサマリヤ人たるべき奧義を啓示されたのである。

今や件の婦人は愧べきものは悪衣、悪食に非ずして安んぜざる身、傷める魂、病める心、濁れる情の酷だ慚べきことを朦朧ながら自覺するに至つたのである。イエスは實に良心問題、生活問題などに惱まされて全く暗黒なる罪惡界に没頭し來りし此婦人をして、靈眼一開、心機一轉、以て浮世以外の光明なる心靈界に向上せしめ給うた。

こゝに神の子と罪の子との邂逅は宛ら好箇の詩趣を描いてゐて、未だ曾てホーマーや沙翁も吟じつくさざりし萬斛の神興と穿ち得ざりし無量の人情とが湛へられて居る。故に志道者は渴くヤコブの井に救を求めずしてイエスの許に活ける泉を汲まねばならぬのである。

第十一講 續 講

活ける水とは何ぞ イエスの曰はれた『湧き出で、永生に至るべき泉』とは何であるか。是に對する答は種々なる方法をもてなしうべきも畢竟するに歸着するところは一である。即ちイエス自身活ける水であることである。こゝに於て彼を信する者に其活ける水は與へられ、彼を信する者の心にイエス來りて宿り給ふが故に、從つて生命は齎らざるに至る。かるが故にイエスは我々の心に内住して不斷の活動をなし、恰も泉の如く我々の心中に湧き出で、何時も新しき生活の動力を鼓吹してやまぬのである。

さてイエスを経て流れ來るところの活ける泉は則ち是れ神の賜物なのである。かの知識の原野や、思想の山林に泉の流を發見して、其處に清き流れありと指して打眺むるのは所謂哲學者の態度なるが、之を發見するや直ちに擲して以て、津々たる靈味を嘗ふのが宗教家の生活である。故に我々は靈泉を發見するに當りて思索の力を假らず、又この泉をくむに當りて汲器の助を求めず、更に之をのむに何等の條件を要しない。即ち全く神の權内にあ

りて人事庶般の所作や、形式や、其他の方法から來るに非ずして、而も天來の賜物である。道德も、智慧も、勢力も、金錢も之を造る能はざる、而も上よりの恵である。所謂人間がうる所の者は所謂『罪の價は死也』であるが、神に於ては『生也』即ち神の賜物は永生である。

渴くことなし 人生疲れ易く、倦み易く、怠り易く、行詰り易きは何故であらうか。これ我々を活する者がないからである。しかし乍ら人一度永遠者に歸依するとき、新しき力は勃興する『エホバを俟望む者は新なる力をえん……走れども勞れず歩めども倦むるべし』實にイエスを通じて流れ出る活る泉は一時の刺戟や何等かの事情によりて流るゝ如きものに非ず、而も今生、來生を一貫して流るゝ泉である。そして『渴くことなし』この言葉は我々の慾望や、祈願や、理想が完了せりとの意義に非ず。人生は始終錯綜せるもの、間斷なき劇甚なる奮闘場である。而も未だ與へられざる恵に向つて痛楚なく未だ實現されざる理想に於ても悲哀を抱かず。即ちクリスチャン・ライフの遠大なる完成に對する渴望は其自身實に我が喜びであり、歌であり、樂みであり、望みであるのである。

眞の禮拜 斯て話頭一轉、禮拜の場所から靈と眞とを以て拜すべき天地の主は、天下何處にも拜せらるべきことを教ふるイエスは「神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也」との眞理を啓示したのである。神は勿論物質や、形體ではない。即ち心である、靈である。しかるに從來神に對する非心靈的觀念より起る誤解は神を一定の場所に定住する者と思ひ、又「我等の列祖は此山にて拜し、に云々」とて禮拜の場所は變じ難しと思ふ所から此に誤解を生じ又禮拜の對照たる神につきての誤解から何を拜すべきやとて人々其意見を異にし、又神に對する崇敬の精神と形式につきての誤解から、神を拜するに精神なくして單に形式のみを以てするに至り、更に又神學や、教理などと眞の宗教との間を區別せざる所から起る誤解もある。此の婦人にしても神學問題につきては一個の管見を有して居たのであるが、而も宗教を握つて居なかつたのである。由來神學的論争者はやゝもすると神と人とを愛するの念に缺るところがある。今日獨逸の宗教は神學的、思索的には充分なる發達を遂ぐるものもあるも、反つて其宗教の精神に於ては大缺陷を有して居るが故に這回大戰亂開始以來世界の人々をして轉た其非宗教的、非人道的、非理性的なのに

驚愕せしめて居るのである。我々は神學を有して宗教を有せざるものと神學を有せずして宗教を有するものとの區別をなすべきである。遮莫、我々の要求する所は穩健なる神學に伴ふ穩健なる信仰を有することなのである。

禮拜の二大特徵—靈と眞と 由來宇宙の主、天地の神は神秘的生活者である。件の神秘者を拜する者は神秘的信仰を要する。神は超越的智慧である、禮拜者は智慧を要する。神は愛である、禮拜者は愛を要する。更に神は眞理である、禮拜者は誠實を要する。神は神聖である、禮拜者は純潔を要する。神は遍在者である、何處に於ても禮拜し得る。神は永遠者である、禮拜者は不斷の敬虔を以て額づかねばならぬのである。

靈なる神を拜するに當りて我々に大切なるものは靈の仲介である。從來多くの人々の想像せし如く、神にして具體的、物質的形體を有すせば、之を認むる方法も感覺に依るの外なく、又之を拜する形式も肉體を以てするの他はないのであるが、しかも神は靈なれば靈的に了解せられねばならないのである。そして我々は自己を滅却して拜するに非ず、我意志によりて靈なる神と一致しつゝ、拜することが至要の態度である。

真なる神を拜するものは先づ神御自身に關する真理と次に我々自身に關する真理を有せねばならぬ。由來サマリヤ人は神につきては眞の觀念に乏しかりしが、イステエル人は漸く豫言者を経て之を會得し、今や我々はイエスに由りて之を理解するに至つたのであるが、我々は徹底的に神につきての眞の觀念を要すると同時に、自己に於て眞理を有せねばならぬ。即ち我々の聖き性質は眞の禮拜の一種である。驕らず、慢らず、偽らざる眞の生活は眞の禮拜である。形ある神前には形式禮拜で十分なるも、靈の神前には靈の歸服の外に禮拜はない。即ち眞の神を拜する者は眞の性質を要する。是れ微つせば虚禮、虚儀のみである。

第十二講 ペテスダ池頭に於けるイエス (約五〇一—十四)

奇跡の目的及節筵の起原 爰に記載されて居る奇跡の目的は本章の廿一節にある『それは父は死し者を甦らせて生しむるが如く子も己の意に従ひて人を生しむべし』といへる眞理を明白に實現せんが爲と且つ頑迷不靈なるユダヤ人に對する示威的教育のためである。そしてこの節筵はエルサレムに於て年々三月中旬頃舉行さるゝ所の『プリム』祝祭である。その起原はといふに舊約書エステル書(九〇廿四、五、六)に據るものあるは一般に認めらるゝところである。即ち當時位あるハマ人がユダヤ人を殺戮せんと謀りしも遂に彼れハマンの大失敗となり反つてユダヤ人の勝利に歸したる事蹟を紀念すべく行はれるのである。

愚の家 ペテスダとは『愚の家』と解せらる。此池は間歇泉にして或種の病者には酷た効験があつたのである。そして其効験をうけんがために、こゝに蟬集蜂赴してゐる夥多の病めるものゝために、立派な五の廊が設備されてあつた。

吾人件の恵の家の邊に立てるイエスの態度とエルサレムの宮殿に坐して居た學者達のそれとを比較するに、著しき對照を見るのである。即イエスの態度は社會的で、活動的で、實踐的で、積極的であつたのに反して學者達の態度は出世間的で、學究的で、理論的で、消極的であつたのである。更に他言以て之をいへば、イエスの宗教生活は祭壇の前や、神殿の隅や、書齋の中にあつたのではなく、罪惡の巷や、苦しめる者の傍や、病めるもの、床や、不幸艱難な境遇に處するもの、上に現はれて居た。之に反して學者の宗教生活はモトセや、預言者や種々なる律法などの綿密な研究に没頭し去りて社會、人生を救ひ出す力とはならなかつたのである。否、むしろユダヤ人は「重を負る者は我に來れ」この聖教の如く律法の重き軛を負はせられてロングフェローの人生の詩にあるやうな「黙々として驅逐せらるゝ家畜」にひとしき事情の下に心安からざる生を送つて居たのである。

イエスの慈眼は老練なる名醫の如し かくて『いためる蘆を折ることなく、ほのくらしき燈火をけすことなく眞理をもて道をしめさん……而して瞽の目を開き俘囚を獄よりいだし暗にすめるものを檻のうちより出さしめん』このイザヤの預言に適合せるイエスはこゝ

に歩を運び最と巧妙な醫師の如く病める者、めしひ、跛者、又衰へたる者など多數の群集せる中にも、最も不幸艱難の境遇にありて、三十八年の間病みたる者の身に同情と憐愍を垂れ「愈んことを欲ふや」と宣うたのである。既往永き歲月の間、凡ゆる手段を盡し、凡ゆる資産を投じ、所謂人事をつくして此の上は唯だ々々天命をまち、上よりの御助を仰ぐことの外、何等の策もなき危機に瀕してゐた此の病者に「起よ床を取收て行め」てふ天來の神力が加はつたとき「癒え」たのである。

強者の勝利か、弱者の勝利か 近代の人々は頻りに優勝劣敗を唱へる。従つて弱肉強食の觀念が一般に行きわたつて來た。左なきだに生存競争の劇甚なる現代に處して我等は優勝劣敗だの、弱肉強食だのこの聲をきくさへ身の毛がよだつやうな感が起る。我々はニイチエの超人主義が今日の獨逸民族を誤まらしめた原因の一なることを悲しむものである。又我等は弱肉強食主義が人道を滅却し、人情を無視し、涙も、同情もなき慘狀を世界に齎らしつゝあることを觀て忍びえざる者である。しかし乍ら苦しめる者の友、弱き者の味方、否人道の友、愛の化身となり、正義と公平とを以て世界を統御せんとするイエス

は斯る残忍酷薄な主義や態度杯に相反せる見地に立つて我等人類を指導し我等を恵と愛と義と喜の天地に棲息せしめ給ふ。件の三十八年間病みたるものに對するイエスの態度は實に弱肉強食優勝劣敗の理を覆して新たな心靈界の法則を創造し給うたのである。即ちイエスの此新たな法則に依つて弱者は強められ、低き者は高められ、人情は温められ、人道は回復せられ將た又社會家庭は祝福せらるゝに至るのである。キツドが此に社會進化の法則を認めたのは卓見といふべきである。件の精神徴つせば、社會は百鬼夜行の場所となり、人類はサタンの化身たるに至らんのみである。會てルーテルは『シーザーと共に興らんよりは、キリストと共に亡びんことを欲ふ』と謂うたが、我等は所謂強者と共に成功せんよりは、寧ろイエスと共に心靈界の勝利者たることを期せねばならないのである。

歸依者の好權範 件の病者がイエスの『起よ床を取りあげて行め』との權威ある言下に立ちどころに癒された次第につきては我等の注意して學ぶべき三要素が存して居ると思惟せらるゝ。

一、絶大な權威者に歸依するに當り我等は其權威者に向つて何故に爾はかゝる權威を有するに至りしや、其權威に依頼せばいかなる効驗ありやなど質問するの要はない。眞個の歸依者は眞の服従者である。我れ一旦試みて後、従はんなどの精神は未だ眞の信頼なきが爲である。眞の歸依者は『起よ』との言下に歩まねばならぬ。即ち志道者は躊躇ふ所なくイエスの權威に信頼すべきである。

二、此處に渡船場あり、そして我々は其渡船に乗りこまなければ到底向ふの岸につくことのない事情ありと假定せよ。我等は狐疑する所なく之に乗り込まねばならぬ。由來半信半疑は人生の不幸である。信仰上の大敵である。乗るべき場合には時を移さず、後を顧みるところなく進むのが賢き志道者の態度である。

三、イエスの我々に與へ給ふ恩寵を斷えず攝取し、活用し、そして之を培養しなければならぬ。即ち癒されて健全なる人となり、以て我等の責任を完ふすべきである。

第十三講 エルサレム神殿に於けるイエス (約五〇十四—十六)

安息日はユダヤ人の桎梏 舊約書出廿三章十二節に『汝六日の間 汝の業をなし七日に息むべし、かく汝の手及び驢馬を息ませ、汝の婢の子及び他國の人をして息をつかしめよ』とある記事に據れば一週の第七日、即ち安息日は博愛の精神を帯び、彼等自ら休息せんとするよりもむしろ他人に休息を與へんとの目的を以て設けられたと共に、彼等は此の日に會堂に集りて公拜をなし、犠牲を捧げ、祈りをなすべきものとして宗教的意義を附するに至つたのである。然るに何時しか此日を潰さないやうに守りたい精神から夥多の規則や、習慣を案出し、徒らに其文字に囚はれて精神を失ふに至り、果ては其形式が彼等の桎梏となりて酷だ度し難い態度を現はすに至つたのである。即ちイエスが病める者を愈し給うた日が安息日なりし所以を以てユダヤ人等は、イエスを安息日の犯則者として罪を鳴し且つ殺さんと謀つたのである。

人の子は安息日にも主たる也 イエスは自ら此日を守りしが、當時の傳説や、頑迷な態度を攻撃し『人は羊よりすぐるゝこと幾何ぞや、然らば安息日に善をなすは宜し』(太十二の十二) 又『安息日は人のために設けられたる者にして人は安息日の爲に設けられたるに非ず』(可二の廿七) と道破して安息日に關する新しき律法を制定し給うたのである。

神は不斷の活動者なり 實に神は空間と時間とに超越し、永遠に亘りて働き給ふ至上者である。一週、一歳、否時々、刻々高き天の衆星を守り、低き地の萬象を 司り給ふ神は七日目即ち安息日も亦空の鳥や野の花や、川の流や將又人類を顧み給ふ。かるが故に『爾曹之よりも大に勝るゝものならずや』と宣うた。イエスの父は安息日なればとて宇宙の間、に不在の神ではない。眞に常に在りて在るところの神、活ける神、斷えず働くところの神、倦むところなき力の神である。そしてイエスは天父の聖旨を體現して居られたから『我父は今に至るまで働き給ふ我もまた働くなり』との鮮かな答をなされたのである。

イエスに依りて勞働は聖めらる 由來イスラエル民族は職業といふことに興味と尊敬とを有して居たやうに想はれる。當時の諺に『子供に律法と職業を教ふるは親の本分なり』『子に職業を教へざるは盜賊を教ふるなり』『正しき職業を教へることを勉めよ』『肥えたる

度を攻撃し『人は羊よりすぐるゝこと幾何ぞや、然らば安息日に善をなすは宜し』(太十二の十二) 又『安息日は人のために設けられたる者にして人は安息日の爲に設けられたるに非ず』(可二の廿七) と道破して安息日に關する新しき律法を制定し給うたのである。

神は不斷の活動者なり 實に神は空間と時間とに超越し、永遠に亘りて働き給ふ至上者である。一週、一歳、否時々、刻々高き天の衆星を守り、低き地の萬象を 司り給ふ神は七日目即ち安息日も亦空の鳥や野の花や、川の流や將又人類を顧み給ふ。かるが故に『爾曹之よりも大に勝るゝものならずや』と宣うた。イエスの父は安息日なればとて宇宙の間、に不在の神ではない。眞に常に在りて在るところの神、活ける神、斷えず働くところの神、倦むところなき力の神である。そしてイエスは天父の聖旨を體現して居られたから『我父は今に至るまで働き給ふ我もまた働くなり』との鮮かな答をなされたのである。

イエスに依りて勞働は聖めらる 由來イスラエル民族は職業といふことに興味と尊敬とを有して居たやうに想はれる。當時の諺に『子供に律法と職業を教ふるは親の本分なり』『子に職業を教へざるは盜賊を教ふるなり』『正しき職業を教へることを勉めよ』『肥えたる

ラビは「價なし」など言ふのがある。一旦はラビであつて、後イエスの僕となつたパウロも自ら天幕を造つた次第であるが、ヂヤスチン・マーターがイエスのヨルダン河畔に現はれたる姿を想像して其の風采は堂々たる學者風にあらずして、却つて労働者の面影を帯びて居られたであらうと謂つたやうに、イエスは多年の間ナザレの作事小屋に於て傳説によると犁と軛との製造を業として居られたのである。世界の聖人と仰がる、ソクラテスも一度は石工であり、孔夫子も亦委吏であり、大哲學者スピノザも亦眼鏡磨きであつたといへば、イエスの木匠たりしことが何等イエスの品位や、名譽や、使命などに影響するところはない。我々はむしろイエスが圓熟せる、老練なる、申分なき木匠であつたことを認めずには居られないのである。そして我々はイエスが普通の勞作に従事し給ひしことに因りて、人類の勞働が神聖なる義務として尊き職業として祝福されたることを感謝せずには居られないのである。

此世界は父と子との共同舞臺也

豫言者エレミヤは幻によりて神の聖業を暗示されたとき『汝起て陶人の屋にくだれ、我かしこに於て我言を汝にきかしめんと、われ即ち陶人の屋

にくだり視るに轆轤をもて物をつくりをりしが、その泥をもて造れるところの器陶人の手の中に傷ねたれば、彼その心のまゝに之をもて別の器をつくれり』(耶十八〇二―四)とこのことを謂うた。實に神は陶人に同じく、人間は粘土に等しく、そして人生の一展一開は轆轤に似てゐる。たしかに神は陶人が粘土を以て自由に己が欲するところの形を製作するやうに人間を改造し給ふのである。即ち我々は創造者であり、改造者であり、又完成者であるところの神の聖業に委ね奉りて自己を創造すべきである。

かくてイエスの物質的勞作の習慣は、今や一轉して精神的勞作と變じ、昨はナザレの作事小屋に於て良材や、曲木を手にし彼れ、今や神の宮殿に立ちて病めるものや、惱める魂を抱いて愛しむ身となつたのである。十數年の間『働く』ことに熟練せるイエスは『我も亦働く也』との覺悟を表彰して天の父の聖業を完成すべく幕地に進んだのである。

曲木もイエスに逢へば良材となる

管に病める者が癒され、萎へたる手が全ふされたるのみならず、曲木もイエスに逢へば良材となり、罪ある者も彼に依りて義人とせられたのである。余は嘗て某家に木の瘤を以て室内の裝飾を施されたる美觀をみて良匠の巧妙なる

に感嘆の聲を發したことがある。イエスは云は、人間の瘤も目すべき性癖や、缺陷や、弱點などを有せしサマリヤの婦人、マグダラのマリヤ、ザアカイ、マタイ等に巧妙な手工を施して自然の良材以上の美觀を添へ給うたのである。即ちザアカイの如き『主よ我所有の半を貧者に施さん。もし我れ証認て人より取りたる所あらば四倍にして之を償ふべし』と告白せし程に改造されたのである。

現代の人心に働き給ふイエス 如是く瘤を美觀に、短所を長所に、缺陷を充實に、死を生に變じ給ひしイエスは今日の人心にも働き給ふ。而も其働きは神秘的にして時間に妨げられず、境遇に制限せられず、何等他に俟つ所もなく、時々刻々人の魂の中に宿り給ふのである。實に我内心に顯はし給ふ其力は驚くべき者である。此力が我魂を健かならしめ、福ひならしむるのである。

第十四講

我は生命のパンなり (約六〇一―五八)

湖邊の聖典 本書の記者は本章を前章と同一の筆法で起し來り、先づ最初に奇蹟を記載し、次に之に關するイエスの説明を叙述して居る。即ちサマリヤの婦人や、エルサレムの人々などに道を説きしイエスは、今やガリラヤ人等に對して永遠の生命を人間に頒布すべく天より派遣されたことを描寫して居るのである。

恐らくエルサレムからカペナウンに還りしイエスはガラリヤ湖畔の西側の何處で使徒達に出合ひ、彼等の働につきての報告に接し、それから此處に數日間、福音を説き、かつ病める者を癒し、其の後静處を尋ねて、ベツサイダ附近に使徒達と共に輕舟を泛べて渡り給ふや、群衆後を慕うて來りたれば、イエス慈悲を垂れて彼等を饗應し給うた次第なのである。時は紀元廿八年の逾越の節の矢先、そしてバプテスマのヨハネの死の直ぐ後であつた様に思はれる。

此は何物なりや 往古イスラエル人がモーセに導かれて四十年の間荒野に彷徨せるに當

り、耕す田も、飲む井もなき折柄、其形は小さく圓く、其味は蜜を混ぜたる薄き粉菓子に等しき一種の食物が朝なく、天幕の周圍に露と共に降り來りしが、彼等はカナンの附近に達して耕作に適する土地をうる日迄之に依りて養はれたのである。當時彼等は件の食物が天より降り來れるを見て驚異の念に打たれ、「マナ」此は何物なりやとの意味」と言ふ名稱を附したのである。吾人は神が食ふ物のなき時「マナ」を降らし、食ふ物の出來た時之を止め給うた其攝理の妙用につきて深き意義を學ぶと同時に、又イスラエル民族が神の經綸を見て「マナ」即ち此は何物なりやと驚嘆せし如く吾人も亦古往今來世界、人生の上に行はるゝ其攝理の宏大にして神秘なるのに驚嘆せざるを得ないのである。往古のイスラエル人より現代の吾人に至るまで「此は何物なるや」との疑義は間斷なく、従つて之を窮めんとして居るものなるが、而も此の疑義存するがために人類は無限に向上せしめらるゝ次第なのである。

マナなる言葉の使用法 イエスは本傳の第四章に於て活ける水の賦與者なることを示し給ひしが、此には自己が靈魂の活けるパン即ちマナであることを教へ給ふ。件の言葉は或

る程度まで舊約書の智慧文學中に含まれて居る。即ち智慧が靈魂の糧であることを暗示して「汝等來りて我が糧を食ひ、我がまぜあはせたる酒のみ、拙劣をすて、生命をえ、聰明のみちを行め」(箴九〇五、六)と教へて居る。そして件の舊約書の「マナ」が一般に精神的に翻譯されて「ロー」は之を「ロゴス」即ち神の道と同一に認めパウロは之を靈魂の食物と認め(哥前十〇三)詩篇の作者は之を天使の食物と呼び「彼等の上」にマナを降らせて食はしめ天の穀物を與へ給へり、人みな勇士の糧を食へり神は彼らに食物を送りて飽足しめ給ふ」と歌うて居る。又イザヤ廿五章六節に「萬軍のエホバ此の山にて諸の民の爲に肥えたるものをもて宴をまうけ、久しく貯へたる葡萄酒をもて宴をまうく云々」とありてメシヤの大饗宴を描寫して居る。そして此の思潮は新約に流れ込んで居る(太八〇十一、

廿二〇二以下、廿五〇十、廿六〇廿九、路十四〇十五、黙十九〇九)。
イエスは靈のマナ也 往古イスラエル人がカナンの地の境即ちエリコの平原に於けるギルガルに達して穀物を食ひし其翌月より降ることの止みたるマナは、一時のものにして永久のものではなかつた。神は一時の要求と永久の要求とを豫知し、人類の事情と境遇とに

應じて縦横自在に攝理し、經綸し給ふのである。即ち我々の要求に應じて神の恩寵の手段も異なつて現はれる。

此に於てイエスは今や人類の最も要求しなければならぬものは、限りなき生命を支ふる爲に必要なる『マナ』であることを教へ給ふにも拘はらず、兎角心眼の開けざるユダヤ人等は此の理を解することが出来なかつたのである。遮莫、イエスは眞にマナである。人類の要求してやまぬマナである。かくて我々がイエスに就て明白な理解を有すれば有する程、我々のイエスに對する要求は増加し、我々の内心に靈的生命を扶殖すればする程我々のイエスに對する渴仰は切實になつて来る。之に反して我々が朽ち果つべき物質的慾望の盛んなればなるほど、下等なる生命に向つて憧がるれば憧がる、ほどイエスに對する要求は減じて仕舞ふ。然り寶玉は賤器には適はしからぬのである。當時ユダヤ人等が、イエスの我は天より降りしパンなりと言ひしとにつきて譏きしも斯る理由に外ならぬ次第なのである。曾てダンテは信と望と愛との三大神徳を實行することに由りて、人間は始めて神性の所有者となり、以て永遠の祝福に與かり得べきことを謂うて居るが、件の祝福は勿論

のこご、有らゆる祝福と恩寵とはイエスの中から流れて出るのである。即ち諸の福と徳とはイエスの中に秘藏されてゐる。我々が一度之を發見すれば鑛脈を發見する鑛山師の如く、之より至愛や、至眞や、至善や、至美などを豊かに領有し得るに至るのである。

高き生の要求 往古イロハも存在して居なかつた時代には其趣味も低度であるから、賤しき丸太小屋に棲んで居ても満足されて居た。しかし乍ら趣味や、希望などが進むと、高尚な美術や、音楽や、文學杯を要求してやまぬ者である。即ち現代人はイロハなき時代の人々の夢想せざりし高き藝術美を憧れて居る。しかし乍ら人間は單に審美性や道徳性の満足のみで生くる事は出来ない。より高きより聖き靈的生命美を希求してやまぬ者である。即ち生命の本源なる神に到達しなければ安心も、満足も出来ない者である。そして神の許に上進せんとする人類に取りて、イエスは大切なる途であり、眞理であり、生命であるのである。

第十五講 主よ我儕は誰に往かんや (約六〇五九六九)

イエスの憂ひ イエス御自身が上より降れる生けるマナなること、そしてイスラエル人の先祖が食ひたれど尙ほ死にしマナの如き者に非ず此マナを食ふ者は永遠に生くべしとのことを肯せざりし點より我々が當時のユダヤ人等の希望や、理想を考へて見るに、物質的、政治的方面に關する事柄が多かつたやうに想はれる。かるが故に或者はイエスを流する醫者の如く思ひ、或者はイエスを人氣ある政治家のやうに想うたらしく見えるのである。そこで豫期に相反せるイエスの生涯に望を失へる輩儕は『此は甚しき言なり誰かよくこれを聽んや』などと云うて、彼を捨て去るが如き何とも淺ましき輕薄な舉動をなすに至つた次第なのである。此に於てイエスも聊か憂なき能はざる所から十二の弟子達に向つて『爾曹も亦た去らんと意ふや』との問を發し給うたのである。件の問に對して弟子等は種種なる感想を懷いたに相違ない。實に慚愧して其の爲す所を知らなかつた者もあつたらうと想像せらるゝのである。

今日我々の信仰状態いかんを顧みるにイエス觀にも、宗教觀にも、色々なものが現はれてゐる。或者は神に向つて無病息災、子孫長久的の祈願をかけて居る者もある。或者はイエスを單に家庭教育や個人修養などの方法と心得て居るものもある。さうして之が應驗なき場合には、失望して教會を去り、イエスを捨つる者もある。殊に近來物質主義の惡影響をうけてイエスを離るゝものが尠くないのである。今日イエス現はれ來りて『なんぢらも亦た去らんと意ふや』との問を發し給ふ場合に際し、ペテロと共に『主よ我儕は誰にゆかんや』と徹底して斷言し得るもの、果して幾許あるであらう。

ペテロの應答 人類は歸趣なくしてはやまぬものである。しかし乍ら當時のユダヤ人等はモーセや、預言者や、バプテスマのヨハネや、又他の學者などに立歸らうとしたのである。たしかに彼等は歸趣すべきところを知らなかつたのである。アミエル曰く『人々は宗教なくして生きうると考へるが宗教は到底破壊されないものであると云ふことを理解しない。我々の問題は單純である。即ち我は孰れを有すれば可なるか、我々は誰に往かんや』と。そこでペテロのイエスに歸依せる三つの理由といふものは一、イエスは人類の痛切な

る靈性の要求に満足と興ふること二、イエスは永生の道を有するのみならず、其道は彼自身特有の者にして他に之を有するものなきこと三、イエスは神の聖なる者なること、乃ちイエスの罪なき人格を高調する所に存するのである。

由來人類の最も痛切なる要求は我靈性上の満足である。曾て水を酒に變じ、五つのパンを以て五千人を養ひ給ひしイエスは、今も尙ほ吾人の心靈を養育し給ふのである。或者は神秘を尊び、或者は道德界の正義を慕ひ、或者は靈界の眞理を尋ね、或者は人生の慰安を要求して居るが、イエスの心には此等のものが悉く秘藏されて居て、遺憾なく我々の要求に満足と興ふるのである。

神の聖なるイエス。ペテロ又曰く「我儕信じて知る、爾は神の聖なる者也」と（英語改正譯による）。イエスの罪なき、私心、私慾、私情なき神の生涯は、實に惡鬼を逐出す力よりも一層偉大なる者である。所謂奇蹟なる者よりも更に大なる奇蹟である。かゝる神聖は所謂「力」にも非ず、「智慧」にも非ず、否力量、智慧以上のものである。眞に此の神聖は容易に興へらるゝものではない。今日の學術は進歩して居る。殊に醫術は進歩して大概の

病氣も之によつて癒さるゝのである。乃ちかゝる力量は品性の卑しき醫者でも有することを得るも、而も神聖なる品性は容易に得られぬものである。そして其神聖なる品性は凡ゆる學問や、力量や、才能などよりも、より偉大なる價値を表はすものである。

イエスの他なし。哲學者ジョン・ロックは「もし我れ再び我一生を繰回しうるを得ば我はパウロの書簡と詩篇の研鑽とに力めん哉」と云うた。又天文學者ケプレルは「我は神につきての觀念に耽りつゝある。我は神の稜威に打たれざるを得ない。蒼穹に於て神は壯嚴なる姿にて我面前を過ぎつゝあり」というた。曾に彼等のみならず、科學者アガシイも、ローマネスも、神の讚美者たると同時にイエスの信仰者であつた。殊に後者の如きイエスの神聖と其贖罪とを確信するに至りて勝利の死を遂げたのである。そしてペテロは眞に能くイエスを信じ、潔き完全な生涯を認め、其中に永生の秘藏されて居ることを悟つた。即ち「聖哉々々」と讚美するの外なき、イエスの品性を識つて居たのである。我々も中間を許してはならぬ。信か、不信か、拒絶か、肯定かの兩極端に立つものである。「爾は神の聖なる者也」てふ信の斷案は人生に切實なる感と興ふるものである。

人類の歸趣 一時の思想動搖のためや、或は境遇のためや、或は物質的慾望のためや、或は種々なる艱難、故障のためや、將た不平、不滿のため、杯によりてイエスを離れんと意ふ者あらば、暫し『聖なる者』の面前に立ち止りて、心機を一轉せねばならぬ。吾人は俗惡なる世界に住みて安んずべきか。滔々たる社會の享樂主義に向うて進むべきか。形式に囚はれて居る國民道德に満足すべきか。朝に盛え夕に枯るゝ現代の哲學や、藝術に往くべきか。將た自我なる者に歸着すべきか。否我々の歸趣はかゝる事情の上に超越する所がなくはならぬ。我々はアウガスチンと共に『爾』を見出すまでは心を安んずることの出来ないものである。實に永遠の安住と歡喜と生命とはイエスの中に藏れて居る。

第十六講

從はんとする意志

(約七〇一—一七)

イエス構廬の節に上る

暫らく、ガリラヤ地方に留りて後、迫害の手は自分を捕へんとす。まぢ構へて居ることを覺悟しつゝも、敢て其節に與からんとてエルサレム城に上りたるイエスは律法以外の眞理に就て一大獅子吼をなした。しかるに頑迷なるユダヤ人等は曾てイエスがラビの學校に於て修めたることなきに、而も其教誨の堂々たるものを怪しみ且つ訝り『此人は未だ學ばず、如何にして書をしるや』と云うた。一體ユダヤ人等はイエスが人間から學ばずして有つて居たところの知識を知らないのである。即ち彼等は天の父がイエスの教師であり、又天父の意志が彼の學課であり、そして自己に於て天父を啓示することが、其使命であることを認めて居なかつたのである。實に隠れたる眞理や、深遠なる秘義は上より顯はれ來りてイエスの靈眼によりて炳かに讀破されたのであるが、知識は單に書物のみを通して與へられ、眞理は單に律法のみによりて示さるゝものであると考へて居たユダヤ人等には、抑もイエスの一舉一動は疑惑の種となつたのである。

我教に非ず かくてイエスは彼等の詰問に答へて『我教ふる所は我教にあらす我をつかはし、者の教なり』と宣ひ、そして『人もし我を遣し、者の旨に従はゞ……知るべし』と言ひ添へ給うた。

従ふことは靈的奥義を攝取する要案也

我々が、神の眞理を會得するに當りて大切なることは神の意志を實踐することなのである。由來實驗と經驗とは同一の根底より生ずるものなるが故に、彼我相分れて起るものではない。何人にも基督教の經驗を握らんと欲するものは基督教的實驗を爲さんとする意志を發揮せねばならぬのである。何人にもキリストを知らんと欲するものは彼の指揮する儘に彼に従はねばならぬ。實驗なくして經驗は獲られぬ。キリストに従ふことなくしてキリストは會得されない。實に従ふことは心靈的知識を攝取するところの機關である。恰も肉眼が事物を視る上に於て大切なるが如く、心意が道理を識別する上に大切なるが如く、従ふことは心靈的眞理を攝取する上に於て頗ぶる大切なるものである。件の教は聖書が世界に寄與せる大なるもの、一である。件の教は純粹に聖書思想である。哲學も、科學も未だ曾て斯くまで單純にして、而も壯嚴なる眞理を我々に教なかつたのである。

理を我々に教なかつたのである。

従ふものは眞理に到達す

神の意志を實行せんとする熱情を有する者は、それが神のものなりや否やにつきての知識に導かるゝものである。一度我々の心裡に神の意志の宿るとき、キツバリと過去の愚かなる、悲しむべき點と將來の喜ぶべき樂しむべき點との區別が顯れる。『私は自ら人生はごういふものであるかてふ問題に惱まされて、斯ういふ返答をうけた』人生は「禍」で妄誕である」と。そして實に私の生涯が意味のない、禍の生涯であるとは一般の人生に適するところではないが、私のみには當てはまる事柄である。私は近頃福音書を読んで人間が光明よりも於多く暗黒を愛して居る所以は其行爲が正しくないから、光を惡み、其行の責められざらんがために光に來らずといふことの理を解した。此に於て私は人生の意義を理解せんがために先づ、人生は無意義な、有害なものでないといふ根本義を會得し、それから之を了解するに必要なる理論に移らねばならぬことを悟つたのである。私は何故永い歲月の間、斯の如き明白なる眞理の周圍をぐるゝ環つてゐて、之に到着しなかつたかといふに、もし私が人類の生活につきて考へたり、語つたりするな

ら少数の寄生動物的生活に非ざる、人類の生活につきて是非とも思惟し、言論しなければならぬ必要があつたからであると思ふ。恰も二と二と合すれば四となる如く、件の真理は常に真理であるけれども、もし私が斯る理を認むるなら、私は善くない者であることを認めざるを得なだからと云ふ計りでなく、二と二と合すれば四となることを感ずるよりも、自分は善良なる者たることを感ずることが自分に取てより多く大切でもあり且つ義務であつたからである。併し乍ら私は善き國人を愛することが出来、そして自分を憎むことが出来るやうになつてから件の真理を承認するに至つたのである。今や萬事私には明白に理解せらるゝやうになつた。』(トルストイの『我懺悔』より)

イエスの言葉は人心の骨髓に徹す イエスの驚嘆すべき真理の光が一度我々の心裡に輝き始むるや、エックス光線の力よりも、より強く節々骨髓まで透徹して活きて且能あるものとなる。固より理性の力は神から相應に働くやう造られて居る。併し乍ら其理性の働きの達し難い神秘の境がある。そこで夥多の技術家も、詩人も、畫工も、彫刻家も、音楽家も眞の靈的妙境に到達することが出来ないのである。知識や、理性其物なども深刻なる心靈

の經驗に關しては殆んど無關係である。即ち悔改や、試鍊や、信仰や、希望や、天に對する憧がれなどは深甚なる經驗であつて、此等は單に理性の力によりて交渉され得るものではない。然り賢き者、智き者に隠されて居る此等の秘義は却つて幼兒に顯はされるのである。即ち神意を爲さんと欲する彼等には眞に神の聖旨が教へらるゝのである。

爲さんとする意志 我々は知らんとする意志を要し、又信せんとする意志を要するものなるが、眞にイエスに従はんとする者は、爲さんとする意志が必要である。聖書に關する知識や、イエスの神性に關する知識や、神の存在に關する知識などよりも、より大切なるは赦されたる罪人たることを自覺し、そして安かなる心を懷いて、日々十字架を負うて世に立つことである。

第十七講 活ける水 (約七〇卅七以下)

聖靈降臨の記號 此に記されて居る節筵は七日間で終るのが正式であるけれども特に習慣上一日を延期し、イスラエル人の祖先がカナンの郷に乗り込みたる當時を偲ぶために、末の大なる日に聖安息日を守るのである(利未記二三〇三六を見よ)。そして曾てサマリヤの婦人に對して自分が活ける水の賦與者であることを公言せるイエスが此に再び水につきての深遠なる眞理を示した所以は、彼がこの節筵の禮典に關係を有してゐるからである。此節筵中最後の一日を除く外、毎日祭司は黄金の水瓶を以てシロアムの池から水を汲み來り、之を朝の犠牲を供ぐる際、詩篇の朗讀や、讚美歌の最中に祭壇の北側に於て酒と共に注ぎ出すのである。かくて此水はイスラエル人が四十年間荒野に於て神から奇蹟的神水を頂きたる事とメシヤの日に於て約束されたる聖靈の降臨を記號する次第なのである。此第八日に於て水の注がれなかつたとき、イエス自ら進んで我は活ける水、即ち聖靈の賦與者であることを明言し給うたのである(イザヤ書十二〇三参考)。言ふまでもなくヤコブの梯

子や、蛇や、マナや、水の湧き出し岩など、舊約に載せてある出來事は悉く來らんとする「實體」の影にしてイエスこそ其の應驗者であり、又實現者であつたのである。

人間の痛切なる要求 バレスチナの如き乾燥、涸渴せる地勢は、他に其類の稀なるほど、たしかに人類の心靈的事情に應用しうべき理由を存して居る。即ち斯る水に涸渴する土地は正に人心の最も深甚にして切實なる、神秘にして沈痛なる要求を暗示するものに非ずして何であらうか。固より我々の心意は知識を、心情は愛を、意志は實行を要求するものなるが、更に

『あゝ神よ、鹿の溪水をしたひ喘ぐがごとく、わが靈魂もなんちをしたひあへぐなり、我魂は渴ける如くに神をしたふ、活ける神をぞしたふ』

と言へる人類の状態を歌へる心はイエスの看取して居た所であつた。曾て英國のクレイトン監督が永眠せんとする數日前(一千九百年一月七日)パーシベル牧師と相對して種々な問答をなして後、同牧師の將來の最も大なる憂ひは何でせうかとの間に對してクレイトン監督答へて曰く『將來の最も大なる憂患は高き「アスピレーション」の缺陷に在りて存

することを疑はない』と。何處、如何なる時代に於ても我々の憂患とすべきものは、件の向上心、憧憬心、渴仰心、歸依心の缺陷に存する。一個人の危機は此の缺陷から起り、延いて一國の危機も亦之から現はれて來るものである。あゝ、高き者を懂がれざる人の心は禍ひなるかなである。

イエスの大聲疾呼 此に於て人心の秘密と要求とを看取せるイエスは節筵の末の大なる日、第八日に於て蝟集せる人々に對して叫ばざるを得なかつたのである。即ちイエスは自己の救の井から日となく夜となく、溢れ出づる新鮮なる生命の泉を群衆に頒布せんとの熱心を現はしたのである。由來イエスの我々に賦與する深遠にして且つ新鮮なる靈の賜物は光線と空氣とが何處にも存する如く、何處の人類の間にも普及するものである。實にイエスの教訓はモーセや、モハメットや其他の教師等の教訓とは異なつてゐて、倫理律でもなく、律法主義でもなく、全く福音であつた。此に於て惱み、傷み、且渴ける魂はイエスの許に來らねばならぬのである。

我等を招き給ふ 『人もし』とあつて、主は一視同仁以て一切の人間を招き給ふ即ち無

神論者にもせよ、宿命論者にもせよ、偶像禮拜者にもせよ、懷疑者にもせよ、不信仰家にもせよ、失意者にもせよ、捨てられたる人にもせよ、流浪人にもせよ、悲しめる者にもせよ、いかなる境遇に處するものも、高められんと欲するもの、淨められんと欲するもの、慰められんと欲するもの、強められんと欲するもの、信せんと欲するものは『我に來れ』との思召を垂れ給ふのである。そして何物も有たず、而も一切を有たんと欲する者もイエスに來らねばならぬ。尙ほイエスは最も渴ける魂に向つて『來りて飲め』と宣ふ次第なのである。かゝる故に『來りて飲め』とのイエスの思召を悟るものは來りて之を飲むべきである。左れば其人は満足の中に生き、満足の中に座し將た限りなく満足の中に常住し得るのである。併し乍ら來りてのまざる者は渴の中に生き、渴の中に死し而して限りなく渴の狂妄中に了る次第なのである。

禮文より人格へ 『我に來れ』とあつて主は禮文より人格へ導き給ふのである。イエス・キリストは人格的救主である。古來世界の宗教はもう澤山だと思はれるほど數々の禮文儀式を有つて居る。そこで人の生命が殆んど滅盡して仕舞うたではないかと思惟さるゝまで

に禮文に羈され、そして犠牲の煙が青空を蔽うて反つて天上所の神の姿を隠したではな
いかと想はるゝ次第なのである。こゝに於て生命の水はシロアムの池からも生せず、又其
の水は麗はしき讚美歌や、嚴かなる禮典からも來らず、又其の水は祭壇や、犠牲などから
も起らず、即ち其の水はキリストより流れ出るものなるが故に自ら『人もし渴かば我に來
りてのめ』と宣うたのである。

イエスに倚りて満足あり 何人もイエスの許に來らねば眞の満足を發見することは出來

ぬ。我々の有する福なるものも最も高きそれではない。そして我々が單に平和を求むると
も偶ま罪の觀念起りて安んじ難く、又單に愛を求むるとも偶ま悲哀と憂愁とが群り來つて
得る所なく、又單に眞理を求むるとも偶ま疑惑の念生じて歸趣する所を知らざるのが普通
人間の經驗の様である。しかも我々がイエスに向つて求むるとき、彼に向つて祈るとき、
彼の心情の中に、愛の中に常住せしめんが爲に來りて我を伴ひ給ふのである。

第十八講 世の光なり (約八〇十二)

暗黒を破る力 メシヤを光と思惟することは、ユダヤ人等に取りては理解し易き觀念で

ある。(路一〇七八、七九、二〇卅二参考) として特に節筵の際、之を唱ふるのは適當な教
訓である。何となれば件の節筵中、恐らく最初の一日丈は習慣上婦人の禮拜所に於て二
個の大なる黄金製の蠟燭臺が使用せられたからである。實にキリストは世の光であつて、
此世界の無智と愚蒙と罪惡とは彼の力によりて消滅して仕舞ふのである。

光を慕ふ本能 由來何處の民族間にも光を慕ひ、且つ光に面して歩まんとする傾向を有

してゐる。我民族が元旦の初日の出を迎ふる習はしや、詩に、歌に、畫に之を頌する趣味
や、支那人が赤帝と唱へて之を尊ぶ習慣や、印度人が光明世界を憧がるゝ傾向や、ペル
シヤ人が太陽の神が死人を判決すると思惟したことや、ギリシヤ人にも亦光明が暗黒を
征服する觀念の存して居たことなどを概括し來れば光は神の記號であつたことを認めずに
は居られないのである。そして件の觀念は最もよくイエスの教に於て發達せる次第にて使

徒ヨハネが『光は暗にてり』といひ、又は『眞の光は世に來れり』というて、イエスを光の實現と認めたのである。即ち神は本體の上からすれば靈なるも、妙用の上からすれば光なのである。イエスこそ其物心兩界を照し給ふ眞の光、輝ける神の姿である。

於多くの光を欲する

人性は本來上を望み、上に向はんとするものにして、闇を忌み鬱を嫌ふものである。しかし乍ら我々が一旦其根本性に立歸りて我生活のいかんを反省するとき、直に其愚蒙と罪惡との深刻なる觀念を喚び起すものである。此に於て一寸の善に進まんとすれば一尺の魔に妨げられ、喜の光り我衷情に存するかと思へば、憂の闇み我心裡に蟠まる次第となる。かるが故に我々は暗黒の中に、憂の中に、不安の中に、不可思議の中に、より多くの光を追求してやまぬのである。即ち我々は天を仰ぎ、上を望み、其煩悶の解決せらるゝ日を祈つて居る。我々は單に物質界を照らす光にては充分でない。固より眼は見ゆるものゝみを以て満足が出来ぬ。即ち海や、山や、野や、林を照らすところの光よりも、より高き光を自覺的に要求してやまぬのである。一言にしていへば、世の暗黒は道德上のそれである。そして人間は其暗黒の中に我が行くべき眞正の途を發見するに苦しんで居るの

である。ミルトン歌うて曰く『自分の明白なる胸の衷に光を有つてゐる人間は其臺に座して輝ける日をたのしむことが出来る。左り乍ら闇き魂や、汚れたる思想などにかこまれてゐる人間は眞日中の下にも無明の中を歩み、そして自分が自分の牢獄となる』と、理ありと謂ふべきである。

イエス自身より顯はる、輝き

曾てホルマン・ハントは救主の生涯につきて、巧妙な、嘆美すべき名畫を描いたが、明白な靈眼を以て其イエスの姿を讀破するものに取りて見逃すことの出来ない一點が存して居る。救主は自分の手に燈火を持ちつゝ、陰鬱な場所に立つてゐて、其燈火が宮の聞き廊下や、そしてイエス自身の悲哀を帯び乍らも、しかも麗はしき顔などを照して居る。即ち其光はイエスの携へてゐたところの燈火から輝き出したのである。しかし乍ら此は大なる錯誤と謂はねばならぬ。由來イエスの人格から其輝ける顔から後光を注ぎ出して居る。即ちイエスの比倫なき高潔と恩恵と慈愛とから顯はれ來るものが眞の光たるべきである。眞に彼れ自身世の光である。其光は彼が教へた所のものに非ずして、しかも彼が固有してゐて又實現した所のものである。靈と肉と融合し、物と心と一

如となつて出現したイエスの生涯は世の光である。人體の中に生活し、其唇を通して永遠の眞理を語り、其心意を通して不朽の眞理を思惟し、そして苦き經驗と辛き情態を経たる事實及び神の洪大にして驚くべき聖と愛との性質がイエスの體中に宿りたる事實とは地上一切の物よりは世の光であつて『すべての人を照すまことの光』なのである。

其光は人間の新しい觀念となる

我々はイエスの生活に於て靈肉一如の實現を認むるものなるが、しかも彼の眞の生活は空の鳥や、野の花の如き自然のものにあらずして、所謂自然以外に超越せる道德的な者である。そして此の靈的觀念は徹頭徹尾福音書を一貫して居るのである。かるが故に『生命はかてより優り、身體は衣よりも優れるものならずや』といひ、又『されば何を食ひ何を飲み何を衣と思ひ煩らふ勿れ、此れ皆異邦人の求むる者なり、爾曹の天の父は凡て此等のもの、必需ぬことを知りたまへり、なんぢら先づ神の國と其義とを求よ、さらば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし』というて、靈的事件を第一として正當の地位に之を置かねばならぬ次第を示したのである。之と同時に偉大なる觀念は人間は、見ゆるうつし世に超越せる神の王國に屬して居るてふことなのである。

人間はいかに神から離れて居て、傷ましき哀れな姿を現はす場合があつても、本來神の像に肖せて造られたるものなるが故に、神は人間を自己の創造せる最上の藝術品として傑作として自分のものたらんことを欲し給ふところから、高き靈の世界に住まふことを要求してやまぬのである。かくて人間は『朝に榮え、夕に衰ふる』底の小なる生涯に安んずるものに非ずして、永久に移り變らざる常世の生を憧憬してやまぬ偉大な運命を有して居るのである。古へ多くの預言者や、詩人や、哲學者などが夢の如く描いた件の眞理はイエスによりて、確然樹立せられたのである。

第十九講 眞理と自由 (約八〇卅二―卅六)

自由の必要 眞理と自由なる二つの名辭は、名辭中最も強大なるものにして、そして此の名辭ほど様々な解釋や、爭論などの惹き起さるゝものはない。古來此の名辭のために血を流したるもの、生命を抛ちたるもの、位置を捨てたるもの、家を失ひたるものも尠少しとせざる次第である。

當時ユダヤ人等はローマ帝國の支配下に立ちて、奴隸の境遇を忌み嫌ひ、獨立自由を要求すること宛ら大早に雲霓を望むが如き事情のあるにも拘はらず、彼等の負け惜み根性は自由でふ聲をきゝて政治上のそれと早合點した。可憐なる彼等はイエスの精神を理解することが出来なかつたのである。即ちイエスの與ふる自由は根本的、内部的、精神的のものであつて、そして最も高き、靈なるものであることに氣づかなかつたのである。

心の奴隸 心の奴隸は一切の奴隸の源である。イエスは屢々心靈界に於ける不信仰の罪につきて語つた。即ち神に關して、精神界の法則に關して、未來永遠の眞理に關して、行

爲に伴ふ賞罰に關して盲目なること、そしてかゝる不信は靈界の消息に盲目にして、唯だ感覺の世界のみに鋭敏なることを教へられたのである。そこで、我々は境遇や、淺薄な俗事や、頼にならぬ物質や、的にならぬ一時の現象などに制限されて居る肉に閉ぢ込められるのである。そして肉の人は自分では大なる自由を有して居ると思つて居るも靈の方面に於ては、至つて狹隘な生活を送つてゐるのである。

曾て詩人ブラウニングが『イタリーは余が大學なり』と叫んだ伊太利ネーブルスの灣中に、その美觀をもて世界に鳴つてゐる數々の島がある。測りがたき深さと清さを展舒する青空、之に似しき麗はしき海を背景とせる土地には銀色の橄欖と紫の葡萄とを以て豊に充ち溢れ、そして空氣は高き花の香にたゞよひ、宛ら寶玉を以て飾られたる王者の如き詩趣を湛へて居る自然は、實に歡喜の幻影を創造せしめずしてはやまぬものがある。從來美と愉快とを追及せるギリシヤ人及びローマ人等は此處に彼等の金殿玉樓を營んだ次第であるが、自然の美を憧れてやまない近代人も亦た蜜蜂が花を尋ぬるが如く、蜂赴してこゝに自然の美を樂んで居る。斯の如く我々を『チャーム』してやまぬ島々の中の一小島は伊太

利政府の管轄に屬してゐて、そして其島の住民は普通の人々に非ずして囚人等なのである。かくて天下無双の絶勝も彼等に取りては無意味の怪物に異ならぬのみならず、囚はれたる、辱しめられたる彼等には満目荒涼の觀を呈して心を傷ましむる資たらざるはないのである。罪に囚はれてゐて、甦生せざる人の榮えある天地と幸多き人生とに對する見解も之に類するところなしとせざるのである。

活ける法則 由來眞理は活ける法則で又生活の規矩である。そしてこゝに所謂眞理とは古への律法や、現代の學術を指すのではないことは申す迄もなき次第である。蓋し天父に關する奧義や、人間に關する秘義や、靈魂に關する意義などを含んで居るのである。そして此の眞理を把持するものは我生を高く、廣く、深くするの自由を得、人生を生甲斐あらしめ、又人生を靈化せしむる力がある。實にイエス自身は眞理其物を體現し、且つ生活した眞理である。『我は眞理なり』とはイエス自身の證言である。かるが故に本書の記者は『律法はモーセに由て傳り、恩寵と眞理とはイエスによりて來れり』と道破した次第なのである。此に於てイエスは『是故に子もし爾曹に自由を賜なばなんぢら誠に自由をうべし』と

宣うて政治上、境遇上、知識上よりも、より高きより深き、より切なる所謂心靈の『自由』は常住不斷神と偕に歩む者の上に存し、そして我々の魂が神の法則と調和、一致する場合に實現するものなることを垂示し給うた。

一體我々が智者と共にあらばいかん。智者は我々を智的に導かん。仁者と共にあらば如何ん、仁者は我々を仁の人となさん。義人と共に住まばいかん。義人は我々を義しき生活に向はしめん。パウロや、アウガスチンと共に住まばいかん。罪に就て深き意識を有する人たらしめん。然り而してイエスと共に座臥する時如何、我々をして眞に自由者たらしめずんばやまないのである。ペーコンの言へる『自然に従つて自然を征服する』とは眞理である。人類はイエスに従つてその眞理を實現しうるのである。

選擇は吾人の自由なり 我々の面前に二つの途が横はつてゐる。即ちサタンの囚はれか、神の子の自由か是である。我々は罪の奴となるか、然らざればイエスに於ける自由者たるかである。『傀儡師頸にかけたる人形箱、鬼を出さうと、佛を出さうと』。我々の自由なるも、しかも眞の自由はイエスの中に存するが故に、イエスを離れて自由を得んとするは、恰も

水を離れて生んとする魚に異ならざる次第なのである。

現代人の追求する自由 現代ほど眞理よ、自由よと叫ばるゝ時代はあるまい。殆んどジ

ヨン・ノックスや、バトリック・ヘンリーなどの叫を壓倒する概がある。而も其の自由は外部に属するものが多くして内部に属するものが少ない。そして滔々たる世人は誤られたる自由を獲んと欲して反つて不自由な境遇を招き、開放の生活を恣にせんとして反つて幽閉の不幸を來し罪の牢獄に座してゐる。『尊貴を忘る者眞の尊貴、自由ならざる人却て自由』とは逆説なるも眞理である。如何なる自由も眞理に根ざす所なきものは道に外れたる放埒である。眞理に基せぬ自由、快樂、名譽、悉く虚偽である。

第二十講 生來の替者 (約九〇一―廿五)

再び光たることを自啓す 我々は既にイエスが自ら『世の光』(八〇十二)たることを證

明し給うた次第を學んだ。今爰に記載されてゐる替の目の開かれた事蹟は恐らく本書第七章の初に載せてある節筵の最終の日に於ての出來事ならんと思はれる。こゝに再びイエスが『われ世に在るときは世の光なり』と曰ひ給うたのは尙ほ自己の使命を確信せしめんがためであらう。即ちイエスは自ら身の光たる目を開くことによりて、靈の眼を打開く能力を具ふる所以を示したる次第なるが、恰も此の奇蹟が安息日になされたるを以て頑迷なるユダヤ人等の激昂反感を招きたるもの、如く見ゆるのである。

千古の疑問 由來あらゆる思慮ある人々の心を悩ますところの問題は人生の實際に現は

る、苦痛問題にして、何故に不徳、不義の悪人榮え、反つて有徳の君子聖人に斷えざる苦痛ありや。何故にヨブの如き善人に苦痛ありしやとのことである。古代民族中比較的樂天的宇宙觀、人生觀を抱いてゐたギリシヤ人等でも、人間の苦痛問題には目を掩ふことが

出来なかつた。「地上は害悪に充ちて居る」とはヘシオドの人生觀を約言して居るのであるが、更にイユリビデスに至りては「一切の生命は、只だ煩はしき朦朧たるもの、そして安き事は決してこの地上には來らぬ。よしんば此世の生命よりも、もつと慕はしきものありとするも、其は遙に〜彼岸に存してゐる。暗黒の手は之を握り、そして雲霧は上にも下にも充ちてゐる。かるが故に我々は生涯悩んで居る。そして此の地上に於て名なくして輝けるものに依りかゝつてゐる。なせなれば世界の生活は封せられたる秘密であり且つ人間界の深みは閉ぢられてゐる密蔵であるからである。我々は極しもなく迷宮の中に浮沈して居る」と謂うて居て人生の深刻なる苦痛問題を提議してゐる。所謂「天道是か非か」この叫びは常に人格神の不明なりし東洋人のみに限られたる悲哀の調ではなかつたのである。

常にイエスと共に生活して居たところの弟子達に於ても斯る人生の事實に逢着するに當りては轉た惑ひなきを得なかつたのである。そこで途上生來の譬者を見た弟子達は、此のめしひは自己の罪に由りて不幸を招いたのでせうか、或は兩親の罪、云はゞ遺傳の法則によりて斯る不幸を招いたのでせうか、それとも自己の罪でもなく、又二親の罪でもなく、全く不慮の禍によりてかゝる不自由な状態に陥つたのでせうかとの問題に苦しみ、直にイエスから其解決を得ようとしたのである。

解決の光顯はる 『此人の罪にあらず又兩親の罪にも非ず、彼に由て神の作爲のあらはれたため也』このイエスの答は、此人の罪でもなく又其兩親の罪でもないが、此不幸なる者によりて神の靈能妙力の顯はれたためなりこのことを謂へるまでにて、勿論人生に個人若くは遺傳の罪のために苦しんで居る者の存しないといふことを暗示して居る次第ではないのである。

イエスは此に誰でも好奇心若くは冷酷性に囚はれて人間の不幸の原因などを聴きたがる悪弊に向つて痛棒を加へて居る。人の不幸の原因は措き、我々は不幸なる者に對してむしろ過去の事よりも、將來の事、論ずることよりも手を下すことに努めねばならぬのである。苦痛が何處から來たにもせよ、又之に就て疑團があるにもせよ、苦痛者に對する瞬間に於て我々は人性の最良なる諸機能を呼び醒さねばならぬ。即ち同情、禮讓、柔和、慈悲、

赦免、忍耐、寛容など、人性中最も神性に近い諸要素の活動を促がし、之を責めんがために苦痛の原因を窮むるが如き卑劣な精神を捨て、之を救はんがために有効な結果を齎すべき努力をなさねばならぬのである。苦痛の原因は措き、苦痛の現はるゝや、神の御業のために好機會を發見することは我々の爲すべき要務である。恒久に或物を爲しつゝある神は此の世界を完全に向はしむべく攝理し給ふが故に、一切人類の不幸や、艱難や、苦痛などは除去さるべき筈のものである。左れば天の父なる神を信じ、且つ其父と偕に働くところの我々は先づ神の御業を賛同し、そして神と共に努力する覺悟を有ねばならぬ次第なのである。

イエスの努力 『晝の間は、我かならず我を遣はし、者の行をなすべき也』とある此の晝は、イエスの此世にあるの時を指して居る。而も世にある時は時々刻々減少して行く計りなるも、其聖なる使命は短き時間に爲されたのである。實にイエスの此世に於ける事業の期は短少であつたが、すること、なすこと、悉く天父の御心に適へるイエスの生涯は、今尙靈によりて永遠に連續されつゝある。即ち其時は短かりしも事業は永遠に榮え、事業

は遅々たりしも報償は偉大であつたのである。

雄辯にまさる事實 現代人は事實に渴してゐる。即ち事實、實驗、實感、充實を求めて居る。我々の信仰も亦た事實に基ける實驗を貴んでゐる。宗教的實驗はたしかに科學的實驗に譲らぬ根底を有してゐる。即ち我々の信仰の根底となるべきものも亦實驗でなければならぬのである。そこで此處に目明になつた青年はユダヤ人に答へて『罪人なるや否や我之を知す我は賢者なりしが今目明になれる此一事をしる』と謂た一言は事實に根底を有する實證の叫である。實に辯證學である。曾て一懷疑者が『神は何處にも在さぬ』と言ひ張つて居た時、一少年は『神は今此に在す』と證言して彼を信仰に導いたといふ事である。即ち『No where』に非ずして『Now here』の神である。我々も亦イエスによりて改造せられた、神は今も尙此に在すとの實證を示すべきである。

第廿一講 豊かなる生とは何ぞ (約十〇一―廿一)

真と偽と 本章は前章の末節に載せてあるイエスのパリサイ人に對する垂示に接続してゐる。此譬喩は、先づパリサイ人を説伏し、次に替者を慰藉し、次にイエスの門弟を訓誡してゐる。即ち偽りの牧者(パリサイ人)によりてユダヤ教の檻から逐出されたところの替者は、イエスの教會なる眞の牧者の群中に隱所を見出したのである。そして此の譬喩は全く舊約書のそれに基づいてゐる。(詩第二十三篇。結第三十四章。耶第廿三章〇一―四。亞第十一〇四―十七參考)

此の譬喩に於てイエスは只だ自分の爲にのみ服従を求めてゐる他教の教師と全く無慾の愛と犠牲の生涯とを以て他人のために捧げて居るところのイエス自身との優劣を描寫してゐる。即ち自分の目的のために他人を使役する者は牧者にあらずして竊賊であり、他人の存在のために自己を靖献するものは眞の牧者であるのである。

一は奪ひ、一は與ふ 『竊賊の來るはぬすまんとし、殺さんとし、滅さんとするの他なし、

我來るは羊をして生を得、かつ豊ならしめんためなり』とは現世と救主との間に打消し難き差別を劃してゐる。現世は曰く『我に與へよ』と。救主は曰く『我れ汝に與へん』と。即ち現世は利己的にして、そして救主は他愛的である。此の世の王は與ふるより受くるは幸ひなりといひ、イエスは受くるより與ふるは幸ひなりといつた。此に於てイエスは其生涯を贖のために献げたのである。

簡潔にして偉大なる言葉 聖書の研究といひ、教會の禮拜といひ、祈り會といひ、密室の瞑想といひ、福音の傳播といひ、慈善の行爲といひ、一言にして其目的を指すことが出来る。即ち我々信徒の努力するところの一切の目的は『生』を得んがため、若くは之を與へんがために他ならぬ次第なのである。イエスの教訓中、パリサイ人に向つて『審判の爲に來れり』といひ、又ピラトに向つて『眞理について證をなさんためなり』といはれたるは奥義を秘める言葉なるが、而も『生をえしめん爲なり』と曰ひ給うた言葉は、イエス出現の全目的を充分に明白に表白するものはないのである。

普通『生』を分けて、形體の生命、知識の生命、道德の生命、宗教の生命若くは靈の生

命としてゐる。そして知識の生命は形體の生命に優れ、道德の生命は知識の生命に優れ、靈の生命は道德の生命に優れるものなるは謂ふまでもなきことながら、件の生命は悉くイエスの力によりて一層發達を促進せしめらるゝのである。即ちイエスの靈妙なる力が完き働きをなすとき、信仰は愛と共に、力は同情と共に、勇氣は忍耐と共に歩調を揃へて高貴なる品性を建設するに至るのである。實に『完き人』はイエスの生命なる大理想の向上的、鼓吹的感化の下に來るもの、享有する特權なのである。

靈的生活てふ問題は近代人の思を凝すところの者にしてオイケンを初め、幾多の思想家をして感興を起さしむるものである。遮莫、人の中に神の生活を偲ばしめ、現世の間に靈の實現を認めしむる生こそ我々のあこがれて止まぬところのものである。

生は神と共に居ることなり

『生を與へん爲に來れり』との御言葉中には、先づ生は神と共に居ることの旨を暗示する。イエスの中にありて、イエスと交通し、そして我々の全活動を助くるところの生は神と共に居る活ける生である。此の生は朦朧たる未來の生に非ずして、充分我々の知識を以て知ることの能るところの『永生』に他ならぬ。即ち『永生

とは唯だ獨りの眞神なる爾と其遺はし、イエス・キリストをしる是なり』(約十七〇三)とあるのである。件の知識は所謂知識なるものとは趣を異にして、單に或る事、或る物を解決して、それで其働きがなくなつて仕舞ふやうなものではなく一旦之を握れば、次第に生長發達して無限に向上するものなのである。イエスの出現は現世と神國との二大王國を結合する機會となつたのである。完き生は境遇との全き調和から得らるゝものである。即ち一方人の靈の境遇は神から受くる恩化に存し、他方周圍から受くるところは這般の狀態によりて成立するのである。そこで人靈發達の上に於て無てならぬ境遇は、イエスと共に生活することなのである。

生は人類に奉仕することなり

抑も人生の最も高き義務は何であらうかと云ふに、自己の所得の豊かなること非ずして、反つて獲たるところの物を以て、自己の能ふ限り充分に奉仕し、靖献することである。是の如き義務を爲さしめんがために、イエスは人類を教育し給ふのみならず、人類を罪惡より、清淨へと轉化せしめ給うた。又イエスの教へた光によりて『生』の樂みは何であらうかといふことを學ぶに、いかに多くの事物を獲得せん

かに非ずして、如何にして人類社會に貢献せんかの精神に存してゐることは明かなことである。イエスの受肉せる秘義は、イエスが單なる人生を取つたと云ふことに非ずして、實に『ヒュマニター』の爲に取つたと云ふことである。

自己實現の生なり 宇宙、人生の攝理者なる神は見えざる御手を以て人と人と隣と隣とを聯結してゐる。恰も梭を以て縦横に絲を織り込むやうなものである。梭を投じて横絲を失ふのは、やがて織物の完を期するのである。世界のこと、國家のこと、社會のこと、個人のこと、悉く神の意志の大秘義中に顯れたり、隠れたり、更に顯れたりする壯觀は眼あるものには看取せらるゝ。即ち神を愛する生、隣人を愛する生、善物を以て人類に貢献する生は即ちやがて自己實現の生となる。此の生こそ、實に偉大なる善の生であるのである。

第廿二講 我は善き牧者なり (約十〇一—廿一)

パレスチナ地方の牧者 普通牧者の生涯は、西洋の詩人や、藝術家によりて或は詩に或は繪畫に、歌はれ、描かれてゐて我々の熟知して居る所である。しかるに前世紀の始め頃まで、西洋の詩歌、繪畫に歌はれたり、描寫されたりした所の牧者の生涯は、極めて自然な、單純な、愉快な、平和な生活の理想として描寫されて居たのである。しかし乍ら我々はパレスチナ地方に於ける牧者の生涯は中々左様に氣樂な、單純なものでないことに注意せねばならぬ。即ち牧者の境遇には幾多の困難と危険と苦辛とが伴うて居ることを想はねばならぬのである。パレスチナの或る地方にては、時として羊が激しき暴雨のために山から押し流さるゝこともあり、時としては山賊に奪はるゝこともあり、時としては猛れる狼の一隊に襲はるゝこともあり、又時としては牧者自身の生命も危機に瀕するやうなことも起つて来る。我々はダビデが少年の頃父の群羊を救はんがために、自分の手を以て獅子や、熊を斥けた物語を想像するならいかに牧者の生涯が容易なものでないことが理解せられる。

加之ならず、牧者は羊を看守るに當りて必要な場合には寒き冬の夜も、永き夏の日も忍びて意を注がねばならぬことがある。斯様にして我々は寂しきシリヤの野に於ける牧者と、○從順なる羊との間に自然に愛の精神が湧き出でたといふことを思惟するも不自然ではないのである。

比擬さるゝ要點 かくて日毎々、牧者の羊に對する義務は、常に羊を集めたり、羊を養つたり、又看守つたりすること計りてなく、最もよく彼等を導き、彼等を識り、彼等の危き場合を救ふことなのである。時として備れた牧者もあるが、彼等の多くは危機に逢うては逃げ隠るゝ如き卑怯な、不親切な態度を現はして、牧者に取って最も大切な敢爲の精神を缺いてゐる。そこでイエスを善き牧者の譬喩に取るに至りたる次第は、イエスが其徒を導き、其徒を識り、そして其徒の危機に際會する折にも逃げ隠るゝが如きとのない三點である、此等の三點はたしかに善き牧者とイエスとの間に深き關係を有して居るのである。就中危機に際しても逃げないといふ大切な牧者の資格は最もよくイエスの生涯に於て實現されたのである。イエスは所謂備れた牧者ではなく、眞に自覺を以て、自ら其命を差出して羊を愛せる、義侠な牧者であつたのである。

善き牧者たる理由 備はれた牧者でも忠實に義務を果し、従つて相應な報酬を受くる場合も少なくはないが、しかもイエスが自ら要求し給ふ所謂善き牧者の意義は至要なる點に於て或る相違がある。イエスの自ら要求し給ふ『善き』の意義は仁慈といふ意に止まらない。『純』な意義を含んで居る。之を例せば、心から國家に捧げんと欲する兵士と單に報酬のために働いて居る兵士との差の如き者である。パウロはイエスの善き戰士たる言葉も使用して居るが、たしかに純なる心は純なる兵士を造り、純なる心は又純なる牧者を造るのである。然らば善き牧者の至要部分なる『純』の意義は何であらうか。イエス曰ひ給はく、『善き牧者は羊の爲に命を捐つ』と。是れ即ち善き牧者、純なる心を具へた牧者の態度である。善き牧者は羊のために避所と幸福とを求め、そしていかなる犠牲をも、否自身の生命をも捐て顧みないものである。

曾てアメリカ合衆國北西地方の酷だ寂しき場所に於て一人の牧者が羊の大群を率ゐて居た。此のハンス・ニールソンなる牧者は一年中必要な物品丈は供給されて居たもの、頗る

小さな倭舎に住んで居て、其の附近には一軒の隣家も無く只だ一匹の番犬のみを伴侶として居た。ハンスが此處に二こそを過した翌年の冬は實に、厳しい寒さの冬であつた。ところが羊の檻が甚だ不十分なものであつたから、其翌春早々一部の改築に着手した。しかし此仕事はハンス一人に取りて困難な工事ではあつたが、辛ふじて成功した。件の工事中三晝夜も風と雪とが降り荒んだのである。やがて暴風雪が止で後ハンスを氣遣へる雇主は人々を遣はした。使者達は凍死せるハンスの屍骸が、彼が唯一の伴侶たりし番犬に守られつゝ羊小屋の傍に横はつて居るのに驚いた。使者達は直にハンスが大暴風雪のために、破損せる古い羊の檻を修復せる際、極度の寒氣に負けて倒れたものだといふことを認めめた。ハンスにしても羊の生命をいたはる心根がなかつたなら、其生命を全ふせしならんに、しかもハンスは勇ましく羊のために生命を捐てたのであるが、其侠心や實に美はしく、其態度や實に慕はしきものである。

犠牲と贖との法則を暗示する言葉 『善き牧者は羊のために命を捐つ』との御心はたしかに件の意義を含んでゐる。即ち此にイエスの自覺的、自任的犠牲と贖罪の秘義を含んで

居る。實にイエスの死によりて飾られたる其愛は犠牲の法則を表彰してゐる。イエスの善は彼より輝き出でゐる。其死に於て頂に達したのである。しかも其死は孤立的のものに非ずして、彼が一生即ち贖罪史全體を貫ける事實である。我々は其死に於て完き自己實現の愛を認むるのである。そして其死に於て生命は他の生命の犠牲によりて救はるゝことを學ぶものである。イエスは單に自己の教へた真理の實證の爲に殉教者として死んだのであると云ふ者もあるが、而も『我は羊のために命を捐つ』と云へるイエス自身の言葉に注意せねばならぬ。受くることよりも、與ふことは幸である。もし牧者にして自ら捐つる所徴つせば、恐らく羊は捨てられたるものとなり了るのみである。

第廿三講 我は復生なり、生命なり (約十一〇一—二六)

ベタニヤの一族 ベタニヤは名高き橄欖山の東方の中腹、エルサレムよりエリコに至る途の左側約二哩を距つる處に位し、此地甚だ寂寥にして貧しき癩病患者など多く此處に身を隠すを以て『悲哀の家』の意義を含むと云ふ。マルタ、マリアの郷里として又イエスが彼等の兄弟ラザロを蘇らせし地として著名である。現今はイエスの奇蹟よりエル・アザリエ即ち『ラザロの地』と呼ばれてゐる。そしてラザロとは『神は我が助けなり』てふ意義を含み、恐らく癩病患者、シモンの息子か若くは近親者であつて社交上相當な位置に居たとも傳へられてゐる。本書の記者はマリア、マルタは、路加傳(十〇三八)に記載されてゐることによりて世に知られて居たと認めてゐる。そこで此の家族の事情や、二姉妹達の性格などは路加傳及び本傳に於て全く符合して居るやうである。又本書の記者は既に其觀福音書(太二六〇六、可一四〇三參照)中に於ける香膏を注ぎたる事實をも承認してゐる。しかし乍ら其物語が何となく不明了で、かつ混雜してゐるところから、後章即ち本書十

二章一節以下に於て、より多く精密なる記事を掲げて居るのである。
人生半途にして倒るゝの悲劇 マルタの憂愁、悲哀はラザロが人生の半途に於て、未だ其の爲すべき事業を成し遂ぐるに至らず、忽ち長逝して仕舞つたといふ事によりて強くせられた。此に於て死に關聯して起り來る這般の問題の中、マルタを最も困惑せしめた所のものは、件の問題であつたのである。何故に彼は爲すべき使命を與へられながら、之を完成するに至らずして、世を去りしか。又實にラザロなくして生くることはマルタに取りては寂寥の極であつた。同時にマルタに起つて來た考は、何故にイエスの不在の際、かゝる悲劇は行はれたるか『主よ此に在し、ならば我兄弟は死ざりしものを、さりながら假令今にても爾が神に求むる所のものは神なんぢに賜ふと知る』と言へる半信半疑の言葉を以て、尙ほ一縷の希望を表白してゐる。此に於て、幾世幾代を通じて反響して居る所の絶大の聲が叫ばれた。其の絶大の叫び聲は、眞に神秘な、幽玄な、奥妙なものであつたのである。やがて其聲は望を失へる者に對しては希望となり、力を失へる者に對しては勢力となり、暗黒に彷徨する者に取りては光明となり、悲哀に陥つてゐる者に取りては慰藉となつた

のである。

活ける生命に近づけとの御聲 「我は復生なり、生命なり」と自ら啓示しつゝ、兎角生命を未來の彼岸に、幽玄な世界の彼岸に求めてゐたマルタに對して、乃ち「彼が末日の甦るべき時に甦らん事を知るなり」と教理的に、甦を信じてゐた彼に對して、其奥義を自分に融合調和し、そして自己を活ける力となしたのである。即ちマルタが之を未來の大なる出來事と信じて居た所の信仰に向つて自分の人格を表現したのである。之を換言するならば、イエスはマルタに向つて「汝の信仰は適當なる位置に面して居らぬ。汝は活ける人格に頼るとなく、却つて教義的眞理に依つて居る。汝は遙か彼世の出來事につきて考へてゐる。汝は今此に儼存する我につきて思惟せねばならぬ。我は復生で、生命である。我は汝の思ふ如く末日に甦る所のものではない、而も我が中に復生が在る、復生は我を離れてあるものではない」と謂はれた次第なのである。イエスはマルタの眼孔をして死てふ瞬間の一事實から、他の偉大なる實在即ちイエス自身の人格、永遠の生命、勢力、愛の事實の方へと轉向せしめ給うたのである。かくて死か、死よりも一大事實なる人格かの問題が彼の前に置

かれた。彼は件の兩者の中、孰れかを擇ばねばならぬ場合に迫まつて來た。彼にして後者を擇び取るなら一切解決の鍵を握んだ譯となるのである。我々に於ても此秘義を悟らねばならぬのである。

由來教理上の信仰とイエス自身に委ぬる信仰との上に大なる相違がある。我々は教理を信ずるも、之に信賴することは出來ない。我々は抽象的な教理を信じて活ける人格を忘れ

てはならぬのである。
死に囚はれざる生命 舊約詩篇の中にも『死』に關しての觀念は鮮に描かれてゐる。元より詩篇の聖者の多數はイエスが復生であり、生命である所以を知らず、且つ墳墓は最も憂鬱な場所であると思像されたのであるが、而も詩篇十六篇の如き詩を通じて觀察するに、詩篇の記者は、死なる觀念に反對し又人間が神から離れることのない信念を示して居る。

『そは汝わがたましひを陰府にすておきたまはず、なんぢの聖者を墓のなかに朽らしめたまはざるべければなり。なんぢ生命の道をわれに示したまはん。なんぢの前には充足

れる喜びあり。なんちの右にはもろくの快樂とこしへにあり』(詩十六篇)

此に聖者は神と共にありて、死にも打破られざる堅き一致の存することを感じて居る。イエスは實に『我は復生なり、生命なり』と教へ、且つたとひ死の襲ひ來ることあるも、我を信するものに死なく而も生きて我と共に存在し、永遠に朽ちざる生命を享有すべきことを説いてゐる、畢竟我々が死と呼ぶところのものは單に人間の制限せられてゐる外部の運命に外ならぬ次第であつて、かの神と共にある所の眞生命即ち其中にイエスの宿り居る生命は、全く此の世の死から離れて獨立して居るものである。

死は自由に入るの門 死はイエスよりラザロを奪ひ去ることは出來ぬ。死は其姉妹よりラザロを分つことは出來ぬ。むしろ死は以前にあつたよりも、より強き、より尊き、より高き、より淨き愛の結付となる。イエスは之を一層完き、聖き、自由な生涯に到達するところの唯一の門と見たのである。

第廿四講 イエスの涙 (約十一〇廿八―卅五)

イエスのヒュマニテイ 曾て女流文豪デヨーヂ・エリオット曰く『人間に取りてより多く援助となるものは、總の智慧よりも、其人を見捨てぬ所の單純なる憐愍から起つて來る一滴の涙である』と。實に人の衷情より迸り出づる眞の涙は尊きものである。殊に人類の弱き所に深甚な經驗と同情とを有するイエスの涙は何物にも換へ難い寶である。本文に現はれて居るイエスの同情ある涙と人情に冷淡なるストイック風とを比較して觀るなら自然其間に著しき差がある。我々が救主イエスの眞の人性を窮むることは容易ならぬ業である。とはいへ、しかし乍らイエスの人生には男子の剛直と婦人の柔和とが結び合はされて居る。イエスの生涯の全記録は此の事實を證明してゐる。イエスは血と肉とを有して兒童等の生れるやうに生れ、又兒童等が養育されるやうに養育せられ、そして智慧も齡も彌増つたのである。即ちイエスは饑うる時食し、渴する時飲み、疲るゝ時いこひ、剩さへ釘られて死に就いたのである。而も單に我々人間の官能や、傾向や、特質などで救主の人間性を評價

論定することは頗る困難な業である。我々はイエスの人性は、罪そのものを除く外、一切我々の様であつたと信ずるものであるが、而もイエスの氣高き本體から流露して來る所の或ものに接し、且つ之を仰ぎ見るとき、餘りに尊く、餘りに聖く、恍惚として何を感じること、想像することも出来ない心地がする。

イエスの涙の性質 曾て橄欖山に於て流せるイエスの涙は不信なるユダヤ人に對する大警告の涙であつた（太廿一—廿三參照）。又ゲツセマネの園に於て流せる其の涙は人類の罪を負うて天父に對する偉大なる責任を遂行せんとする苦痛の涙であつた（太廿六參照）。今爰に流せる其の涙、乃ちラザロの墓邊に於て流せるそれは、愛する友に對する同情同感の涙である。イエスはラザロの墓地に近づくや、兄弟を失ひしことに由りて大なる悲哀を懷きし二人の姉妹を見て、坐るに女性的同情の念を禁ずることが出来なかつたのである。そしてこゝにいふ所の『泣く』てふ原語は『咽ぶ』ことを示すに非ずして、落ち着いた、靜かな衷情を表白する涙の意義なのである。

邊幅を飾らざる涙

イエスの悲みは哀しむ者に對する慰藉のためなると同時に天真の流

露であつたのである。かるが故に人々から稱賛を博するやうな愛の表白や、悲の表白や、虚偽な同情の表白などは、柔和にして謙れる心を有せるイエスに取りては、全く無意義な事柄であつたのである。

愧づる所なき涙

イエスは泣いて涙を流せるも自分の人性の方面の弱きことについて毫も

愧づる所がなかつたのである。元よりイエス自身に於て涙を抑制しようといふ考があれは、習慣上多くの人々の爲す如く、斯くなし得たであらうけれ共彼は之を抑制しなかつた。何故ならば此の場合に於て悲を抑ふことは自然の行爲でなかつたからである。眞の人間性の發揮は自然に觸るゝところに存するが故に、イエスの周圍に在りし者の悲を觀て共に悲しみ、共に泣き給うた自然性は即ち眞の人間性に觸れて居るのである。イエスの性格に於ては毫も恬淡な『ストイック』風のものはない。元より其同情を殺して殘忍な、非人間的な、冷淡な氣風を養はんとはしなかつた。かるが故にイエスは我々普通人の感性を有することを愧ぢとせず、そして又公然泣くものと共に泣くことを柔弱とも思はなかつたのである。

由來苦痛の場合に際して無感覺の狀態に處することが必ずしも勇氣豪膽とは謂はれない。現想的人物の情感は其の智性が高尚で、そして其の意志が堅固であるに準じて敏活で、熱誠で、潑刺である。そして古代ヘブライ民族の家長等は總て柔和なる感情の人物として描寫されてゐるやうである。即ちアブラハムは泣き、ヤコブは聲を揚げてなき、ヨセフは父の顔に寄りすがりて泣いたと載せられて居る。泣く者弱きに非ず、又泣かざる者強きに非ず、要するに愛の涙は天真の流露、同情の發現と見るべきである。

將來を仰がしむる涙 イエスの涙は我々の前途に光明を注ぐところの源である。イエスがマルタ及マリヤと共に泣いた時、イエスの涙は何物か之れより齎すべきものあるを暗示する。將來の事實は此の涙から現はれて來たのである。我々が苦しむ刹那も神は我々から離れて居らない。我々の悲哀は神の攝理の中に含まれて居る事實の一である。神は此の世の父が其子を憐れむが如く、助けなき者に向つて永遠の憐愍を以て我々を顧み給ふのである。實に神は此處にも彼處にも苦しんで居給ふ。神は我々の爲に苦しんで居るのみならず我々と共に苦しんで居給ふのである。即ち我々の悲みは實際神の悲みとなる場合がある。

斯て我々が失なつたと思ふ事は、神御自身に於ても之を失なつたと思召さるゝ次第なのである。

我々がイエスの涙、イエスの苦を單に過去史上の事實として看過するならば、大なる誤謬と謂はねばならぬのである。イエスは今に至るまで我々の苦痛を負ふのみならず、我々の苦痛を以て御自身の苦痛となし給ふ。即ち我々が彼を呼ぶ時我々の悲を分有し給ふのである。神は我々に近く居給うて我々を支へ給ふ。否、我々が苦しむ其中心に座を占めて我々を援け給ふ。神は我々と共に苦しみ又總ての苦痛を負ひ給ふ。かるが故に我れ祈る時、神の力は我が力となり、神の愛は我を救ふ恵となり、そして新しき生命と光明とは我衷に湧き起りて我を更むる。此に於て我々は悲より喜へ、暗より光へ、涙より笑へと一轉するのである。

第廿五講 イエスに見えんことを欲ふ (約十二〇廿一廿六)

本傳の分水嶺 十二章は靈的生命を流出する本傳に於ての分水嶺である。今や世界に向つてのイエスの自現がすんで、之れから其結果に就ての物語である。そこで本章一節から十一節に於て永遠に亘る紀念的愛の表現を描き出し、十二節から十九節に於て一般の人心がイエスに對して深き印象を受けたることを示し、二十節から二十六節に於てイエスに見えんことを欲うたギリシヤ人の來りしことによりて、其感化力のユダヤ國境以外にまで及んだことを教へてゐる。

モーセよりイエスに進む イエスに見えんことを欲うて此に現はれてゐるギリシヤ人は恐らくギリシヤ生れでユダヤ教に改宗せしものであつて、逾越の節に際し、特に禮拜のため地方から上つて居た者であらう。件のギリシヤ人は既にモーセ教の信者であつたが、偶ま神の京城に詣で、ソロモンよりも大なる、モーセよりも大なるイエスの評判をきき、我々の心性に宿つてゐる本來の向上心がこゝに端なく發動し、救を異教徒のみに限つて我

我に賜へといふ祈願から救主に近いたのである。由來人間の心は外觀の美はしき神の宮や、之に關する様々な儀式や、其他の形式的宗教などで満足の出来るものでない。件のギリシヤ人がモーセ教に満足を得ずして、進んでイエスの教に永遠の生命を發見せんとしたのは人性自然の傾向と謂ふべきである。そして又ユダヤ人の或者は殊更に目を閉ぢ、耳を掩ひ、口を緘み心を頑にしてイエスに接せざらんことを欲して居た際、即ちパリサイ主義の黨や、サドカイ主義の輩などが、無知と冷淡と輕薄と臆病とに囚はれてゐた折柄「君よわれらイエスに見えんことを欲ふ」と叫んだ聲は、いかにも美はしき音樂の調べの如き心地がするのである。

莊嚴なるイエスの宣言 ギリシヤ人の要求に對するイエスの應待はいかにも天晴れである。即ち「誠に實に爾曹に告ん一粒の麥もし地に落ちて死すば唯一にて存ん、もし死ば多の實をむすべし」との聖句を翻譯し、解釋せんに、我が生涯は短かく且つ成功も伴はず、我が教を信するもの少數にして、反つて不信の者、疑惑を懷く者、冷淡無頓着な者が多數を占めて我を死に賣し、一見全く彼等が勝利を獲得した様に観える。いかにも我が死は、

不信仰者の眼には失敗と滅亡と悲劇とに見ゆるとも、而も我が死は光榮の始めである。勝利の始めである。實に事業の出発点である。即ち我が眼前に現はれてゐる十字架の死は、是れより汎く人類一般より、贖主として、救主として、光明として、生命として仰がるべき尊き啓示である。なんぢらに我が十字架の死なくば、否、我れ地に落つる麥とならずば、多くの實を結ぶことはできない。即ち人類を救ふ力とはならぬのである。實に我が十字架は永遠に亘りて宇宙を経綸し給ふ其經綸の實現なのである。苟も此の危機に際して我を引き止めて地上に生存せしめんとするが如き野心あらんか、其は大なる錯誤、罪惡なのである。我が最高啓示なる十字架の死は千秋萬古、人類をして風の晨も、月の夕も唯々として景仰、崇敬せしめねばならぬのである。

享樂か、犠牲か 更に我々は何故にイエスが件のギリシヤ人に對して懇々、切々其死につきて、乃ち『その生命を惜むものは之を喪ひ、其生命を惜ざる者は之を存ちて限り無き生に至るべし』との旨を鼓吹し、高調し給ひしかの理を會得せねばならぬのである。一體ギリシヤ人の思想及び其文明に現はれてゐる傾向を觀察するに、自己教養、自己享樂、自

己満足が其主なる思想及び傾向であるやうに見える。かゝる思想と傾向とを有せし彼等の人文、藝術、教育、政治、法律、經濟、社會の制度等は如何に成行きしや。果ては失敗の歴史に終つたのである。『自己』を中心として出發した『人本主義』文明の傾向は、動もすれば自己の生活を快樂のみに使用し且つ現在の要求のみに満足を與へんと欲する念に厚く、高き者に捧ぐる精神の缺陷から、遂に破産を來す恐れがある。生命を惜む者は之を失ふ理を達觀せるイエスは自己教養の代りに自己謙讓を教へ、自己享樂の代りに自己放棄を教へ、そして自己満足の代りに自己犠牲を教へて所謂『其の生命を惜まざるものは之を存ちて限り無き生に至るべし』との道を示してゐる。かくてイエスは眼を外に向けて、外觀の美に憚れ易きギリシヤ人に向つて内省を促すと同時に、自己享樂が決して『自己』を永遠に保存する所以の秘義にあらず、却つて自己犠牲が『自己』を全うする真理たるを垂示し、常に犠牲が神の御旨を成就する彼に取りてのみ必要なるのみならず、一般の人類も亦此の道に據りて生命を全うすべき千古一貫の真理を道破して居る。

イエスの死は人類の救の必要條件なり イエスが地上に生活せし折には、神の靈は特別

なる意義に於て、彼と俱に存してゐたのである。そしてイエスは其門弟達に自分が彼等と離れなければならぬこと及び靈は一層彼等の上に注がるゝことなどを語つた。『わが名に託て父の遣さんとする訓慰師すなはち聖靈はすべての理を爾曹に教へ、又わが凡て爾曹に言しことを憶ひ起さしむべし』とは其約束である。イエスが此世を去つたのは、肉の現存よりも靈の現存が我々に一層親しくかつ接近しやすからである。即ち神の活ける一殿堂が毀されて取除かるゝや、何の信者も悉く聖なる者即ちイエスの靈に與かり得るからである。かくて其死は眞の思想と淨き感情と高貴な行爲と至と尊き惠の靈との源泉となつてゐる。

第廿六講 新しき誠め (約十三〇一―卅四)

記念すべき夕 本章の初に載せてある晩餐はエルサレムに於ての木曜日の夕に行はれたるイエスの最後の晩餐であることは一般に承認されてゐるところである。(太廿六〇廿、可十四〇十七、路廿二〇十四)そして共觀福音書には現れずして、本書のみに現はれをる特別なる點は、イエスが弟子の足を濯うた事や、其愛する弟子等に向つての濃かなる物語などである。

却説此の夕晩餐の後、新しき誠の垂示された時はイスカリオテのユダは胸に暗い陰を懷き乍ら自分の奸惡なる目的のために不在の場合であつた。又此の夕は千古に亘る壯嚴なる聖晩餐式の設けられたると同時に、尤も注意すべき悲劇の演せられた夕であつた。又此の夕は實際上、理想上共に學ぶべき洗足の教訓を遺し給うた著しき夕であつた。即ち喜劇、悲劇の並行はれた著しき夕であつたのである。

注意すべき二大文字 件の夕は實に危機に迫れる折柄であつたがいかに時間も餘裕少

なく、語るべき事柄の多き場合であつた。此に於てイエスは何事より語り初むべき乎。何は儲措き、遺し置べき一大教訓があつたのである。即ち「われ新しき誠をなんぢらに予ふ即ちなんぢら相愛すべしとの事是なり。我なんぢらを愛する如くなんぢらも相愛すべし」と。此に所謂「相愛すべし」てふ言葉は深く學ぶべきことである。今やイエスは自分の愛する十一人の門弟等と共に在るのみである。何故となれば反逆者ユダは既に此處を去つてゐた後の事であるからである。件の十一人の門弟等は既往に於て舊き教訓たる「汝の如く己の隣を愛すべし」との事を熟知してゐたのである。イエスは彼等に向つて隣人てふ言葉の中に仇人も、己を迫むる者も、サマリヤ人も悉く含めて博愛の精神を教へて居たのである。しかし乍らイエスは弟子等に別るゝ前に於て、舊き誠よりも、より大なる、より新しき、より尊き誠を垂示する必要を認めたのである。即ち「相愛すべし」と。元より敵をも愛する精神は大切なるものなれ共、而も之に新しき誠を加へて以て、彌が上にも彼等を全たからしめんとし給うたのである。そこでペテロは眞にヨハネを愛し、ヨハネは眞にアンデレを愛し、アンデレは眞にヤコブを愛し、ヤコブは眞にユダ(イスカリオテならざる)

を愛さなければならなかつたのである。
新しき名目は新しき意義を含む 『兄弟の愛』は又『フヒラ(愛)アデルフヒヤ(兄弟)』とも呼稱せられる。そして件の言葉につきての使用は弟子達が嘗に之を新しき誠として承認せるのみならず、又舊き誠の愛とは性質の異なつたものたることを示して居る。使徒ペテロが其の後の書の第一章に於て基督敎信徒の道徳を巧妙に描き出してゐる。即ち「敬虔に兄弟の睦を加へ、兄弟の睦に愛を加ふべし」とあるが如く、此に舊き愛の上に、新しき睦が加へられてゐるのである。

イエスの模範 『我なんぢらを愛する如く』とは、イエスが弟子等の足を濯ひしを指して居るやうに見える。此に我々はイエスの謙れる、驚くべき愛の行爲を認める。イエスは之によりて眞の兄弟の愛の實行を示してゐる。即ちイエスは爾曹の主たる自分が爾曹に向つて兄弟の如く事ふるからには、爾曹も亦相互に兄弟の如くしなければならぬと教へ給うたのである。之を換言すれば、我が爾曹に事へし如く、なんぢら相互に事ふべしとの意義なのである。洗足の行爲は件の誠を實際に解釋してゐる。此に我々は新しい誠を學ばな

ければならぬ。

基督教初代の頃から一般に『相愛』の教の酷だ大切なることを認めてゐた。ジエロームは、件の事實を美はしく傳へて、使徒ヨハネの逸事を斯う言うて居る。ヨハネの晩年に於て、ヨハネが他人に助けられて教會に出席し、老の身として長い時間語ることが出来なかつたため、單に會衆に對して『小子等よ、互に相愛せよ』との誠を繰回してゐた。かるが故にクリスチャンは常に此の教につきて熱心であつた。數々繰回さるゝを厭うたヨハネの弟子等が、何故斯く繰回すやとときしに、ヨハネは『其は主の誠である、そして只だ之を完うするを得ば、それで澤山である』と答へた(約壹書二〇一、十二、二八、三〇七、十八。四〇四、五〇廿一参照)。テルチユリアンは自分の『辯證學』の中に信徒相互の愛が異邦人の間にも深き印象の興へられたることを記載してゐる。ジョン・ウエスレーは『諸天の天は愛であるてふことにつきて全く感銘するを得ば、宗教に於て之に超りて高きものはない。若し此の愛の外に向つて何かを尋ぬるなら目的の輪廓外を彷徨ふものとなつて、天國に達する途を踏みそこなふ』と謂つた。

如是く愛は律法を完うする鍵となる。利未記(十九〇十八)に『汝仇をかへすべからず汝の民の子孫にむかひて怨を懐くべからず、己の如く汝の隣を愛すべし、我はエホバなり』と記載されてゐる律法の精神をイエスは一段高き見地より再び宣言し給うて、兄弟の愛こそ至要なる律法の精神であることを教へ給うた。即ち總ての人類に對してイエスの愛てふ新しき動機に根ざして事ふべきことを教へて居るのである。そしてイエスの死を記憶すべく設けられた聖晚餐式はイエスを信する者の大なる愛と淨き結合と寛き融和との繫である。我々はイエスと自分を繋ぎ、又自分と他人とを繋ぐ所の聖晚餐式を、もつと嚴かに且つ靈的に守らねばならぬことを今更の如く感ずる者である。此稿を草するに當り、偶々イエスの生涯に於て最も記念すべき受難週に逢ふ。ア、我等は『かく一時も我と偕に目を醒し居ること能はざるか』との御聲を憶起して無量の感慨に打れる。我等はイエスと共にゲツセマネの園に祈りて深甚なる神の苦痛を嘗めねばならぬ。

第廿七講 憂ひなき心の秘義 (約十四〇二)

最後の瞬間 鳥の將に死なんとするや、其の聲哀しく、人の將に死なんとするや、其の言よしで、人生最後の瞬間に於て、人は自ら真面目になるものである。曾て英國詩界の鼻祖 ジョフレエ・チョーサーは死に瀕しつゝ詩をつくり、ウオラーは自分が平素愛誦せるパールの詩を朗吟し乍ら死につき、近代主義の第一人者なるルーソーは將に死につかんとするに際して、其の從者に命じて自分を窓前に運ばしめ、自ら麗はしき花園に最後の一瞥を與へ、且つ自然に向つて別離の辭を呈したと言ふことである。

當時傳道の最初から弟子等に對して親切と同情と柔和とを有らしイエスは、今や牧ふものなき羊の如き弟子等の状態につきて無量の感慨に打たれ給うたのである。即ち弟子等を孤子の境遇に置かねばならぬ危機に際してイエスの抱ける憂も容易ではなかつたのであるが、弟子等が深き憂に沈み、悲に陥りたることは最もな次第である。かゝる場合に當り弟子等の野心も、希望も、計劃も悉く消失して仕舞つた。イエスの使命も、弟子等のそれ

も一見全く失敗と錯誤とを以て描かれたやうに觀えた。しかし乍ら主は弟子等に向つて心配にも、恐怖にも、失望にも、憂患にも打勝たねばならぬと命じ給うた。そこで永遠を達觀せるイエスは、超然として、彼等に勝利の秘義を暗示したのである。

神を信じ又我を信ぜし 我等がイエス・キリストを信仰する前に、神を信仰せねばならぬ次第は明白なことである。されば既にエホバを拜してゐたユダヤ人も、クリスチャンに轉せねばならぬ理由を有する。そして信仰の論理上天地の創造者てふ觀念から人類の父てふ觀念にすゝみ、同時に天父を信する信仰の中にイエスを信する事實をも含蓄するに至るのである。即ち先づ我等は人類と世界の有ゆる物を創造し給ふ神を信じ、次に人類を罪惡より贖ひ出し給ふ御子を神と信するのである。

抑もイエスは神の聖なる啓示者である。彼れなくして神につける眞の知識も神につける愛の深さも、神につける徳の聖さも諒解せられない。此に於てか我等がイエスを離れて見る神は、時としては隠れて疑はしく、時としては現はれて麗はしく、時としては恐ろしく、時としては人格者たるよりも、一種の抽象的思想に過ぎないやうに觀えて來るのである。

眞にイエスは天父を我等に啓示すると同時に、我等の心に天父を齎らし、我等の人格に天父の御像を印し給ふのである。イエスの教の著しき點は他の宗教が神を死せる儀文や、禮典や、禮拜や、供養の中に偶像視せるに反して、人類の衷情に神の御座を安置せることなのである。即ちイエスは神と人との階梯である。其の人性に於て地に觸れ、其の神性に於て天に接してゐる。そして神はイエスを梯として天より地に降り、かつ自己を人間に啓示したのである。之と同時に人間はイエスを梯として地から天に飛躍し、以て神御自身に融合しうる次第なのである。

勝利の秘義 こゝに『憂ふる』と譯出されてゐる所の原語の意味は、悲哀や憂愁などの或る種類及び此等から遣れんとする情願などを表白して居らぬ。しかし乍ら混雜、迷惑の意義を含んでゐる。即ち物が中心を離れて此處や、彼處に撞着する状態を指してゐるのである。由來地上に生活するものが困難や、憂愁から全く脱離したいと希望することは大なる誤謬である。例せば古代の『快樂主義』は快樂から來る人生の苦痛を恐れしたため、餘計な樂しみの刺撃を避け、出來うる限り悲哀を放逐せんとしたのである。近代の『快樂主義』

は一層不幸な錯誤に陥いつてゐて『短き生を面白く送りたし、我等は明日死する身なるやも計られざれば、飲みかつ食うて過さんかな』とは彼等の標語である。『ストイック主義』は血と肉とにあらざる、而も鐵と銅とを以て造られたる人間を造り、感情を破壊し、以て悲哀を除去せんと欲する。即ち人生の感性の方面を打ち碎かんと試みてゐるのである。又『浮世主義』は浮世の快樂によりて汝の苦痛を忘れよと叫んでゐる。我等は憂ある人の心は歌ふことも、舞ふことも、樂むことも能きないことを知つてゐる。そして浮世の音楽は單に皮相な肉の耳に達するのみであるが、而も靈の音楽のみは沈痛な憂ある心に觸るゝことが出来るのである。即ち萬事を理解する知識や、萬機を忘却する所爲や、將た人生を茶化してゆく生活などに眞の安心の存するものに非ず、イエスの面前に輝ける天父の限り無き愛に依頼する所の信仰にのみ屬してゐるのである。件の信仰は困難の日に於て、神の約束の中に、否無限の慈愛の中に、其の靈魂の避難所を發見すべく我等を誘引する所の指針となるのである。

更に其の秘義を明示す イエスは我等の信仰は我心を平和に處せしむることを教へ給う

た。何人も艱難を支配することは出来ないが、艱難が我等を支配することから避けうるのである。イエスは磐の上に家を建たる智人につきて語つてゐる。神は我等に暴風雨や、大洪水などを支配すべきことを教へざるも、而も此等の障害物に抵抗すべき堅固な家を建つべきことを示してゐる。神は我等に人生の壓迫的天候に主たる力を與へざるも、しかも我等の心に主たる力を授けてゐる。實に信頼は常に静穩である。自分の重荷を他の肩に置くことは何時も平安である。イエスに信頼することは限り無き平安である。我等がイエスに信頼し得るなら『最も悪しと観ゆる所のものも總て善となる』。我等に堅き信仰あらば、害悪を恐れざる莊嚴なる人生と變ずる。即ち主に信頼する人の心は、一切の苦痛を恐れないのである。

第廿八講 準備と歓迎 (約十四〇二、三)

大なる損失には大なる苦痛伴ふ 當時イエスが自己の死につきて弟子達に語り給うたとき、弟子達が**大なる驚愕と恐怖**に襲はれたことは、何人も怪しむことの出来ない場合である。かゝる離別に際して弟子達が**非常な苦痛**に陥つたことは當然の次第である。實にイエスは弟子達に取りて友人や、兄弟などの關係にて親しかつたと云ふよりは、むしろ**彼等の崇拜の目的、理意の標準、生活の生命**であつたところの**大人格**なりしが故に、弟子達がイエスを失ふことは**大なる苦痛**であつたのである。即ち**大なる損失**には**大なる苦痛**の伴ふものである。そしてイエスを識つてゐた所のものゝみが、真にイエスを失なうた苦痛を嘗めることが出来るのである。かくて弟子達の心情に充ちてゐた**深き悲み**に向つて同情にたへない所から、イエスは**一身を自分に托せよ、かつ自分は汝等のために場所を準備するぞと仰せられた次第**なのである。

堅牢なる備へ 『我れなんぢらの爲に所をそなへに往く』てふ言葉は兒童にも、文字なき

漁翁樵夫にも容易に諒解せらるゝ所である。イエスは其父の家に於て我等のために備をなした。此の備へあるが故に我等を信仰に向つて進ましめ、困難の場合にも打勝つ力たらしめ、將た之れが我等を取り圍む所の不可思議なる問題にも屈せざる勇氣を與ふる秘義となるのである。

往くことの意義及必要 イエスが往きし途はいかなる途なりしぞや。件の往くことはイエスの心裡に存する準備を示すのではない。其途は則ちゲツセマネのみち、ピラトの法廷に立つみち、そしてカルバリへのみちであつた。更に其途は十字架のみち、墳墓のみち、復活のみち、昇天のみちであつた。かくて其途は一切のクリスチャンに向つて、天國に達するみちとなり、そして父の家に於て、我等が永遠の生命を享有する特權の途となるのである。

イエスは我等のために、往かねばならなかつたから往つたのである。そしてイエスは先づ獨り往きて、弟子達を後に遺したのであるが、しかし乍らイエスと弟子達の間に関係がなくなつたのではない。即ちイエスが往つた途は愛の鎖によりて弟子達を己の許に引き寄

せんがための準備に他ならぬのである。

往く事は悲みの夕である 『往く』ことは悲みの夕に鳴る鐘の音に等しい心地がする。其

は恰も冬の寒き嵐が地を捲き去る状態に類して居る。眞に悲哀を以て充されてゐる弟子達に取りて、件の言語は曾てイエスから承はりたる言葉の中で、最も冷かなるものであつた。唯だ弟子達は『所を備へにゆく』と仰せられた言葉によりて慰藉せられたのである。元より去るてふことは、忘れるとの意味ではない。そしてイエスの奨励は單なる言語のそれではなく、實行奉仕のそれである。そして神は約束の神である。神は先づ人間に向つて地球を備へないでは、人間を地球におかないのである。そして年と共に、時代と共に、人文の發展に伴なうて我等に彌々益々其準備の擴大せらるゝことの念を強からしめらるゝのである。かくて我々は『備ふ』てふ言葉が天國に應用せられて、一層よく理解せらるゝことを認めるのである。そして又我等は何故にイエスが『居らしめんとして也』と仰せられたかといふことに就ても尙更ら理解せらるゝ。實に永い間の準備になつた邸宅は萬古不易のものであつて、決して有爲轉變のものではない、即ちその『準備』は現世の一次的準備に非

ずして、靈界の永遠的のそれである。古來神の經綸に於て常に手段と目的との間に森嚴なる關係を存してゐる。

再現は歡びの瞳である 『我れなんぢらの爲に所を備へば又來りて』とあつて、此に再現を指してゐる。天父の家には、備へられたる邸宅がある。そしてイエスは此處に我等を伴なひ給ふのである。即ちイエスは其弟子達に往くべき所を教へんがために來りて又彼等を納け、限り無く彼等と伍に住み給ふのである。かるが故にイエスの往くことは則ち準備に他ならぬのである。そして其處に再び現はるゝ、目的を以て、乃ち一切の人類と最後の一致融和を期して居るのである。

イエスの再現は世界の上に、個人の上に顯はれてゐる。多くの方法に於て、イエスは來り又來りつゝある。イエスが父の許に昇りし日から、今日に至るまで斷えず來りつゝある。即ち教會と世界とに向つて甦生の主として、生命を與ふる靈として自己を顯はしてゐる。『我れ世の終まで汝等と共に在るべし』とはイエスの約束にして、同時に實現されてゐる。特に敬畏と希望と信頼との念を以て覽望するところの者には、一樣にイエスは來りつゝある。

る。

かくて我等基督信者の信仰的實證は、イエス此處に在し給ふ、我れ彼と共に生きてふ點に存する。かるが故にも我れ我等がイエスと共に儼存するとの信仰微つせば、我等の歡喜も、希望も、幸福も自然に消失するに至るのである。そして天父の邸宅は天に在りと思惟するどき、何人も亦若やぎ來りて、理想的生活の觀念は復活し、かつ淨化せらるゝに至り、此處に於て友は友に逢ふのみならず、何處の民族にも、總ての人類にも相接する機會を獲るのである。しかし乍ら來るべき生活の大目的は、單に件の生活状態を指すに非ずしてイエスと共に限り無く在ることなのである。『我が居る所になんぢらをも居しめんごと也』神の都に輝ける尖塔は、地の幕屋に住む我等には、朦朧として鮮かに之を認めがたいけれども、而も其内部より顯はれ出る榮えの光は、半ば天の奧義を啓示してゐる。オー未知の神秘境に於て、聖愛の地に於て、永遠に一切を照鑑し給ふ父よ。希くは麗はしき常世の春の牧場に我が疲れたる、彷徨へる足を導き給へ。

第廿九講

我は途也眞也生命也

(約十四〇六)

人格の宗教と人心の要求 由來宗教には教義を本位とする宗教と開祖の人格を本位とするものがある。そこで専ら教義に重を置く所の佛陀の教に於て釋迦牟尼自身を離しても、佛教の生命には致命傷とはならぬであらう。又儒教より孔子を取り除き、『プラトニズム』からプラトニーを離し去つても、尙ほそれ〴〵存在するに差支へがないであらう。然し乍らイエスの教に於てはイエス御自身が中心で、生命で、全體であると言はねばならぬのである。かるが故に斯教に於ける教旨はイエスの人格と切つても切ることの出来ない密接な關係を有してゐる。即ちもし斯教からイエスを取り去つて仕舞ふ場合があるなら、恰も我等の體から首を切り離すと同じ運命に遭はねばならぬと思ふ。そしてかくまでイエスが斯教に關係を有する所以は、單に實行せる所を教しがためと言ふ次第のみに止らず、彼自身其根本であり、源泉であり、かつ彼に頼りて人間は神に到達し得らるゝからである。即ち『人もし我に由ざれば父の所に往くこと能はず』とは所謂『我は途也眞也生命也』

て大眞理を包容し、かつ仲保者たる人格の大切なることを表白してゐる。由來人間の要求は唯だ人格によりて満足を與へらるゝものである。我等の日々の經驗に徴し、過去の歴史に徴するも、所詮人心の變化するものも、社會の推移するものも、民族の運命を決するものも、概して抽象的眞理や、組織や、形式などによりて影響されるのでなく、現實に生きて、そして思惟し、意志し、實行する人格の感化であることを認めざるを得ないのである。そこでイエス昇天の後、基督の教會に於て、パウロや、アウガスチンや、カルビンや、ルターや、ウエスレーや、エドワーズ杯が何んなに影響を及ぼしたか判る。斯る理は政治界に於ても、軍人社會に於ても同一である。當時ウオタローにウエリントンが無かつたとせば其結果は何であつたらうか。我等は日本現代の教界にウエリントンの出現を希望するの念にたへないのである。遮莫、イエスの教は活ける人格の教である。其人格を中心とする教である。

自ら横はりて途を造る 科學者アガシスが幼時父と共にスイツランドの或る湖畔に住んでゐた時、一日其湖畔の彼岸に居た彼の父を尋ねて、兄弟なるルイスと共に、氷を冒し

てすゝんで行たことがあつた。母は案じ乍ら窓下から兒等の様子を看守してゐた。彼等は先づ難なく一面張り詰めてゐた氷の中の大きな割目の邊まですゝみ、一人の丈高き方は容易に之を飛び越えたが、一人の方は躊躇うた。此の際、母は小な方は割目に落ちて溺るゝならんと思つて氣は氣でなかつた。しかし乍ら兄のルイスは其氷の穴の中に下り、手は前の一方を支へ、足は後の方を支へつゝ、自ら橋となりて身を裂目に横へた。かくて若き兄弟はルイスの上を匍匐しつゝ、安全に越えて、それから更に父を尋ねてすゝんだといふことである。實に如是く神と人との間には容易に飛び越すことの出来ない大きな割目がある。そこで古から之を飛びこさうとして種々なる方法や、工夫を案出したのである。しかし乍ら其等の工夫は大概徒勞に歸して仕舞つた。幸ひイエスが出現して人類の爲に自ら身を横へて我等を天父の許に到らしむる途となり給うたのである。

イエスの所謂『途』は我等が暗黒と恐怖と疑惑との念に驅られて進みつゝあるものは異なりて、暗からんとする時、光を與へ、惑はんとする時、力を與へ、恐れを抱く時、望を與ふる活ける途である。我等は數ば途を見失ふことがあつて或は書物の中に、或は經

驗の中に之を發見せんと欲するものなるも、到底其途を發見することが出来ない場合がある。而も我等はイエスの中に其途を見出しうることを實驗するのである。

永へに身らざる眞理 古來イエスの如く確乎たる信念を以て眞理を表白したものはない。いかなる聰明なる人物と雖も尙ほ疑惑を以て眞理に對して居る。孔夫子さへ『我れ生を知らず、焉ぞ死を知らんや』といつて疑の調を帯び、大文豪ゲーテも亦フアウストをして眞理に對する躊躇の姿を現はさしめ、沙翁も亦ポーシヤをして、ハムレットをして、リアをして泣きかつ惑ふ所あらしめて居るではないか。しかるにイエスに於ては未だ嘗て自己の表白する所に關して毫も狐疑したことがない。そしてイエスは終始人類はいかなる思想や、目的や、希望や、將た眞理を要求するかの理を解し、かつ其等の眞理を垂示し給うたのである。しかし乍ら此處にはより多くのものを含んでゐる。即ちイエスは單に『我れ誠にくゝ汝等に告げん』といふ言葉に非ずして『我は眞也』と宣うたのである。所謂『我は眞也』との語に暗示するもの種々ある中に、イエスの全生涯、品性、人格に於て、見えざる天の父の姿がうるはしく顯現されたことを示して居る。即ちイエスは神性に關す

る真理其物である。従つて其の真理は單に抽象的のものでもなく又形容的のものでもなかつたのである。

斷えず溢れ出づる生命 『我は生命也』てふ句はイエスが我等のために與ふる力を指してゐる。即ち彼は我等に神と共に住む力や、神の中に生くる力や、希望や、意志を與ふるのである。唯だ之れのみには止まらず、人間が本來享有すべく賦與されてゐる生命である。人間は生命に向つて渴してゐる。そして永遠の生命に我等を導く者はイエスのみである。其生命は彼の人格の中に溢れてゐる。實に彼の中に我等は新しき人を發見し、又新しき靈を見出し、更に善且つ義の爲に生きんと欲する動機は斷えず新にせらるゝ。そして彼に觸れることは甦れる秘義であつて彼を信する所に永生の泉は溢れてゐる。

第三十講 慰むる者を賜ふ (約十四〇二十一十七)

歸服は第一條件なり

本講は前講に引き續いてゐて、イエスが此の世を去る前夜に於て垂示せる、いかにも幽玄にして又感動すべき一段である。『もしなんぢら我を愛するならば我が誠を守れ、われ父に求めん、父必ず別になぐさむる者をなんぢらに賜ひて限りなくなんぢらと偕に在しむべし』とあつて、斯様な條件から自から二つの結果が生じて來るのである。乃ち第一に慰むる者は歸服する弟子達に與へられ、第二に不從順な者には與へられないこの次第である。固より歸服すること、從順なることは愛の熱度を保存する唯一の方法であつて、實に至誠熱誠の試験石である。

聖書中には今日我等が數ば繰返す所の宗教なる名目を載せてゐない。乍併神、キリスト・イエス、及び愛と云ふ言葉はページからページへと飾られてゐて酷だ澤山に見えて居る。イエスは『もしなんぢら我を愛するならば』と仰せられ、そして又なんぢらは形式によつて我を拜せねばならぬとは言はずして、我が誠を守れと命せられたのである。そして

總ての誠の縮圖せるものは即ち神を愛すること、キリスト・イエスを愛すること、將た隣人を愛することなのである。眞の禮拜は心から神を愛すること、神に歸服することである。そこで單に形式上の禮拜のみを以て神をよるこぼすことが出来ること考へるのは、偶像的、反心靈的の觀念である。斯様な次第であるから我等がいに澤山な供物や、燈花などを獻げ、又様々な儀式や、虚禮などで神を祭つた所が、我等に活ける愛と心からの歸服とがな
いなら、所詮益する所はないのである。パウロの所謂『假令われ我凡ての所有を施し又焚かるゝ爲に我が身を予ふとも若し愛なくば我に益なし』との教を繰返すに他ならぬ次第となるのである。

妙なる天籟の調べ

我等とイエスとの間に二線の通信器が設けられてゐる。其の一線は『なんぢら總て我名に託て求ふ所のことは我れすべて之を行ん』といふ言葉に含まれ、他の一線は『なんぢら我が誠を守れ、我れ父に求めん』といふ言葉に含まれてゐる。そこで我等の側なる地上にかけられてゐる愛の發電器は高き彼方の天にかけられてゐるそれまで電流を波動してゆくのである。即ち我等が求め、守り、且つ行ふなら、イエスは我等

の爲に祈り給ふのである。イエスの恩寵は我等の祈禱に對する應答である。そしてイエスの祈禱は心から信頼し歸服して求むる我等に應驗し給ふ妙なる天籟の調べである。實にイエスの祈りは永遠者の意志の發表である。それ故に我等の祈禱に應じ給ふイエスの思召は天父の思召に深き因縁をもつてゐる。そしてイエスの祈るところには屹度與ふことを保證して居るのである。

靈官をもたぬ者は賜物を識別すること能はず

昔日、西洋の或處に於て不信の一醫者と敬虔なる老基督信者と對談を試みたことがあつた。無靈魂主義の醫者は信者に向つて君は靈魂の姿を見たことがあるかと問うた。之に對して信者は否と答へた。更に君は靈魂の聲を聞き、靈魂を嗅ぎかつ味はうたかとの間に對して否と答へた。そこで更に又醫者は君は靈魂を感じたことがあるかとの間に對し、信者は然りと鮮かに答へた。『私は自分の中に或るものあるを感じる。然れば君は靈魂につきて色や、聲や、香や、味などの四官を経験しないけれども、感ずることの一官を有つてゐると言つた。此に於て信者は醫者に向つて、君は曾て苦痛の姿を見たか、其の聲をきいたか、之を嗅ぎかつ味はうたかと尋ねると否と

答へた。しかし乍ら君は曾て苦痛を感じたことがあつたかとの間に對して然りと答へた。そして信者謂へらく、其感じがあれば澤山である、私は其處に苦痛の存することを證明するものである。斯様に世俗の人々も亦た靈なる者を見ることが出来ぬから靈は存在せぬと考へてゐる。しかし乍ら我等は感ずるてふ實感を握つてゐる。而も其は妄想にすぎぬ、曾て我々はかゝる感じを有つたことがないと言ふ人もあらう。誰か私に蜂蜜は苦きものであると言つたと假定せんか。私は否と答へ、且つ君が之を味うたことがないからだと云ひたい。試に之を味うて御覽なさい、屹度甘美の感じをうるに相違ないのである。

靈の働にしても、其感化を感じないで、私は其姿を認めないから、之が存在を肯がはぬと言ふことは出来まい。自然界に於ても形の見えない物がある。風の如き其一例であらう。しかし乍ら草木の動搖することによりて之が存在を感ぜざるを得ない。又電氣の姿を見た人はなからう。けれども數千哩の外まで音信の通ずる事實によりて其の力の存在を否定することは出来ないのである。斯様な次第であるからよしんば靈は我等の官能外にあるにもせよ、『靈』の働は常に我等の中に溢れてゐることを信せざるを得ないのである。しかし乍

ら俗の眼には認められない。只だ靈の眼を具ふるものゝみが之を認めうるのである。

本書特有の文字 『慰る』てふ言葉は原語の『バラクレート』(辯護者の意義)なるが、是は唯だ本書のみに使用されてゐる他の福音書には見當たらぬ。そして本書の著者に従へば、イエスの唇から四度洩れてゐる。又ヨハネ書(第壹書二〇一)に如上の文字が保惠師と譯されてゐる。兩者共固より慰むる者の意義を含んで居る、此の靈の働が我等の生を改造し、品性を高尚ならしめ、思想を深遠ならしむるのである。即ち此の靈が新たな我を醒し、より大なる自我を生み、より美はしき自我を發揮せしむるのである。眞にかゝる神秘の靈が我等の衷情に活動し始むるなら、我は神の者、神は我の者、そしてイエスも亦我者たる偉大な感が與へらるゝに至るのである。

第卅一講 心靈より心靈へ (約十四〇十八、九)

神祕は本書のアルファ也オメガ也 本書の開卷第一に「太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なり」と記載されてゐて、そもく幽玄なる神祕の消息を暗示し、そして卷を舒ぶるに従つて其の消息は彌々鮮明にせられ、本章及び次の章に於て其の頂點に達して居る。此處に「我なんぢらを捨てて孤子とせず又なんぢらに就ん、暫くせば世我を見ることなし。然ぞなんぢら我を見る、われ生ればなんぢらも生ん」とあるは、なんぢらを慰むる者なき孤子の境遇には置かぬ、われ無形の靈體を取りて汝等に臨まん。即ち昇天前四十日間並にペンテコステの日以降、厚き信仰を以て我と交はるなら、汝等の靈の眼に我が映するであらうとの意。之を換言すれば、イエスは單に或る記憶や或る模範を弟子達に遺したと言ふ意義に非ず、而も永遠に亘りて彼等を援け、支へ導き、又働き給ふことを示してゐる。そして見方の相違は肉眼を以て見たのと靈眼を以て見るのとの差である。かくて「生けるイエス」は信する者の中に宿り其等の生命を新にし、豊かにしてイエスの間斷なき生命の

活動たる意識を深甚ならしむる外なきに至るのである。「われ生れば汝等も生ん」とは實に神人融和の生活なるが、かゝる傾向は本書を縦横に貫ける根本思想である。

神祕は神祕を呼ぶ 我等近き過去に於ける日本の社會を回想するに、科學萬能主義の叫びたかく、本能的人生觀や、唯物的世界觀の流行を認め、従つて宗教や詩歌を輕んじ、人生を赤裸々となして物質的に解釋せんと試み、靈魂を度外視して人間を考査し、果ては人間を器械視して心靈を認めなかつた様な傾向があつたのである。併し乍ら人間本來の心性は決して物質的、器械的的人生觀を以て満足の出来るものでない。此を以て我が社會人士は次第に文藝に憧れ、一種の理想に憧れ、神祕を追求し、信仰を敬仰し、心靈の向上を欲するに至りて、物外に意義を發見し、そして其處に精神生活を營まんと努力しつゝあるのである。

言ふまでもなく宗教には靜思、祈禱及び活動、實行の方面がある。之を換言すれば神祕と道德との二方面があつて、もし此の一方面を缺く場合には健全なる發達を遂ぐる事が出来ないのである。我等クリスチアンの生活は一方に神祕の妙趣を帶び、他方に道德の活

躍を試みねばならぬのである。由來神秘の傾向は使徒時代より中世時代に於ける獨逸神秘派を経て近代に至るまで教會の一潮流となつて溢れて居る。件の潮流を我等の教會より取り除き去らんか、教會は一種の俱樂部と變じ、禮拜は虚禮と化し、祈禱は空を撃つが如きものとなり了らんのみである。そこで祈禱に依り、禮拜に頼りて神の靈と交はり、かつ其の祝福を求むるが如き神秘の妙用は、教會の内に跡を絶たしめてはならぬ。

神秘境の風光 由來我等人間自身に於て一の神秘を認むる。嘗てカーライルは『吾人は奇蹟中の奇蹟である、奥妙なる神の測るべからざる秘密である』と道破した。實に人間は神秘の中に神秘の生活をしてゐる。日常我等の談話の如き、交際の如き、友情の如き、接觸の如き悉く神秘の表現である。我等が他人に接觸するとき、目と目と、口と口と、耳と耳と、即ち單に我身體と他の身體との形而的接觸と思ふなら、酷た皮相淺薄と謂はねばならぬ。我等の接觸は形而以上である。即ち目と目、耳と耳以外、更に靈と靈、心と心の接觸がある。古諺にも『蹟く石も多少の縁』袖すり合も多少の縁』とある様に、我等偶々田舎の一茶店に憩ひて茶をすゝり、暫し老婆と物語をなし、やがて老婆に別を告ぐるに當り

て『然様なら』を交換する場合に於ける、其の間自ら神秘の伴ふものなしとせざるのである。又我等が音樂に對するとき、其の調べが單に聽官に響くのみに止りて、是れ以外に消息なしと思は、人の美官、琴線に接觸して生命を鼓吹する此の世のものならざる——高き、聖き、妙なる調への神秘を看逃した手落と謂はねばならぬのである。歐洲中古のローマ教會に於て、敬虔なるクリスチアンは聖堂の階段を登るに當り、妙なる音樂の調べをき、つゝ一進一歩、高き天に上るが如き心地を有したと云はれてゐるが、此處に神秘の妙用を認めざるを得ないのである。かの詩歌の如き、繪畫の如き、我等の視官に觸れ、美性に接し、そして優婉なる情性を發揮する魔力を具へてゐる。故に此等の詩歌や、繪畫は最早や單なる修辭や形式ではなく、實に或る聖きもの、象徴表現である。そして其の接觸する瞬間に於て神秘幽玄の働きが起つて來るのである。近世の神秘家ノヴリスは廿九歳の時最も愛する友を失なつたが、之がため現世と未來と物と心との脈絡を發見し、鑽物學者にも亦想像力の必要なる所以を實驗し、更にすゝんで自然萬有に對する愛と敬虔の心を鼓吹した。そして彼は、

『宇宙に唯一の神殿あり、人間の身體是也、世上豈に何物かこの高貴なる形に優れて他に神聖の者あらんや、人間の前に拜伏するは則ち肉體に顯現する神の前に拜する也、吾人も我臂をのべて此人身にふれんか、これ上帝に手をふる、也』

と謂うてゐる。ノヴリスに師事せるメーテルリングも亦た『吾人の外に大神秘界あれど、吾人の内にも神秘なる靈魂あり、此の神秘の靈魂を以て、かの大神秘界と交通すること能はざるにあらず、心の眼を開いて神秘の深奥を窺ふを得ざるにあらず、而も是れ、決して高慢な、卑俗なる智力を以て遂げられべきに非ず、謙遜なる、純粹なる、正直なる、精神の働によりて之を成しうべきのみ』

と謂うてゐる。本講中、偶まイエスの神秘的方面を學ぶに當り余はこゝに平素の所感を附記した次第である。

第卅二講 イエスの大なる遺産 (約十四〇二七)

イエスの遺産は何物ぞ 世上、往々、今將に永き眠につかんとして居る人が子供達の前途を案じ、遺族の將來を慮りつゝ、容易に瞑目することの出来ない場合がある。西郷南洲は『子孫の爲に美田を買す』といつたが、是は彼の識見から歌つたとで誰でも其の通りには行かぬ。實に何人も死に瀕しながら、自分の遺族に遺すべき産業のないほど苦しいことはあるまい。遮莫、イエスが自分の弟子達に對する遺産は何ぞといふに、或人の如く夥多の黄金や、珍寶を遺さず、或人の如く若干の土地や、山林を遺さず、或人の如く家屋や、田地を遺さず、そして又或開祖の如く莊大なる堂宇伽藍をものこさなかつた。即ちイエスには遺すべき有形の産は無かつたのである。實に『狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されども人の子は枕するところなし』と仰せられたイエスに於て、何等遺すべき物のなかつたことは當然である。斯様な事情であつたから、イエスの高弟ペテロもエルサレムの殿の美と名くる門の側に於て、人から物を乞はれたとき、『金銀は我になし、唯われにあるものを』

汝にあたふ、ナザレのイエス・キリストの名により起て行め』と答へた次第である。

世人と趣を異にする遺産 イエスは『われ平安をなんぢらに遺す』と仰せられて、こゝ

にイエスの遺産のいかなるものなるかを示されてゐるのである。イエスの生涯は終始一貫せる親切と同情と柔和と恩恵とにて充たされてゐた。弟子達が今や其恩師に別れねばならぬ危機に際して言ひがたき苦痛、憂愁に溢れたことは無理ならぬ次第なるが、しかもイエスは彼等に失望を與ふることなく、大なる慰藉の約束を遺し給うたのである。實にイエスの遺産は所謂『蠶くひ、銕くさり、盗人うがちて竊む所』の地上の財貨ではなかつたのである。今より三十年前我國に渡來して頃日に至るまで、専心一意女子教育のために盡され、門下生より聖者とまで敬仰されてゐた加那陀の一女教師は靜に病を養はんがために、數日前東京を去られた。去らるゝ十數日前、我が一人の友は同女史を病床に訪ひ、數分間相語る機會を與へられた。想ひ清く、志し高く、信仰にとみ、同情に厚く、世の名利に淡泊なる同女史は、今や事業を他に托して去ることを毫も顧慮するところなく『神は萬事を善に導き給ふ』てふ堅き信頼の言語を表彰し、かつ常に自分が好んで讀む聖句は舊約に於ては

詩篇第二十二篇、新約に於てはヨハネ福音書第十四章である。腦をやめる自分が此等を讀むとき、全く癒されたるの感を實驗する。殊に後者は自分に取て何よりの福音、慰藉、獎勵となる旨を語られたるをき、病める姉妹を慰めんとして、却つて慰められて歸つた例がある。思ふに何人も此の章を讀んで津々たる靈味を味はないものがあるまい。余が本章の講解に限り此稿を併せて七回の連稿を續けた所以も亦此に存する次第なのである。實に馬太傳山上の垂訓を以て、イエスの華やかな門出の振舞といふことが出来るなら、本章其物はイエスの大なる慰藉の遺産と謂ふべきであらう。

イエスの實驗に基ける平和 『我れ平安をなんぢらに遺す』とあつて恰もイエス御自身三年間の惡戰苦闘に於て、十分に實用し、利用したところの楯や『ヘルメット』などを其のまゝ、今ま汝等に與ふと云つた様な姿にて現はれてゐる。即ち危険な、困難な、苦痛な際に於て自ら救ひ出された經驗的事實を語つてゐる。そこで自分が實驗した平和は『世のあたふる所の如きにあらず』とあつて自然に世の者とは異なつてゐる。由來平和に二種の傾向がある。即ち活ける平和と死せる平和と靜寂な平和と動的の平和と創造的平和と滅亡的平

和とがある。こゝに我等に給ふ平安は小成や、安逸や、遊惰や、閑散や、静寂などの類ではない。しかも戦闘しつゝ、世を征服する所のものである。『我れ既に世に勝てり』この勝利である。パウロの所謂『我情をして我主イエス・キリストに由り勝をえしむる神に謝す』この勝利である。斯る言語は一見甚だ奇妙な逆説の如くなるも、此は眞の逆説にして斯様な精神の平安こそ、一切の境遇、事情、支配、束縛に超越することが出来るのである。女流詩人エリザベス・バーレット・ブラウニングは『世界に於ける最善の物は何ぞや』といへる短歌の一に於て種々な自問、自答を試み、最後に、『其或ものは世界の外に』と思惟し、然り世界に於ける最善の物は世界の外に存する或ものである、そして其或物は此世界の保ち得ざるもの、又興ふる能はざるものであると謂つてゐる。

イエスに依る者に平安あり 以太利のダンテは或時様々に彷徨うてのち、或る修道院に達し、其入口に立つと、修道者等は三度も繰回して『汝は何を要求するのか』と尋ねたが、やがて沈黙を破りて、『平安』てふ一言を以て答へたといふことである。嘗にダンテのみならず、何人も要求する所のものは平安である。かくてイエスの平安は我等の心と良心に徹

底する平安である。そして斯様な平安はイエス自ら神より獲られたのである。そこでイエスが神より獲られたやうに、今や我等はイエスに依りて獲らるゝのである。『汝等心に憂ること勿れ、神を信じ亦我を信すべし』とは本章を貫ける精神にして又尊き約束である。恰も我等が醫師の指導によりて健康を回復し、教師の薫陶によりて品性を涵養しうるが如く、イエスの慰藉により、恩化により、鼓吹によりて平安をうるのである。即ち單に官能の上に於て得らるゝ調和的平安に非ず、眞に靈の内的平安にして中心から落着くことの出る根本的な靈的遺産、靈的生命である。

第卅三講 イエスと我との脈絡 (約十五〇一―五)

空前絶後の美諭 イエスは十二弟子達を彌が上にも完全に教育したい心から、曾て傳道の序幕に於て、『野の百合花』を觀よとて、自然に宿れる眞理を提唱し、今や再び傳道の結末に於て自然てふ書を舒べて一層深き眞理を啓示してゐる。元より過る三年の生活に於て種々なる譬喩や、教訓を以て弟子達を教へ給うたのであるが、今こゝに擧げられてゐる葡萄樹と其枝との如き含蓄ふかき暗示は未だ曾てなされなかつたのである。即ち『我は葡萄樹なんぢらに其枝なり』とのかゝる麗はしき譬喩は實に空前絶後である。

斯やうな譬喩のうちに含まれてゐる眞理は何ぞといふにイエスと彼を信する者との間に存する活ける神秘、奥妙な關係である。我等は先づ斯ういふ歴史的理由を學ばねばならぬのである。

舊約時代に於てへブル民族と其教會との關係を表はすに數々葡萄樹といふ文字が使用されてゐる。即ち『なんぢぶだうの樹をエジプトより携へいだし、諸の國人をおひしりぞけて

之をうゑたまへり』(詩八十〇八)、『われわが愛する者のために歌をつくり我があいするもの、葡萄園のこゝをうたははん、わが愛する者は土肥たる山にひとつの葡萄園をもてり』(賽五〇一)、『われ汝を植ゑて佳き葡萄の樹となし全き眞の種となせしにいかなれば汝われに向ひて異なるぶだうの樹の悪き枝にかはりしや』(耶二〇廿一)、『イスラエルは果をむすびて茂り榮ゆる葡萄の樹その果の多くなるがまゝに祭壇をまし、その地の饒かなるがまゝに偶像を美しくせり』(何十〇一)等の如くなるも、へブル民族は神に佳き果を捧ぐるこゝが出来なかつたがため、眞の枝ではなかつたのである。

さて地上に植ゑられたるイエスは、佳き果を齎さざりしへブル民族とは異なりて、眞なる、善なる、完き葡萄の樹であつた。即ち荒れ果てた葡萄や、果を結ばない葡萄の種類ではなく、所謂眞の葡萄の樹であつたのである。

形の後に現はる、者は鹽也 加之ならず、イエスは自ら形的葡萄の樹と全く異なつてゐる眞のそれと呼んでゐる。其姿は弟子達の心裡に深く刻み込まれたのである。福音書に表はれてゐる姿は特別にイエスによりて描かれたものであつて單なる詩的修辭ではない。外

部に見えない世界の眞の記號である。形的發達は靈的發達の喩である。そして自然の王國は、恩寵の王國の活畫である。いかにとすれば孰れも同一の創造の手から造られ、其等の造られた物は同一の法則の下におかれ、そして同一の大君の支配の下に立つてゐるからである。かくて物質的葡萄の樹は影であつて、イエスこそ影を實體化し、實現したところの眞の葡萄の樹である。即ち神の形的創造は單に靈的內生命に關する低級の例に過ぎない。そして創造されたものがやがて神の性質に與かりうべく上進せしむる所の機關なのである。

イエスと我との人格的關係 他の章に散見せらるゝ『我は世の光なり』、『我は生命のパンなり』、『我は途なり』などいへる言葉はイエスが自分の人格に向つて信仰者の眼孔を注がしめてゐる。しかし乍ら此に所謂『我は葡萄の樹なんぢらは其枝なり』この言葉は、イエスの生命の中に信する者の生命を包容する意義を含んでゐてイエスと我との神秘的關係を表はすのである。而もイエスは『我は根なり、幹なり』と云はずして『我は葡萄の樹なんぢらは其枝なり』というて自分と教會との分つとの出来ない消息を洩し、且つ天來の植物たる彼は新種屬の本源なるが故に、之に聯絡するものは佳き果を結ぶべきことを示してゐる。

枝は聯珠の姿を要す 我等がイエスと一體なる如く、我等相互に一體となりて聯珠の姿をなさねばならぬのである。パウロは『これ體のうち分るゝことなく、諸の肢たがひに相顧み扶けためなり。もし一の肢くるしまば諸の肢共に苦み一の肢尊ばれば、諸の肢共に喜ぶなり、爾曹はキリストの體にして、亦おのゝ其肢なり』といつて共にイエスに連るべきことを教へてゐる。ジョセフ・パーカーは曰く『モーセは思想の人、アロンは辯論の人。そしてアロンはモーセに對して一の義務を有し、モーセはアロンに對して一の義務を有した。かくて一は他を補益する。何人も一人にして一切の能力を具へて居らぬ。最も能力ある人も他人の助けなくしては事を全うすることは出来ぬ。神の爲に世界を征服する大事業を爲すに當りて働きの分業が存して居る』と。實に我等は神の王國に於ける協力者同心者であらねばならぬのである。

尊き農夫の働き 神が眞の葡萄の樹の農夫であるとは何たるありがたき思召であらう。イエスは『己の意のまゝを行はんために非ず、我を遣し、者の意のまゝを行はんためな

り』と仰せられたことがある。葡萄の樹の生長發達は之を培ひ之に灌ぎ、之に注意を與ふる農夫の働によりて現はれて來るのである。實にイエスは天父の聖旨を成就すべく其智慧と勢力とは日毎々に天父によりて與へられたることを感じ給うたのである。即ち神は創造者たり又園丁たるのである。曾てギリシヤ人は人の心を天來の植物といつたが、眞理を舍める言葉であつて、天父は自分の賦與した人の心を常に培ひ、灌ぎ給ふのである。尊き農夫なる神はイエスを通して働き給ふ我等の天父である。天父はイエスによりて我等を救ひ給ふ恵の本源である。斯様な次第であるから『靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信』となり、『此約束によりて世にある所の慾の敗壞を脱かれ神の性質を有しめん爲なり』となり、『我等みな一の靈にありてバプテスマをうけ一の體となり又みな一の靈をのめり』となるのである。實に生命は根より果をもたらし、論理は結果より根本に遡るものなるが、我等はその根より發達し、そして其果によりて識らる。實にイエスに依れる其枝は佳き果を結ぶに至るのである。

第卅四講 我が往くは爾曹の益なり (約十六〇一七)

豫想されたる聖徒の迫害 本章に於て前章(十五〇八―二十四参照)の思想が繰返されてゐる。イエスの豫想せる迫害の理由は、迫害者等が天の父と其子なるイエスとの人格を理解せざることにありて存する。之を換言すれば、迫害者等がイエスの啓示せる天の父の要求し給ふ禮拜の意義及び性質を知らざる點から來てゐる。即ち彼等は天の父の要求は文字に表彰されたる形的律法を嚴守するところにありと考へ、天の父が眞に要求してゐる靈と眞理とを以て拜すべきものであることこの理を知らざるに因るのである。

イエスの達觀せる態度 イエス在世中に於ける最も著しき事柄の一は、いつもイエスが自分の前途や、其弟子達の運命などに關していかにも落ち着いた態度を示して居られたことである。イエスは眼孔中外を貫き、古今に亘れる預言者風の氣概を以て、いつも前途を眺めてゐたのである。そこで自分の進路が敵によりて阻害されてゐることをも了解してゐた。即ちカルバリ山上の十字架は自分の此世の事業の終りを告ぐる公標であつて、暗き

運命の幕の中に自分を埋めねばならぬ危機に瀕しながら、毫も狼狽するところなく、憂へざるイエスの心は實に聖なる落ち着きであつた。そして何故に斯くまで落ち着てゐたか云ふに、自分の往くのが、却つて弟子達の大きな利益であることを達観してゐたからである。即ち多くの人々が最も恐れ、哀しみ、悶に陥るべき場合に當り、イエスは獨り輝ける前途を望みつゝ、泰然自若としてゐたのである。

隠れて顯はれんための發程 『往く』といへる言葉は數々繰返されてゐる（十四〇二、二、十六〇七等）。そしてイエスに取りて『往く』ことは『我家に還る』ことなのである。しかし乍ら大なる希望を有つてゐた弟子等に於ては、大なる失望であつたのである。實にイスラエルを救はんものはイエスのみと思ひ、彼等の鶴首して寔望せる『メシヤ的王國』は彼によりて再建せらるべしと期待せるに反して、彼は十字架につくべき運命とはなつた。彼等日頃の念願は根底から覆へされて仕舞つた。斯る危機に際して弟子達の胸一杯に溢れたものは、只だ悲と苦痛と失望とであつた。さあれ、イエスは『われ真になんぢらに告ん』とあつて、我が往くことによりて爾曹に悲を惹き起さしむるが如きことあるも、却て爾曹

に取りて無上の祝福となるであらう。即ち我れ往かずば、爾曹に訓慰師來らず、もし我れゆかば彼を爾曹に送るであらう。そして彼の來るとき、罪につき、義につき、審判につき、世人をして鮮かにさざらしむるであらう。しかし乍ら爾曹は今我が告ぐるところの聖靈の働きのついては了解し兼ねるであらう。斯様な次第であるから、我は今爰に單に聖靈の眞なること、大なること、幸なることなどに關して保證して置くのみである。即ち自分が爾曹と共に存在するよりも、別れて後一層自由な、幸福な、便宜な時が來るであらうこのことを教へたのである。

不在者は或事情の下に、現在者よりも多くの感化を有す 時として不在者の感化は常に其程度に於て強烈なるもの存するのみならず、其種類に於て現在者の與ふる感化よりも、より淨きものがある。我等は時として限られたる言葉の中に鮮かに其眞理を握ることの出來ぬ場合を見るものなるが、而も不在者の遺せる其靈の感化の事實を認むるものである。我等は斯る例の一として此處にテニソンと彼の斷金の友アーサー・ハラムとの靈的交渉の一斑を擧げたいと思ふ。

曾てテニソンは逝ける友アーサー・ハラムの墓邊を徐ろに低徊し、傍に生ひ茂れる水松の蔭に黙坐せる時、日頃彼に對する愛は困惑の中にかくれ去ると共に、悲哀の念はテニソンの胸中に溢るゝに至つた。此の際彼はむしろ死の蔭を辿らんことを欲せしほど、人生の脆く果敢なきことを感ずるに至り、其苦悶は日も夜も彼を襲うて安眠の間さへも數ば彼を驚かしめたのである。斯くも悲の野、涙の谷を彷徨ひつゝ、一日友の熱き手を握れる家を尋ねて其入口に立つや、端しなく荒涼寂寞の感に打たれて悶え始めたのである。此に於て詩人は想像の翼を伸べて過去の友情を追懐し、かつ主の名の下に葬られたる彼の幸多からんことを默想せるも、而も其瞑想は失望の瞑想であつた。静けき秋の夕梢より落ち來りし一の果物によりて聊か沈黙は破られた。しかし乍ら山も、野も沈黙を守りて恰も失望の意を表すものゝやうであつた。斯る場合に於ても詩人は尙ほ『何事の起り來ることありとも、余は之を眞理と忍び、余が最も悲しめる時にも余は之を思ふ。愛するものを失ふとも、嘗て愛する者を有せざりしよりは、優れるものなりとす』と歌ひ、詩人は一旦喜の春の來るを望まざるほどであつたが、今や彼は此の悲哀の冬を追れんことを希ひ、且つ鳥

と共に歌ひ、花と共に笑はんことを要求するに至つたのである。或る夏の夕、静かなる庭園に燈を點じて、亡き友の嘗て認めける書簡を幾種類となく繰返しつゝ、讀み去り讀み來る間に、心靈の儼存するてふ幸なる視覚を認めた。詩人は俄かに恰も不在者は活きて我に接觸せしが如き状態に入つた。實に活ける靈は彼の面前に顯はれ、やがて彼は大なる力に囚はれた。そして『一語は一語よりも、一句は一句よりも、死者は過去より我に觸れたり。やがて俄に彼の活ける靈魂は我の中に閃めきしが如く見ゆ』と叫んだのである。(回想史の一節)

イエスの往くはより淨き感化を我等に與へんため、以前より、より近く我等に宿らなため、嘗に弟子達のみならず、汎く一般の者へ近かんため、そして見て信するにあらず、信じて歩ましめんためなのである。實に信仰なくば神に近づくことは出來ない。

第卅五講 聖靈と斯世 (約十六〇八一十二)

福音の使命『罪に就て曉らしめん』とある『曉』の原語は英語の『レブループ』(欽定聖書)又は『コングイクト』(改譯聖書)に相當し、不善者をして己に罪あることを自認せしむる意なるが、斯世は罪を感ずることも、認むることも甚だ乏しい。併し乍ら社會に於ける種々な苦痛は多く之に根ざして居る。だから人類の間に存する不幸や、災害や、苦痛や、困惑などを數へ来れば大概罪から發生して居る。由來罪は人生及び人類社會に荼毒を流す源泉である。社會に於ける不健全な、暗黒な、憂鬱な言葉は罪の結果を表彰するため使用せられて居る。時として彼は不正である、彼は酷薄である、彼は傲慢である、彼は肉欲である、彼は下劣であるなどと云ふことあるが、此等は人の中に深く喰込んで居る罪の代名詞である。斯様な滔々たる罪惡の流につきて、世人は酷だ知る所が少ないことを怪しまないほごに感覺が鈍つてゐるのである。嘗てグラッドストーンは『近代人の大なる缺陷は、恐らく罪惡觀の鋭敏ならざることであらう』と云つたことがあるが、斯る缺陷は洋の東西

に共通してゐるのである。

由來人類が罪につきて深甚な意識を有することは困難な業ではあるが、しかもイエスの齋した福音の全使命は此處にあるのである。即ちイエスの福音は人々をして罪につきての深甚な觀念をもたしめんためなのである。實にイエス先づ『天國は近けり悔改めよ』と説き、使徒も亦た之を説きてイストラエル人等に『其心刺るゝが如き』感を興へてゐる。即ちペンテコステの日に於て未曾有の靈的運動起りて彼等に新意識が興へられたのである。(徒

二章參照)

使命の他の側面 『かれ來らん時、義につきて曉らしめん』とあつて神の子の福音の使命は單に赦罪の點のみに存するに非ずして彼を信じ、活ける救主を信するものに新生命の勢力、新道德の動機を興ふることを宣言してゐる。かるが故に亡ぶるもの、運命は不信に由りて來る罪なのである。イエスが先づ罪につきて語り、次に義につきて語るのは自然の順序である。即ちイエスは人々の誤解せし如き者に非ず、死より甦り、且つ父の許に擧げられたる眞の教師、義の救主であつて他人に新生命、新勢力を賦與すべしとの次第なのである。

かくて聖靈は此の世界に義の存在することを曉らしむるのみならず、更にイエスの義につきて曉らしむるのである。イエスは肉をとりて現はれた。其のいかなる思想も、言語も、行爲も即ち生活全體が最も高き意味に於て悉く義であつたのである。眞にイエスは肉に顯はれた神であつた。女より生れたる者の中にイエスこそ『一切の事を完成せり』といはるゝのである。即ち彼は世界の要求に對する完全なる聖き生活の標準であつたのである。しかし乍ら此世は彼を受け容れず、神より遣はされた義の標準たる彼は拒まれたのである。光世に現はるゝも彼等の行爲悪しきを以て、光明よりも、むしろ暗黒を好む此の事や審判である。イエスは決して自己を中心とせざるも、我等は自己を中心とした。イエスの心は高き天に注がれ、彼等の心は低き地の慾望と満足とに向つて注がれた。彼は柔和にして謙れる者なりしが、彼等は心傲れる我儘者であつた。かるが故に彼等はイエスを理解することなくして、イエスが自分を神と等しきものとなせりとの口實にかりて、彼を十字架につけたのである。しかも我れ父の許に立ち歸る時、なんぢらには我を見ること能はざるも、爾曹は自分が眞理を告げたことや、爾曹が自分を罪に處せることの誤りであつたことや、

そして自分が眞に聖き者であることなどを信せずには居られない場合に逢着するであらうとの次第を教へてゐる。ブラウニングの雄篇『指環と書籍』に描ける兇漢なる良人グイドーのために残忍酷薄なる取扱をうけた純潔にして信頼すべき妻ポムピリヤが、遂に神と共に在つて正しかつたことが承認された際、彼が『カーデナル』キリスト『マリヤ』神……ポムピリヤよ、汝は彼等をして私を謀殺せしむるであらうか』と叫んでゐる物語は、恰も罪なきイエスを迫害した惡むべきユダヤ人等の態度を語り、且つやがてイエスの義の顯はれた消息を洩して居ると思はれる。

審判は義の建設也 『審判につきて云へるは斯世の主審判を受くればなり』聖靈の働きによりて罪の罪たること、義の義たることが認めらるゝに至らば、已に審判の基礎は据ゑられたのである。何となれば審判なるものは只だ義人と悪人との區別が公平に、適當に認めらるゝ事なのである。斯様な理由によりて聖靈は此世に向つて審判につきて曉らしむるのである。別言すればイエスは鮮かに此世に於ける二様の人々即ち善人と悪人と、義者と不義者とにつきて全き審判の觀念を齎らしたのである。

斯世の主とは誰ぞ 『斯世』なる言葉は此世に於て神に相反する所の集合的勢力を表白するために新約聖書の中に數々使用されて居る。そして『主』とは分つことの出来ない關係的惡の勢力、即ち惡の王國に於ける大なる活ける勢力を形成するものを指すのである。尙ほ切言せば、惡の王國に主として現在する惡靈の人格である。イエス及使徒の教に従へば、惡なる者は靈界に侵入し、之より人間に現はれるのである。

イエスによりて征服せらる 聖靈は神意に服従せるイエスが罪に打勝つたことを示して斯世の主は審判されたことを曉らしむるのである。件の惡靈は最初荒野に於て『石を變じてパンとせよ』とイエスを試み、最後に『十字架より下るべし』との叫を發せるも『事了りぬ』と凱歌をあげたイエスの爲に全く打碎かれて仕舞つたのである。

第卅六講 我すでに世に勝り (約十六〇三—三三)

捨てられたいエス うたてや、大人物程世より多く誤解せらるゝものはない。殊にイエスは古より今に至るまで、多數の人々より誤解せらるゝ方はないと思ふ。皮相淺薄な觀察者の眼孔には直にイエスの生涯は齟齬衝突の凝結の如く見ゆるものがあつた。即ちパリサイ派の人々は神の權威をもてるイエスにして能く罪ある婦人や、税吏や、罪人等と共に食し共に語り得た所以の理を解せず。そして彼の朋友門弟すら、彼の豫期せし公職と彼が企圖せし目的及び行動を悟ることが出来なかつたのである。そこで或者は彼を救主となし、或者は彼を預言者となし、或者は彼を偽りの者となすなどとりとて、彼が傳道的旅行の發程に現はれた所の優待は次第に冷遇と化し去り、初にパリサイ派、次にサドカイ派、次にヘロデの政黨派、遂には民衆相擧つて反目して立つに至り、果ては『なんぢら散て各人その屬する所にゆき、只だ我を一人のこさん』とあつて弟子達さへも隠るゝに及んだのである。そして社會上流者の誤解は其の力微弱なりと雖も、而も社會下流者より破裂し

來る旨聳の不平の聲、熱狂的不穩の態度は實に暴風によりて激浪怒濤と變じたる大洋の如きものありて存する。ア、イエスは獨りかゝる激浪怒濤の中に捲き去られて遂にゴルゴダ丘上に運ばれたのである。

天父と借にありしイエス 我れ能く孤立し得べしとの剛勝な人の唇より洩る言葉は一見壯なるが如きも、其の實神に信頼せる謙遜者の沈勇には及ばぬのである。イエスは最も能く天父に信頼せる人であつた。そしてイエスは常に『父は萬物を我に與へ給ふ』この確信を有してゐたのである。一點の私心、私慾なきイエスには管に山間の明月と江上の清風とのみならず、萬有悉く彼の爲に笑ひ、彼の爲に歌ひ、彼の爲に舞ふの美觀を呈して居たのである。浮世の外に、塵寰の外に天地を眺めしイエスの面前には、天父の物は我が物、天父の富は我が富と見え、そして天父の力は我が力と自覺と自信とは湧き來りて衷情至樂に溢るゝものがあつたに相違ない。我等凡人の場合を考ふるに、明日は將に磔殺せられんとする前日に於て何人も悲哀、憂愁胸に塞がりて、其爲す所さへも知らぬのが世の常である。實に悲風前に吹き荒み、慘雨後に降り暴る人生の危機に瀕して、毫も周章狼狽の色

なく、怨恨嗟嘆の聲なく、我が心胸に漲り溢る、歡喜の情を披瀝して『爾曹をして我にありて平安を得させんが爲也』とは何たる悠々たる至聖の至樂であらう。

靈界勝利の聲 『恐るゝ勿れ我既に世に勝り』。これ眞に凡俗社會と趣を異にしてゐる所である。或點に於て我々の成功と認むるところが至聖の失敗であり、世人の失敗と見ゆるところが反つて至聖の成功となるのである。そして世人の苦しむ所、憂ふる所が至聖の樂しむところ、安んずるところとなる。至聖は現在よりも永遠を達觀し、結果よりも主張を重んじ、人の聲よりも神の聲を聞き、自己の立場よりも聖旨の存する邊に眼孔を注いで居たのである。かるが故に失敗も、死滅も、艱難も、悲哀も、痛苦も、矛盾も永遠の面前には何等の勢力をも恣にするゝが出來なかつたのである。即ち死生、利害、是非、得喪の一切に超越せる樂境に天地悠久の心を懷きて、天父の聖旨に一任せるイエスの至樂は此世のものゝ容易に思料し能はぬ神祕である。何たるイエスの至樂、達觀であらう。

日本の論語と云はるゝ徒然草に『萬の事はたのむべからず。おろかなる人は深く物を頼むゆるにうらみいかる事有り。いきほひありとて頼むべからず。こはきものまづほろぶ。』

財多しとて頼むべからず。時のまに失ひやすし。才有りて頼むべからず。孔子も時にあはず。徳ありて頼むべからず。顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず。誅をうくる事速かなり。奴したがへりて頼むべからず。そむきはしる事あり。人の志しをも頼むべからず。かならず變ず。約をもたのむべからず。信ある事すくなし。身をも人をもたのまざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。左右ひろければさはらず。前後ごほければふさがらず。狭き時はひしげくたく。心を用る事すこしきにして、きびしきときは、物にさかひあらそひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は一毛損せず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし。人の性なんぞ異ならん。莫大にしてきはまらざる時は、喜怒是にさはらずして、物のためにわづらはす云々」と載せてある。

是の如きは佛者一流の人生觀にして、消極的傾向を表はしてゐる。之を至聖の信賴せる樂境と樂觀とに比する時は、幽谷と喬木との差を認めずには居られないのである。即ち一は「虚無」を理想とし、一は「存在」を理想とし、一は「消滅」を渴仰し一は「生命」を憧憬し、一は「静寂」を念想し、一は「活動」を希望する二者の間には、自ら人生觀に相

違を齎らすものあることを看過し去る譯にはゆかないのである。

成敗、榮辱以上に立つの覺悟

我々の生活に於ても亦イエスの其にあやかりて、かの超越せる樂境に心魂を遊ばしめ、かの達觀せる靈界に信念を運ばしめ、以て神の王國を我が心裡に打建てつ、此の人生に處して世務に當り、使命を奉じなば、所謂利害、得失、榮辱、盛衰の我心を煩はすなき絶對的信賴の恩寵を蒙むるに至るべきや疑ひなきことである。斯くて眞の事業も、眞の人格も、眞の信仰も、眞の安心も爰に存することが了解せらるゝに至るのである。即ち利害以上、成敗以上に立ちて天父の聖旨を成就するところに、實につきざる喜の泉、限りなき感謝の泉が漲るのである。此に於てか我々凡俗の境を越えて至聖の境に接近し、肉の人、自然の人亡びて靈の人、新しき人生れ出で、斷えず向上して止まぬ靈界の勝利者たり得るに至るのである。

第卅七講 イエス最後の歌 (約十七〇三)

天地に響く御聲 『永生』とは唯だ獨の眞神なる爾と其遣し、イエスをしる是なり』といへるイエスの歌『祈り』は或る點に於て最も大切な遺言である。今やイエスは時刻々十字架の危機に迫つて居る際、天地の間、再び聴くことの出来ない、いかにも森嚴な、崇高な而も簡明な御聲を發せられた。即ちイエスの危機に際して捧げたる最後の祈禱『歌』は、其の思想及び感情に於て、いかにも深甚な靈調を帯びてゐるのである。かるが故に曾てメランクトンは『天地間に於て聞ゆる聲々の中、神のひとり子の此處に捧げてゐる祈禱以上に、最も高き、最も聖き、最も莊嚴な、最も内容に富める聲はない』と言つてゐる。

余は本傳第一講に於て本傳中時としてイエスの言葉なるか、又はヨハネの言葉なるか殆んど區別しがたき程精神的融合の存することを述べて置いたが、今こゝに講じ居る一節も亦其例にしてイエス自ら語りとなすは奇態に思はれ、却つてこれ恐らくヨハネが註解的

に、翻譯的に入れたやうな文體にも見えてゐる。さあれ、此の一節を換言して見ると『父よ、爾は永生とは爾と我とを識るところに成立することを知り給ふ』となるのである。當時異邦人は眞神を知らず、ユダヤ人等さへも靈と眞とを以て拜すべき神を信するに至らず。云はゞ世界は無知と迷信と暗愚との覆物を以て蔽はれて居たのである。しかるにイエスなる眞の光り、世に顯はれて永遠に人類を照す大光明となり給うた次第なのである。

永生とは何ぞや 原語の『ビオス』も『ゾーイ』も共に『生』と譯される。しかし乍ら兩者は原語に於て異なつた意義を有つてゐる。即ち前者は重に下等動物の生を指し、短時日の存在を示すに反して、後者は最も高き概念を表彰して居る。此處の生は後者を指すのである。聖書にある『亡ぶることなくして限りなき生命を有たしめんためなり』我は復生なり、生命なり『我は生命のパンなり』等の如きは即ち是れである。そしてこの生命は世間の心配や、苦痛や、懸念や、懊惱などの上に出づるものであつて、正に新しき境遇に引き上ぐるものである。即ち物質に獨立せる生活にして所謂の精神生活なのである。さて此精神生活は遠き未來世に現はれて來る所のもののみ思ふは淺薄な解釋である。しか